
転生した無敵超人？

音無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生した無敵超人？

【Nコード】

N2575T

【作者名】

音無

【あらすじ】

ちよつぴりオタクだが、ただの高校2年生だった主人公“梅沢直斗”^{おと}は、ある日突然事故によって死んでしまった。しかし、何故か真っ白な世界にいて、そこで自称神さまに出会う。チートな能力を与えられ、アニメの世界に飛ばされる。原作知識とチートな能力を駆使して無双する直斗。はじめにAngel Beats!の世界に、続いて恋姫+無双、ネギま……と、いろんな世界を飛び回る！？主人公最強設定や原作崩壊が嫌いな方はお引き返しをオススメ致しますm()m

また、作者は小説初心者で、駄文になってしまうかもしれませんが…
頑張りますが、おおめに見てやって下さいm()m

また、更新は不定期となりますので、ご了承下さい。

ブローグ

キーーーーーっ!!

意識が遠く中で、車のブレーキの音だけが聞こえていた……

俺は……死んだ……

はずだったんだけど……？

「うむ、お主は確かに死んだのう」

……誰だよっ!?

「ワシか？ワシはのう、神じゃ！」

アホらし……なんだ？このイカれたじいさ「だれがイカれたじいさんじゃっ……！」

いやいや、あんたしか居ないと思うけど？なんか用？

「無礼なやつじゃのう……まあよい、お主は死んだが、まだまだ死ぬべきではなかったのじゃ。そこでじゃ！適当な能力をやるからアニメの世界に行ってくるがよい！」

……マジで？つかチート？アニメの世界に？行きたいかも……。俺、オタクだし。でも、何で俺なんだ？

「お主、生前はやけに不幸だったであろう？あれはな……ある一人の悪の神によってお主の幸運が全て不幸に向けられたからでな、本来お主は億万長者になってもおかしくないほどの幸運の持ち主じゃった……」

うわあ、まじかよ……めっちゃくちゃ損してんじゃん俺……（泣）

「で、お詫びにお主の好きなアニメの世界に行かせてやる訳じゃ！理解できたか？」

オッケー！で？能力って、何くれんの？

「そうじゃな……考えるのも面倒じゃし、お主の知っているマンガ、

アニメ、ゲームの能力全てでどうじゃ！」

大丈夫だ、問題ないっ！！あ、見た目は変えたいな…何かとりあえずめちやくちやイケメンにしといてよ

「オツケーじゃ！（ニヤリッ）では、先ずはAngel Beat
s！の世界じゃぞ〜ちなみに、あの世界にはお主の幸運を不幸に
変えた神がおるかもしれん…。原作なぞ無視してやっつけても良い
ぞ？では行ってこい」

ああ！いってきますっ！

そうして俺は旅立った

主人公設定（Angel Beats!編）（前書き）

遅くなりましたが、簡単な主人公設定です。

主人公設定 (Angel Beats! 編)

名前

うめざわなあと
梅沢直斗

身体能力：EX (A)

魔力：EX

知力：EX

気力：EX (B)

運氣：EX (S)

() 内は女の子 ver .

特殊能力

・ トレースソウル 形態模写：知っているマンガ、アニメ、ゲームの能力を全てコピーし、十全に使いこなすことができる。

特徴

(男の子 ver .)

髪の毛は茶色のセミロング。見た目がまず超美少女 (ややキツめの感じ) で、男女問わず惚れてしまう。身長は163cm。腕っぷしが強く天上天下天地無双。転生してから言葉遣いが何故か柔らかくなっ

(女の子 ver .)

髪の毛は朱色のロングヘア。顔つきは男の子の時より可愛い超美

少女。胸が恋姫十無双の愛紗くらいあり、身長は162cm。女の子になるとやや弱くなるが、それでもジャック・ラカンやナギ・スプリングフィールドと互角ぐらい強い。非常に優しい性格で、女の子らしい仕草を魅せる。

くイメージボイスく

男の子ver. 水樹奈々

女の子ver. 日笠陽子

(ただし能力を使えば声は自在に変えられる)

Welcome to heavens world

「んっ…ここは？」

俺は知らないところに倒れていた。しかし、見覚えのあるところ。

1、2年ほど前にテレビアニメで観た世界と全く同じだった。

「夢じゃ…なかったのか……。ん？」

ふと自分の声に違和感が感じられる。まるで女性のような綺麗に通った美しい声だった。さらに、服装が……

「何で女の制服なんだよ……。まさかっ!？」

バツ…とスカートをめくりあげ、自分の急所を確かめる。一応男であつた。

「よかつた…でも、何で女の制服になつてるんだ？そつだっ………はっ!」

神によって手に入れた能力を使って、鏡を作り出す。

そしてそこにうつつたのは……

「な、なんじゃこりゃああー……っ!？」

髪は茶色のセミロング、目元はパッチリした二重の灼眼で、身長もおそらく160くらいで、スタイル抜群のモデル体型。どう見ても美少女だった……

「俺、イケメンにしてくれって言ったのに…（泣）まあいいか…」
ガツクリしつつ、立ち上がろうとした…その時、
（パアーン）
「っ！？銃声！まさか、原作キャラ達かっ！！」

直斗は急いで走り出した

「?????sideeー

直斗がこの世界に降り立ったのと、ほぼ同時刻…

「（くっ…今日はやけに天使がしっこいっ！！）日向君っ！椎名さんっ！お願いっ！」

「ああ！（分かった！）」

日向と呼ばれた少年が銃を構え、椎名と呼ばれた少女は短剣で天使と呼ばれた少女を追い詰める。

「ガードスキル…ハンドソニック…」天使は腕から刃物を生やして

対抗する。

(キイーン！キイン！)

何度も打ち合う音が鳴り響く。

「椎名つち！どけっ！」

日向が叫ぶと、それに反応したのか、

「くっ！浅はかなりっ！」

椎名が下がり、絶好のタイミングで…

(パーーン！！)

日向が銃を放つ。銃弾は天使の足に命中し、天使の動きが止まる。

「日向君、珍しくナイスよ！」

「ゆりっぺは一言余計だっつーの！」

「ゆりっぺさん、此方はあながち終了しました。これより本部に帰還します」

ゆりっぺのトランシーバーに連絡が入る。

「わかったわ、遊佐さん、ご苦労様」

日向達と天使の様子を見て、

「さてと、天使の足止めはこれくらいでOKね…」

そう言って帰ろうとしたのだが……

「あっ！すみませーん！」

と、突然遠くから声がかかった。どうやら女の子のようだ。

「あらっ？あの娘は……？」「ゆりっぺ（？）が見つけたのは……」

・直斗 s i d e ー

「（やっぱりゆりっぺじゃん！それに、日向や椎名も…奏ちゃんも居るな）あっ！すみませーんっ！」

ゆりっぺに声をかけてみる。

どっちらこちらに気付いたようだ。日向も一緒に近づいてくる。

「はじめまして、私は仲村ゆり。貴女の名前は？」

「（第一印象って大事だよな…）はじめましてっ 僕は梅沢直斗っ
ていいますっ！よろしくお願いしますねっ（ニコッ）」
直斗は笑顔で返す。

「（おお、ゆりっぺと違ってめっちゃ可愛いじゃん！）はじめましてっ！俺は日向だ。よろしくな、直斗ちゃん」

日向は直斗の笑顔にデレデレしながら挨拶をする。

「それにしても貴女、何で直斗って名前なの？まるで男の子みたいね…」

まあ見た目はどう見ても女の子なので、ゆりの質問は、あながち間違った質問でもない。

「ああ、やっぱり勘違いしてる…あの、僕は男ですよ？」

「ああなるほどね……………って、はあっ!？」

ゆりはノリッコミ(?)で反応する。

「いや、だから男ですって…」

「いやいや、直斗ちゃん…ゆりっぺと比べ物にならないくらいに可愛いのに、男なわけないっしょ…?大体、その制服は？男なら黒い学ランのはずだぜ？」

その瞬間、ゆりの目が異様に恐かったのを、日向は見逃したが、直斗は見逃さなかったので、フォローと本音を交えて、

「むう…知らないですよ…気付いたらこのカッコだったんです！大体、ゆりさんは超美人ですよ？男の僕と比べるなんて失礼です

！ましてや僕のほうが可愛いなんて……／＼／

男のはずなのだが、見た目が女の子になってしまったせいか、少々性格まで女の子らしくなってしまった直斗であった（笑）
可愛いと言われて少し顔が赤くなる。

「あら、美人だなんて 日向君は後で死刑ね……」

「なっ！？つーかやつぱ信じられねえわ…直斗ちゃん…可愛すぎ…」

「まあいいわ、それより貴女、死んだ世界戦線に入らない？」

「おいおいゆりっぺ、またいきなり過ぎると勧誘に失敗「良いですよ」「ほらな、やつぱり失敗……っていいのかよっ!？」

「はいっ
」

「あら、仲間入りまでの最短記録、更新ね にしても、やけにすんなり入ったわね……」

「とりあえず、その戦線の他のメンバーに会わせて下さいよ」

「ああ、そうだな、ゆりっぺ！本部に戻ろっぜ！」

「ええ！直斗君、ようこそ、死んだ世界戦線へ！」

「はいっ よろしくお願ひします！」

本部に行きながら、俺は戦線についての説明をゆり達から受けた（
まあ原作を知ってるから解ってるけどな）

こうして直斗は死んだ世界戦線に入隊したのであった。

「あ！奏ちゃんに声かけるの忘れてた…！」

W e l c o m e t o h e a v e n s w o r l d (後書き)

こんな駄文を読んで下さいます、ありがとうございますm(―
―)m

感想など、お待ちしております。

中傷などではできるだけ優しくお願いしますm(――)m

Team『SSS』（前書き）

第二話です。駄文です。

今回は本部にての戦線メンバーとの絡みになります。

それではどござ（＾o＾）ノ

Team『SSS』

(ガチャ)

「皆！新しい仲間が増えたわ！」

ゆりが本部のドアを開けて中に入る。続いて椎名、日向が入っていく。

「梅沢君、入ってきて」

「は、はい！失礼しますっ！」

半分上ずった声をあげて中に入る。中には戦線の主要メンバー達が集まっていた。

「……………えと、梅沢直斗っていいますっ！よろしくお願いしますっ！」

(シーン……………)

あれ？何かミスった？

「な、なあ、君、彼氏とかいる？」 藤巻

……はい？

「うおおーっ！！やっべーマジタイプだわ！」 藤巻

「うむ、好みだ！」 松下

「うわあ、こんなに可愛い娘見たことないや！」 大山

「い、いかん……俺にはゆりっぺが……」 野田

「Oh! Very cute！」 TK

「ふーん、見た目的にはなかなかステージ栄えしそうじゃん……ガ
ルデモに……」 岩沢

なんかとりあえず女の子だと思われてるんだな…
まあこんなナリじゃ仕方ないケド…

「あの、僕、男なんです」

.....「」「」「」「えーーーーー！？」」「」「」

「まあこんなに可愛いんだもの、間違っても仕方がないわよ……」

「なあゆりっぺ、マジで男なのか？」

「藤巻君、気持ちは分かるわ……でも事実よ……順応性を高めなさい、あるがままを受け入れるのよ……」

出た！順応性を高めなさい！ゆりっぺの名ゼリフ（？）その1だ！

「」「俺たちの恋は……一瞬にして砕け散った……」「」 男共

「……とりあえず改めて自己紹介ね。私は仲村ゆり。仲間は親しみを込めてゆりっぺと呼ぶらしいわ。梅沢君、よろしくね」「

「はい、ゆりっぺさん、よろしくです（ニッコッ）」

「（ホントにこの子男の子なのかしら……可愛すぎよ……／＼／）」

なんかゆりっぺ顔が赤いや…暑いのかな？

「俺は日向！ひなっちって呼んでもいいぜっ！」

「結構ですっ よろしくですっ」

「さらっとなられた……ガクッ」

うわぁ ガクッとか口で言う人初めて見た〜（笑）

「こんにちは。僕は大山って言っんだ。よろしくね」

「（ホントに特徴無いんだなあ……）よろしくお願ひしますっ」

「俺は藤巻だ。まあよろしくな！」

「（この人も地味だね〜）よろしくお願ひしますっ！」

「俺は松下。皆は松下五段と呼ぶ。よろしくな」

「（確か柔道五段だったっけ？）よろしくですっ」

「野田だ……」

「（バカだ）どうも、梅沢です……」

「私は岩沢。ねえ、バンドとか興味ある？」

「（出た！岩沢さんの音楽キチ！）少し興味ありますね バンドや
つてるんですか？」

「ああ、Girls Dead Monster、略してガルデモ
って言うんだ。あんた良い声してるし顔も綺麗だ。男でも構わない
な。バンドやらない？」

「考えておきますね」

「ああ、頼むよ」

いきなりガルデモに勧誘されちった まあ知ってるマンガの能力っ
てことは、けいおん！とか、それこそガルデモとかの楽器のテクニ
ックとかも付いてるはずだね！入ってみよっかな っと、

「浅はかなり……」

「彼女は椎名さん、『浅はかなり』以外の言葉はほとんど言わないわ」

つと、自己紹介の途中だった！

「よろしくね、椎名さん！（ニコッ）」

「あ、浅はかなりっ！／／／」

へっ？何が？

「Come on Let's Dance！」

「いやいや、踊らないよ……」

「彼はTK。それが名前なのかすら分からない、正直言って謎の人物よ」

「謎だらけですか……よろしくですっ」

「OK, nice to meet you!」

「他にも今にはいないけれど、高松君、ひさ子さん、入江さん、関根さん、遊佐さん、チャー、その他にもたくさんメンバーがいるわ。そして私たちの目的は……」

ゆりっぺが真剣な表情になった……

「私たちに理不尽な人生をおくらせた神への反逆、復讐よ」

「まあホントに神様なんかいるのかも怪しいもんだけどな」

日向が半分茶化しながら言う。

まあ原作では結局神は見つからなかったけどね。でも……

「いますよっ」

僕は知っている。

「……………えっ!？」

僕が生前に不幸な人生をおくることになった元凶……

「神は……この世界にいます」

僕を送り出した神様から聞いた、悪の神は……

「貴女この世界に来たばかりよね？何故そんなことを知っているの？貴女は何を知っているの？答えて」

この世界にいる……

「分かりました。全部話します。」

皆は息を飲んだ……

空気が重い。

「今から言うことは事実です。でも、皆さんには信じてもらえない

「かもしれません…信じる信じないは自由です」

「……聞かせてちょうだい」

「僕は……」

「転生者です」「転生？ここは死んだ後の世界よ？仮に転生というものが実際にあったとして、それなら貴女、ここにはいないはずよね？」

「まあ話を最後まで聞いて下さい。まず、僕の生前の話になります。僕は、人一倍不幸でした」

「不幸？」

「はい。軽いもので言えば、通る信号は必ず赤、自販機にお金が入り込まれて出てこない。そして重いものなら、工事現場の近くを通

ると必ずと言っていいほどの確率で、大量の鉄骨が落ちてくる。コンビニで買い物をしていて大型トラックが突っ込んで来て大怪我というのも、多々ありました。」

「……確かに不幸ね。でも、それは転生とは関係ないのではないかしら?。」

「いえ、大有りなんです。その不幸は全て……一人の悪の神によって行われたことでした。」

「なぜそうなるのかしら?。」

「信じられないかもしれませんが、僕が死んだ時、別の神様に会ったんです。そして謝られました。『自分たちの同類がすまない』って。そこで色々聞かされました。僕が不幸だった理由。それは悪の神によって僕の幸運の力が全て不幸の力に変えられていたせいだった。だから、人生の中で僕は一度たりとも良いことはありませんでした。」

「それから?。」

「神様は、お詫びとして僕に能力と新たな人生をおくるチャンスをおくれました。」

「能力って？」

「僕が知っているマンガ、アニメ、ゲームの能力ならどのようなものでも使えるという能力です」

「ホントに？やって見せることは出来るかしら？」

「可能です。そうですね……」

僕は辺りを見回し、そして椎名の所で視線を止める。

「椎名さん、少し体、切傷がありますね」

皆も椎名に目を向ける。

「あら、ホントね。さっきの天使との戦いの傷かしらね？」

僕は黙って椎名に近づく。そして手を向けて一言こつ言った。

「ケアル」

淡い光に包まれて、椎名の体にあった切傷が一瞬にして消えていった。

「……………本当のようね」

「はい。まあ正直チート過ぎますね。で、この力を貴女方に貸そうかと」

「どうしてかしら？」

彼女は分かかって言っているのであろう。
僕はニヤリと笑ってこう言った。

「悪の神に……………復讐するために」

その瞬間、ゆりから発せられていた、疑っている雰囲気はなくなっ
た。

「信用するわ。貴女の眼は嘘を言っている眼では無さそうだもの。
私と同じ眼」

「では、仲間の印として、僕が神様から聞いたこの世界の情報（ホ

ントは原作知識だけどね（をいくつか教えます」

「この世界の？何かあるのかしら？」

「では一つ目。この世界では、人が消えていったりしますよね？」

「ええ。天使に何人も消されたわ。他にも授業をまとも聞いた人間は何人が消えていったわね」

「その情報は少し間違ってますね」

「そうなの？」

「はい。この世界では、満足した、つまり、生前の心残りが解消された人が消えていきます。例えば、さつきゆりっぺさんが言った授業を受けて消えた人は、生前学校に行きたかったが行けなかったりして、学園生活をおくれなかった人で、授業を受けることが出来たから消えたということです」

「つまり、天使は関係ないのかしら？」

「はい、全く。」

皆あんぐりしてる……
まあ仕方ないよね。今まで天使と戦ってきた事は無意味だと言われ
たも同然だもん。

「ちなみに、満足したりさえしなかったら半永久的にここに居られ
ますよ?」

「……そうなの?」

「はい。では二つ目。この世界には三種類の人間がいます。(原作
なら二種類だけど……)」

「俺たち人間、NPC、天使ってことか。それなら俺らも知ってる
ぜ?」

「いえ、違いますよ日向君。まずは僕たち人間。そして人間の形を
した人為的に造られた者たち……まあ皆さんが言うNPCですかね。
そして、神通力のような悪意の塊。おそらく神ですね。何処かはあ
まり分かりませんが、この学園内にいますね。」

「っ!?!それは本当なの!?!」

「間違いないかと」

「ちょっとまってよ直斗ちゃん！それだと天使はどうなるんだよ！？」

「直斗ちゃんは止めて下さいね？天使は……私たちと同じ人間ですよ？」

「は？」

「だから、人間ですよ？」

「いやいや、んなわけねえだろ！だって腕から刃物を生やすんだぜ？銃弾を跳ね返すんだぜ？人間じゃ無理だろ！」

「待って、日向君。もし天使が梅沢君と同じく転生者だったら……」

「うーん、多分違います。さっきちらつと能力を使うところを見ただんですけど、機械的なもので能力を付加してるんだと思いますよ？」

「……天使エリアに有ったパソコン。怪しいわね」

大当たりですよ。頭良いですね。それとも勘がいいんですかね？
とにかく凄いです！

「今度、もう一度侵入を試みましょう」

「そうだな。前は結局パスワードで引っかかって何にも出来なかつたからな」

「浅はかなり……」

全くですね。浅はかです（笑）

「まあ今必要な情報はこれくらいですね」

「ありがと。貴女のおかげで色々助かるわ」

「いえいえ、このくらい、とーぜんですよ」

「皆！これを踏まえて今後とも頑張るわよ！」

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」
おつっ！（ああ！（うん！（」「」「」「」「」

「

「そっだ、そういえば梅沢君ってガルデモに興味あるのよね？」

「え？あ、はい！出来れば入りたくなって考えてますけど…」

「うおっ！岩沢さん、めっちゃ眼えキラキラしてるし！

「貴女、何か楽器は出来るの？」

「えと、多分ですけどギター、ベース、ドラム、キーボード、トランペット、サククス、トロンボーンとかのバンドに必要な楽器は弾けると思えますよ？」

「い、岩沢さんの眼のキラキラが三倍位に増したっ！？

「凄いわね…。でも、能力を考えると戦闘にも使えるし…。でもガルデモの士気が上がるのは…（ブツブツ）」

「ねえ、直斗…だっけ、これ、弾いてみて？」

渡されたのは岩沢さんのギターとアンプ、そしてcrowsonの楽譜。

「分かりました。では……」

（　　）
ギターを鳴らし、イントロを弾く。やはりギターのテクニックも備わっているようだった。

「 背後にはシャッターの壁、指先は鉄の匂い」

気持ちいい！生前より声も綺麗にでる！音程だって楽に合う！
凄いや！楽しいっ！楽しいっ！楽しいっ！

「 find way、ここから、found out、見つけ
る」

皆が僕の演奏に見とれてる！
こっこのも、悪くないな。

（ジャーーンっ！）

演奏が終わり、一瞬の静けさ。そして……

（ワァァーっ！）

歓声が上がる。

「すげえよ直斗ちゃん！マジで鳥肌たつたわ！」

「凄かったわね、初見であんな演奏が出来るなんて。想像以上に音楽のスキルが高いわ。やはりガルデモに（ブツブツ）」

「直斗、一緒にガルデモで演ろう！あんたとなら、凄く良い音楽が出来そうだ」

「皆、ありがとうございます。ガルデモ、入らせていただきます。よろしくお願いします！」

ガルデモか……。

楽しみだな……………っ

ちなみに、このあと渡された戦線の制服は……女子用だった。

Team『SSS』（後書き）

最後まで読んで下さいます。ありがとうございます。——

今回は直斗、初のオペレーショントルネードです！

ではまた（＾o＾）ノシ

Meeting(前書き)

お待たせしました。

第三話です！どうぞ

Meeting

僕たちは今、ゆりっぺに集められて戦線本部に居る。

「さして、集まったわね？皆、そろそろ久しぶりに、アレをやるうと思っのー！」

皆の顔が真剣になった。

「アレ？アレってなんだよ、ゆりっぺ？」

日向分らないのかな？アレって言っつと…

「オペレーション・トルネードよ！」

……だよね

「久しぶりにデカイのが来たな…」 松下

「マジかよ…、こりゃあ大変だぜ……」 藤巻

「浅はかなり」 椎名

トルネードって、単なる巻き上げだよね？なんでそんなに深刻な表情になるんだろ…？

「なあ、ちよつといいか？」

「あら、日向君？何かしら？」

「天使つて、人間なんだよな？それが分かった以上はやっぱ撃つのはまずくね？」

確かに。今までは人じゃないと思ってたから撃ってた訳で、そうじゃないと分かった以上はマズイ。

……まあ人じゃないからって撃つのもどうかとは思っけどね……

「それは私も考えたわ。でもね、あの娘だつて、私たちが人間だと分かっているながらhandsonicで刺しているじゃない。そもそも話し合いなんて方法は通じない。日向君だつて長い間戦ってきたんだから分かるでしょ？」

「……まあな」

少し納得がいつてない顔だなあ……。まあ気持ちは分かるよ。

「それにもう一つ。梅沢君の情報によればあの娘の能力は機械的なもの。そんな機械、誰が創った？彼女はどうやって手に入れた？怪しすぎない？梅沢君は何か知ってる？」

原作にそこらへんの事はあんまり出てこなかったしな……。創作者は今NPCになってるって話らしいけど、それも確かではない。だ

から答えはN oだ。

「分からない。その事は何も聞かされてないから……」

「いいわ、で、ここで本題。あの娘は誰にその機械を貰ったのか。もしくはどうやって手に入れたのか。何かしらの部分で神が関わっている可能性も十分にあるわ。だから、それが分かるまでは彼女は敵。今までと変わらない、天使として扱うわ。皆も、わかったわね？」

「コクッ」

「よろしい。さて、話を戻すけど、今回はいつもどおりの配置でいくわ。各自、自分の配置を確認しておくように」

いつもどおりのって、僕は……？

「それと、今回のオペレーションは梅沢君はガルデモに入ったばかりで、イマイチ勝手が分かりづらいと思うの。だから、今回は皆と一緒に天使の足止めよ。梅沢君は大食堂の近くに配置するわ。貴女はチートな能力を持っているし、天使にも対抗出来るはず。いいかしら？」

「オッケー、任せて」

ガルデモとしてのデビューが先送りになっちゃったのは残念だけ
ね…

「オペレーション開始時刻は18:00よ。それまで各自解散!」

こうして僕の初めてのオペレーションが始まりを告げるのであった。

Meeting(後書き)

オペレーション・トルネードまで入れませんでした。すみません
m
—
—
m

感想、アドバイスなどお待ちしております(^w^)

First Mission『Road』(前巻)

オペレーション・トルネードです。はじめ

First Mission『Tornado』

P・M・17:58

オペレーション開始時刻まであと2分。僕はゆりっぺの指示通り、大食堂付近に待機していた。

『梅沢君、聞こえる？解つてると思っけど、もうすぐオペレーション開始よ。何処かで銃声が聞こえたら、駆けつけてあげて。じゃあ、検討を祈るわ』

一方的に指示だけを言われて通信を切られた。

「……返事くらいさせてよね……」

P・M・18:00

（　　）

ガルデモの演奏が聞こえてきた。流石に上手い。生で聞くと、迫力が違うな…。と、演奏に聞き入っていたその時。

「（パアアーン！！）」

「っ！？銃声っ！！」

音は椎名がいるはずの方から聞こえてきた。

急げば大丈夫だよねッー

僕は演算を開始し、レポートを使って椎名のもとへととんだ。

↓椎名 s i d e ↓

くっ……！

天使は私の所に来たか…。

正直に言ってかなりピンチだ。

天使は既にhand sonic distortionを展開している。しかも、今日のhand sonicはいつもと少し違う。薄くて長く、攻撃性が増した物だ。

天使は確か、『hand sonic.ver.2』と言っていた。初めて見た能力だった。

しかもver.2ということは、まだ先がある可能性だって無いとは言いきれない。

……どうすれば……。

(ブンツーーー!!)

考え事をしていた椎名に天使の刃が向かう。

「……………!!?」

思わず目を瞑ってしまう。

やられた……は……はずだった。が。

『ギーーーーンっ……!!』

かん高い音が辺りに鳴り響く。

「私は……斬られて無い?」

そして顔をあげると、そこには――

「助けに来たよ！椎名ちゃん！」

女神のような笑顔の少年が居た……。

――直斗 *side*――

(ヴンっ！)

レポートをした先は、女子寮付近の橋。原作では音無が守っていた辺りだ。

「ふう、ついたかな。っと、椎名ちゃんは……っ！？マズイっ！！」

その視線の先には不意を付かれているのか、動けない椎名と、hand sonicしかもver.2を降り下ろす奏ちゃんが居た。

「間に合ってくれよっ!!」

走りながらウエポンARM・リングダガーを展開する。そして奏と椎名の間に割り込み……

『ギーーーーンっ!!』

「助けに来たよ!椎名ちゃん!」
笑顔で一言そう言った。

「(ふう〜、間に合ってよかったあ……)さてと、ここからは僕が相手するよ、天使ちゃん!」

奏ちゃんに向かって叫ぶ。

「……私は天使なんかじゃないわ?」

「うん、知ってるよ〜 私たちとおんなじだよね?」

「……貴女、ホントに戦線メンバー？私の話、まともに関く人は初めて見たわ……」

今までホントに何してきたんだよ……。

「えと、新入りなんだ！梅沢直斗。よろしくね」

「?????どうして男の名前なのかしら……?」

やっぱり突っ込まれたか……。

「……僕は男だよ、一応」

奏ちゃん、驚いてるのかな？表情は全然変わってないけど。

「ま、大事な仲間を傷つけられた訳だし、敵討ちといきますか!……
…魔道具・風神っ！いけっ！鎌鼬っ!!」

風の刃が奏に向かって3つほどとぶ。

「っ!? Gird skill、distortion!」

三発とも防がれた。でもね、それはただの罠。

「居ない？……………っ！！」

「今更気付いても遅いよ。爆裂拳っ！！」

『ドガッ、ドガッ、ドガッ、バキィーっ！！』

「ーっかはっ！！」

合計4発の打撃が炸裂した。攻撃力もチートな僕が放ったんだから、破壊力も半端じゃない。

「悪いね。でも大丈夫。峰打ちだから」

「いやいや、打撃に峰打ちはないですから……………」

この、ねちっこいッッコミは……………日向君？というか今更来ても意味無いよね〜」

「声に出ています……………。っーか俺ってねちっこい？」

ありゃ？声に出たかwww
って、他の皆も来てたんだあ……………。影うすいな」

「「「「「だから声に出てるって！っーか影薄いつ！？」」「「「「「「

わぁ 息ピッタリ

「っと、椎名ちゃん、大丈夫？怪我は……切傷がたくさん！ケアル
ラっ！！」

『パアア……………』

光に包まれて、昼間と同じように傷が癒えていく。

「ふう、これでよし！でも、椎名ちゃんは可愛い女の子なんだから、
無茶したら駄目だよ？」

「か、可愛っ！？あ、浅はかなりいいっ！！！／／／」

何か叫んで走っていった……。

「あっ！確か食券っ！……って、皆何もしてないのに、もう向か
ってる！？」

直斗が椎名を治し終えた辺りから、皆は大食堂に向かって歩き出していた。

「（ムカツ！）テレポートして先に行つて、食券全部回収してやる！！えいっ！！」

その後、何もしなかつた戦線メンバーは、直斗に土下座して食券を分けて貰つた。その時の直斗、はちよっぴりいい笑顔だつた……

First Mission『Tornado』(後書き)

……天使ちゃん、即死でした。なんか色々すみませんm(|) m

今回は椎名にフラグを立てました！

作者は椎名が大好きです。

勿論音無さんは気高い貴族であります(笑)

まあ全キャラ好きなんですけど……(笑)

ではまた次回(^o^) /

次回辺りには音無さんを出したい……

N e w m e m b e r ! (前書き)

音無君が登場です!!

かなり無理矢理話を入れたので、何時にも増して駄文です…。すみません。

とりあえずどうぞ (^o^)/

New member!

「遊佐さんから新しい情報が入ったわ。グラウンド付近に新しくこの世界にやって来た人間が居るらしいわ。でも、現在グラウンドには天使が居るわ。だから、新人の勧誘に、そうね……。日向君、梅沢君、ついてきてちょうだい」

その場所で現れた新しい人間って……音無？

「ま、しゃーねえな。直斗ちゃん、行くつぜ」

「だから直斗ちゃんは止めて下さい……。行きましょう、ゆりっぺさん」

「ええ、そうね」

（イングラウンド）

「さてと、新人は何処にいるかね〜っと…」

「ゆりっぺさん、アレじゃない?」

遠くに倒れている少年を指差して言う。

「そう……みたいね、見覚えの無い顔よ。じゃあ、私と梅沢君で勧誘して来るから、日向君は見回りでもしていてちょうだい」

ゆりっぺさん、この世界の人間の顔、全部覚えてるの……?」

「え〜、俺だけ面倒くせえ役回りじゃねえか……。まあ行ってくるけどよ……」

「なんかゴメンね」

「いやいや、直斗ちゃんは気にすんなよ?別に悪いことなんかしてねえしな」

「じゃ、そついう事で。日向君、よろしく」

「お前は少しは気にしろよ...」

文句をたれつつも、歩いていく日向君であった。

「さて、私たちも彼の所に行きましょう」

「side??」

「.....はっ!」

目が覚めると、何故か俺は学校のような所に倒れていた。

「ここは...?」

「目が覚めた?」

近くから、女の子の声が出た。見ると、そこには二人の女の子が居た。

「こんにちは」

「あ、ああ……どうも」

茶色の髪の毛の方の女の子が此方に寄ってきて挨拶をしてきた。反射的に俺も挨拶を返す。

「信じられないと思うけど、よく聞いてね？」

「……なんだ？」

「此処はね、……死後の世界なんだ」

「は？」

意味が分からない。いきなりこんな所に連れてこられ……ん？
何でだ……記憶が……無い。

「貴方は一度死んだのよ。順応性を高めなさい、有るがままを受け入れるのよ。」

今度は紫っぽい髪の子が言う。つーがこの女、グラウンドに銃を構えて…？

「貴方にも、死んだときの記憶が有るでしょう？よく記憶をたどってみなさい」

「……いや、何も思い出せない」

「ああ、そういうケースね、たまに居るのよ、死ぬときに頭を強く打ったりして、記憶を無くしているのね」

「……それより、それ、本物の銃か？何故そんなものを…？」

「あれよ、あれ」

クイクイっと女の子が指を指す。その先に居るのは………

「天使よ」

「天使？どう見ても普通の女の子じゃないか？」

「うん、まあ色々あるんだ。とりあえずさ、僕たちと一緒に来ない？この世界について色々教えてあげるよ？」

どうやら此方の女の子はまともなようだ。知らない土地に一人つていうのは正直不安だ。信用した訳じゃないし、話を全て信じた訳でもない。けど、情報は必要だ。

「分かったよ。教えてくれるか？」

「勿論よ、自己紹介がまだだったわね。私は仲村ユリ。よろしく」

「ああ、よろしくな」

「僕は梅沢直斗だよ。一応言っておくけど、男だからね？」

「……………はい、今…何て？」

聞き間違えが有ったような？

「だ・か・ら、男の子だって」

「……………ええー！ー！ー！っ！？っ！というか嘘だろ？何処からどう見ても女の子だし、声だって女声だろ！！第一、お前、女子の制服着てるじゃないか！！」

信じられない。こんなに可愛い娘が男だっ…？

ー直斗s i d eー

「ええー！ー！ー！っ！？っ！というか嘘だろ？何処からどう見ても女の子だし、声だって女声だろ！！第一、女子の制服着てるじゃないか！！」

そう、皆さんお忘れかもしれないが、僕は女子の制服を着用している。

え？ち、違うよ！！僕の趣味じゃないよ！！？ゆりっぺさんが無理矢

理着せたんだよ!!

「梅沢君?そういうメタ発言は駄目よ?」

な、何故分かった……!!?

ゆりっぺさんはエスパーなのか…?

「め、メタ?仲村は何を言っているんだ?」

ほら!!音無君が混乱してるじゃないか!!

「気にしないで。後、私のことは『ゆり』でいいわよ。まあとりあえず、本部に戻りましょう」

「そっだね、行く」

「あ、ああ…// (ホントに男なのか…?可愛すぎるっ!!)(」

「????」

音無君、顔が赤いけど…?

まあいつか 帰ろつと！

……あれ？何か忘れてるような……？

―日向sider―

「ったく……ようやく一回り出来たぜ……。ゆりつぺも俺の事こき使
いすぎなんだよな。それに比べて直斗ちゃんは優しいよなあ。俺
の事心配してくれたし……。あゝあ、直斗ちゃんが女の子だったらモ
口にタイプなのによ……。っと、確かこの角を曲がった先だったよな。
おい、ゆりつぺ、直斗ちゃ……。んって居ねえっ!？」

その後1時間ほど二人を探し続けていた日向であったとさ (笑)

「ゆりつぺえー！ー！ー！ー！直斗ちゃあーん！ー！何処に居るん
だあー！っ!？」

New member! (後書き)

今回は音無君が奏ちゃんにぶっ刺されるシーンはカットしましたが、重要な絡みなので、何処かには絶対に入れますのでご安心を！
何処に入れるかは読んでからの楽しみですよっ

まあそんなに先にはなりません。次回かその次、そのさらに次の何処かに入れますよ

ではまた次回(^o^)ノシ

Guild (前書き)

ギルド降下作戦前半です。
今回の話は少し長めです。また、原作のギルド降下作戦とは少し異なります。

それではどうぞ (^o^)/

Guid

音無君が入隊して3日が経った。本編とほとんど同じようにオペレーション・トルネードが進み、音無君も少しは戦線に馴染んできた。

今日もまたゆりっぺさんに突然収集をかけられて、戦線本部に集まっていた。

「さあて、集まったわね、今回のオペレーションは、ギルド降下作戦よー!」

「ギルド降下作戦っ!?!?.....っ (ブルツ)」

「ん?音無、どうしたんだ?」

「いや、高いのはあまり得意じゃなくて.....」

「その降下じゃないわ、地下に潜るのよ」

そう、ギルド降下作戦とは、学園の地下にあるダンジョン、通称ギルドに潜るオペレーションのこと。それにしても、音無君は想像力が豊かだな。

「ああ、その降下……って、地下あーっ！?!？」

「そーだよ あ、そういえばゆりっぺさん、今回のメンバーはどうするの？」

今この場に居るのは、ゆりっぺさん、日向君、音無君、高松君、松下五段、TK、大山君、藤巻君、椎名ちゃん、そして僕……あれ？何か足りない？ま、いっか

「そうね、今回はこのメンバーで行くわ。『ガガガ……サー……ほい、もっしもし、此方ギルド』此方ユリ。今日辺りギルドに潜る。トランプの解除を頼む。『ザザ……りょーかい。待ってるぜい』」

「ん？そっぴや野田が居ねえぞ？」

「はっ、どっせどっせどっせで修行でもしてんじゃねえのか？ほっとせよ」

酷いなあ 皆 W W W W

Lin 体育館

「「「セーのっ!」「」」

『ガラララララー……』

ステージ下の椅子たてをどかし、ギルドへの入口が開かれる。

「こ、この中に入るのか?」

「ああ、行こうぜ!」

日向君、なんか音無君にベッタリくっついてるなあ……。本編では否定してたけど、やっぱりアッチ系じゃないのかな……?

『ガタツガタツスタツ』

「よっこいせつと!」

一番最後に僕が降りる。

…なんか降りる時に下からライトでスカートを照らされてた気がするんだけど……。

「おい!誰か居るぞ!」

藤巻君がそう言ってライトを向けた。その先には…。

「ふんっ!」

……バカがいました」

「直斗ちゃん、声出てるよっ」

「ありやりや？またやっちったか〜。」

てへっ

「俺はまだ、そいつを仲間と認めた訳ではないぞ!!」

「別に認めて貰わなくて構わねえよ……。」

「ふんっ、勝負だ『ドゴウ!!』ぶへえっ!!」

野田の横辺りの天井から、振り子状にハンマーが降ってきて、野田が吹き飛ばされた。

「っ!?!臨戦態勢っ!!」

ゆりっぺさんが叫ぶ。

「ど、どういう事だ！？トラップが解除されてねえぞっ！？」

「もしかして、ギルドの独断でトラップが再起動されたのかも…？
天使か何かが入ったんじゃないかな？」

「梅沢君の言ったとおりの可能性が高いわね…」

「ちょっと待てよ！！俺たちが中に居ることが分かっているんだろ？
俺たちを全滅させる気かつ！？」

今度は音無君が叫んだ。

「貴方はまだギルドの重要性が解ってないみたいですね…」

高松君が眼鏡をクイクイさせながら呟く。

「音無君、僕たちは何度死んでも生き返るでしょ？でもね、ギルド
が破壊されたら何も出来なくなっちゃうんだよ…？僕たちの武器は
全てギルドで精製されてるんだから。だからこそギルドは重要な
だよ」

「なるほど…」

納得してくれたみたい。

「で、どうすんだよゆりっぺ？引き返すのか？」

「……いえ、進行するわ」

「何でっ！？天使の足止めにはトラップがあるじゃねえか！！」

「トラップは一時的な物でしかないわ。とにかく、此処からはより気をつけて行くわ」

「なあ……」

本編では確かこの先に横への道が……って、皆気付かずに過ぎちゃった!!

「「「「う、うわぁぁーっ!」「「「「

「~~~~っ!!仕方ないっ!!せーのっ!えいっ」ドゴウー……
「っ……!……!」

『直斗、適当に右パンチ』で、岩が粉々になった(笑)

「「「「「……は?」「「「「「「

「……ふう、……ってへっ」

「「「「「……て、てへっ じゃねえーっ!!いや、確かに可愛いけどもっ!!!／＼／＼」「「「「「「

「皆息ピッタリ過ぎ……。っていうか、何人が口調まで変わってるよっ!?!」

「梅沢君…貴方、相変わらず規格外ね…。まあいいわ。次に進みますよ」

『ガシャンっ』

「なっ!？」

「うわぁ、しまったぁ忘れてたよぉ!! 此処は閉じ込められるトラップだったぁ!!」

「そんな大事な事忘れんなよぉーっ!!」

「第一射くるぞ!! 皆ふせろっ!」

『ジジジ……』

「ぶっ!」

『ボムッ!! シュー…!』

椎名ちゃんが煙玉を投げた。すると赤いレーザーが見え出した。

「アレに触れると、どうなるんだ…?」

好奇心か、音無が日向に尋ねる。

「さいつこーの切れ味で胴体を真っ二つにしてくれるぜっ」

「日向君…、良い顔でグロいこと言わないでよね…!」

「おお直斗ちゃん、すまねえな」

絶対に思ってない…。

「第二射くるぞ!」

「くっくっ…!」「くっくっ…!」「ほっ!」

「は、早く開けるっ!!」

「今やってるよっ!!」

藤巻君が解除を急ぐ。

「第三射くるぞっ!!」

「第三射は何っ!？」

「Xだっ!!」

「そんなのどうやってかわすんだよっ!!!？」

音無君がまたまた叫んだ。

「それぞれ何とかしてっ!!」

「ぶっ!!」

「よしとー！」

「ぐっっ！ー！」

「ひらっっ」

「んっ！ー！」

「わあっ！ー！」

「うっ…ぐわああっ！ー！」

「開いたぞっ！ー！」

一斉に駆け出した皆。しかし松下五段は巨体のせいでドアのロックが開く直前にバラバラに…。

「松下五段、どうした「見るなっ！ー」「えっ？」

松下五段がバラバラに切り裂かれたのを見ようとした音無君に、日向君が抱きついて見えなくした。

「見ちゃいけねえ…！」

「……っっ、おえっっ…っぴ」

大山君はモロに見ちゃったみたいだ…。可哀想に…。

「可哀想に…ま、俺はお前と直斗ちゃんが無事で良かったよ…俺、結構二人の事気に入ってんだぜ？」

「お前（日向君）…コレなのか？」

「ちげーよっ！！…まあ直斗ちゃんだったら別に…（ボソッ）」

っ！！？今、日向君がさりげなく物すっごく気持ち悪い事を言ったような…？（ブルッ…）おえっ…。

「う、梅沢？大丈夫か？」

「うん、何とか…。ありがとね、音無君^{ニム}」

「っ！！／／／（やっぱりコイツ女じゃないのか！？）」

音無君？顔、赤いよ…？

「で、出来なくはないけど、今力を使いすぎたら、今後のトラップで使えなくなるよっ!？」

『トクトクトクト……』

「もう頭上っ!?!仕方ないわ…梅沢く『ガッ!?!』っ!?!」

「…h o l l y u p p y ……」

「「「「「TKえーっ!?!」」」」」

「o o o 今なら間に合う……、とんでいって抱きしめてやれ……」

「ありがとう」

「サンキュー」

「達者でな」

「い、いいのか?」

「良いって、行くっぜ」

「あ、ああ……、何か…スマン…」

「TK、ゴメンね」

「ん…の、no problem…」

『ドオーンっ！…』

「くっ……。TKまでもが犠牲に…」

「したんだろ。お前らが」

「……この犠牲を無駄にしないためにも、先に進みましょう」

ツッコミはスルーですか？ゆりっぺさん？（笑）

『パラパラ……』

「っ！？皆！！此処からはなれて！！」

『ズドオーン』

床が抜けたアーっ！！っというか、何か原作よりも穴めちやくちやおっきくないっ！？

「うわぁ……！！しまったぁ忘れてたよぉ……！！此処はぁ……！！」

大山君が叫びながら落ちていく……。

「ぐっ……、だから、忘れんなよぉーっ！！！！」

「ぐっ……重すぎて……もたない……っ！！」

「俺と音無と直斗ちゃんも落ちるか？」

「「ちよっとまで（待って）！！勝手に決めるなっ（決めないでよ

っ)!!」「

「此処で一気に戦力を失うのは得策では無いっ!!」

「んなこと分かってるよっ!!」

「ちょっと、早く登りなさいよっ!!」

「直斗ちゃん、音無、行けるかっ!？」

「やるしかないだろっ!!」

「んじゃ行くよっ!?!せーのっ!!」

『ダダダっ!!』

「いででっ!!……っって、直斗ちゃん、駆け上がってるのかっ!?!
?どんだけ人間離れしてんだよっ!?!」

「よっ……!!んじゃ、順番に上がってきて!!まずは音無君、早くっ!!」

「あ、あぁっ!!……よっ……!!」

「はい、手に捕まってる!」

『ガシッ』

「(うおっ!ー!コイツ……なんでこんな柔らかい肌してんだよ……
っと、登らねえと)って、うわっ!」

『ドサッ』

音無君を強く引つ張りすぎて、音無君が僕の上に覆い被さる体制になった。

「す、スマン……/ / / (か、顔が近ッ……!!)」

「う、ううん、大丈夫……」

「お、音無いーっ!ー!ー!てめえ直斗ちゃんに何やってんだあーっ!
!ー!うらやましいぞあーっ!ー!」

何故か日向君が下から叫んでる……?……っていつか、日向君から見えたのって、倒れかかる瞬間だけだよなっ!?!一体何考えてんのさっ!?!うらやましいって何っ!?!

「俺にも直斗ちゃんの上に乗らせ」キモいわぁーっ！……！」「ぐへえっ！……って、ギヤぁぁー……………」

日向君は気持ち悪すぎたため、ゆりっぺさんに蹴落とされた……。今のはドン引きだよ、日向君……。

「やっと登れましたね……」

「よっつと……」

「浅はかなり……………」

「ふう、梅沢君、大丈夫だった？」

ゆりっぺさん、藤巻君、椎名ちゃん、高松君も登ってきた。

「うう……、ゆりっぺさん、ありがとお〜（グスッ）」 涙目上目遣い

『ズキューーン／／／x5』

「（抱きッ……！）梅沢君……いえ、直斗ちゃん、大丈夫よ、私がつ

「いてるわ／＼／」
ゆりっぺは直斗に抱きつく。

「（ブハアアーっ！！！！）も、萌えるぜっ！！！！／＼／」
藤巻は鼻血がダラダラ。

「（パリーーンっ！！！！）も、萌えですっ！！！！」
高松は眼鏡が破損。

「き……………キョ……………ト！！！！」
椎名は目を輝かせる。

「お、落ち着け俺……………、コイツは男コイツは男コイツは男……………」
音無は……………壊れた？

何が何だかよく分からないんだけど……………。

「次に進むわよっ！！！！」

と言いつつ、ユリは直斗に抱きついたままであるが（笑）

「……………にしても、よく新入りのためえが此処まで生き残れたもんだ
ぜ……………。だが、次はためえの番だぜ……………」

藤巻君、鼻血ダラダラでそんな台詞言っても、全然迫力無いよ……………。
それにその台詞は死亡フラグ……………。

S
T
O
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d...
S

Guid (後書き)

今回は音無、日向にフラグが立ちかけたかも？(笑)

ギルド降下作戦中に、後もう数人のフラグを立てます(ww)

ではまた(owo)ノシ

Guid (2) (前書き)

ギルド降下作戦後半です。

相変わらずの駄文ですみませんがどうぞ (^o^)(^o^)/

Guid (2)

『ブクブクブクブク……………x2』

「コイツ……………金づちだったのか…?」

水攻めのフロア。前回死亡フラグを立てた藤巻君と、その道連れにされた高松君は…溺れた。

「プハツ…、出口は此方だ。ついてこい…!!」

流石は椎名ちゃん、頼りになるなあ…

『バシヤアッ……………』

「ケホッ、ケホッ……」

「ゆりっぺさん、大丈夫？」

「ケホッ……だ、大丈夫よ、ありがとう」

「梅沢、ゆり、此方だ！！」

音無君が岸側から声をかける。

「ゆりっぺさん、行こう」

僕はゆりっぺさんの手を引いて椎名ちゃんと音無君の方へ向かう。

「あ、ありがとう……／＼／＼」

何だか最近僕の顔を見て顔を赤くする人が多いな……何でだろ？

「……………何だ？アレは……？」

『キュッキュッキュッ……………』

犬のぬいぐるみがダンボールに入った状態で流されていく……。

「トラップね……」

「アレも天使用のトラップなのかっ!？」

呆れ半分、驚き半分で音無君が言った。まあ誰もあんな畏に引つ掛かるわけ「あぁーっ!?!?!子犬が流されているっ!?!?!……とっ!?!?!」そういえばあつたね……。

「っ!?!?しまった、コレは……っ!?!?……ぬいぐるみだったあ
っ!?!?!?!」

「って椎名ちゃん!!!滝ッ……!!危ないっ!!!こっとなったら……ふ
っ!?!?!」

手に?の刻印がはいったグローブをはめて腕をふる。さらに指を細かく動かす。

「ちよつと梅沢君っ!?!?助けるなら遊んでないで早く助けなさいッ

……!?!?!」

ゆりっぺさんが焦りながら言う。しかしその瞬間……。

『クンッ…!!』

「えっ!?!」

椎名ちゃんの体が宙にうつく。

「い、いったい何が…?」

「ゆりっぺさん、このグローブの指先、よく見てみて?」

「何よ…?えっ、これは銀色の…糸?」

そう、しかもただの糸じゃない。

「そうだよ。しかも、オリハルコンでできた…ね」

「お、オリハルコンっ!?!そんなもの…実在するのっ!?!」

「んー…まあね。このグローブ『エクセリオン』の指先の糸は、僕の意思のままに動く。加減によってはスパスパ切れるもするし、今みたいに受け止める事も出来る。まあ素人が使ったら糸はまともに動かないけどね」

一通り説明し終えた。ほぼ同時に椎名ちゃんが引き上がる。

「……浅はかだったなり（シュン……）」

「椎名ちゃん、大丈夫、元気だして。ね？」

僕は椎名ちゃんの頭を撫で撫でしながら言った。

「……／＼／（プシュー……）」

顔を真っ赤にして煙を上げている椎名ちゃん。照れてるのかなあ…
？カワユスなあ……

「椎名さんが無事で何よりね。もう少しでギルドに着くわ。がんばりましょう」

「そつだね。椎名ちゃん、音無君、二人は大丈夫？休憩はさむ？」

「ん、ああ…じゃあ少しだけいいか？」

「そうね。少し急ぎすぎたかしら…？休憩にしましょう」

「それにしても、この4人以外全滅なんて……。リーダー失格ね。梅沢君が居なかったらこの4人もどうだったか分からないし……」

「そんなことないよ！ゆりっぺさんは頑張ってるよ？」

「梅沢の言う通りだ。ゆりは頑張っているさ」

「……二人とも、ありがとう」

「そういや、ゆりはどうしてこの世界に来たんだけ？」

音無君がさりげなく質問する。しかし、ゆりっぺさんの表情は強ばった。

「そうね……あれはー」

ゆりっぺさんが自らの過去を語りだした。

本編と同じ、幸せな家庭の崩壊の過程を聞いた。

テレビで見ている時は何となく聞き流していたけど、実際に聞いてみるととても辛い話だ。

「ーそんな人生なんて……許せないじゃない……！」

過去の話を終えたゆりっぺさんは、神への怒りを露にする。

「……少し長く話すぎたわね。そろそろ行きましょう」

「あぁ」

「うん」

「」の真下がギルドよ」

「うわぁ……、長いハシゴだね……」

軽く100mはあるんじゃないかな……？

「急ぐわよ、ついてきて」

『カタンっ、カタンっ、カタンっ……』

「すげえ……」

ハシゴを下りながら音無君が呟く。確かに凄い施設……。確かコレ、爆破するんだよね……。勿体無いなあ。

「おおっゆりっぺだっ!!」

「椎名と新入り二人もいるぞ!!」

「よくあのトラップの中辿り着いたな!!」

ギルドの連中が迎えてくれる。

「天使は？」

「今はトラップで何とか足止めしてるが…」

『ドォー…ンッ…!!』

「っ!?!またかかったぞ!!」

「…っ!?!入っ!?!」

「……ギルドは爆破するわ」

「そ、そんなことして、武器はどうすんだよっ!？」

皆が焦って騒ぎだした。しかし一人の男が叫んだ。

「お前ら、落ち着け!! オールドギルドがある」

「「「チャーさんっ!!」「」」

「俺たちは最初は土からこの手で武器を作っていた。しかし何時からこんな機械に頼るようになってしまった。俺たちに必要なのはこんな機械かっ!？」

『ザワザワ……』

「違う……よな!！」

「ああ、職人魂見せてやろっぜっ!！」

『おおー……っ!……!』

「よし、持っていくもんは職人としての誇りと技術。それだけだつー！ギルドは爆破するつー！総員全速力でオールドギルドへ移動するぞつー！作業にかかれつー！」

『オオーーーーーーつー！！！』

流石はチャー。ゆりっぺさんの次に人望あるんじゃないかな？

「よいしょつとー！」

「おい、ゆり！？何処行くんだよ？」

「天使の足止めよつー！！移動には時間がかかるわ！」

『カタンっ、カタンっ……………』

「あら、貴方達も来たの？」

「まあな」

「少なくとも戦力にはなるよ　ね、椎名ちゃん」

「浅はかなり……」

「これはツッコむべきなのかつ！？」

「そうね、助かるわ」

「っと…来たよ！」

「「「っ！？」」」

『ドオーンッ！』

大音がして、目の前に天使が現れた。

「行くわよっ!!」

『パンっ!パンっ!』

何発もの銃弾が天使に襲いかかる!が、

『Gird skill...hand sonic』

『キーンっ!!』

天使が出したhand sonicによって全て防がれた。しかし此方の攻撃は続く。

天使が銃弾に気をとられている隙に椎名ちゃんが後ろに回り込む。

「はああっ!!」

「っ!?!『delay』」

椎名ちゃんの斬撃は天使に当たった筈だったが、それも天使のスキル『delay』によってかわされる。

『delay』とは、残像が残るほどのスピードで高速移動をする

技だ。

「何っ!？」

「椎名ちゃん、危ないっ!! 喰らえっ!!」

『ピーン……ドゴウー……っ!!』

僕はとあるの御坂様の必殺技『超電磁砲―レールガン―』を繰り出した。

「「「「……」」」」

あれっ? 天使だけじゃなくて、助けた椎名ちゃんや、仲間のゆりっぺさん、音無君までもが目が点になってる……。

「う、梅沢君…それ、何？」

「何って、超電磁砲だけど…?」

「「「」……………」

再び4人は目が点になった。まあ人間が超電磁砲を出すなんて不可能だもんね…。

「み、皆、行くわよっ！！天使を足止めするわっ！！」

「お、おう！！」

「浅はかなり……………」

あつれえ〜っ!?

何にも無かったことにされてらあ……………クスン…。

いいもん…！！こっとなったら自棄だいつ！！一方通行発動だあいつ

！！（壊）

「きゃははははっ！！行くよっ!?!?三下アアっ!?!」

「ギヤアアっ！！梅沢君が壊れたあーっ!?!」

「あ、あああ、浅はかなりいーっ!?!?」

「おい、何か椎名も壊れてないかっ!?!」

「……………」

何か天使が静かになった。
と思っただら——

『ドスっ！！』

「かは…………っ！？」

音無君が刺された。
一番狙いやすく、勝ち目のある相手だからか、それともこの世界の
修正力が働いたか。

「音無君っ！！！」

「ゆりっぺえ、どけえっ！！！」

後ろからギルドの連中の声がした。
見るとそこには——

「あんた達、やるじゃないっ！！！」

巨大な大砲が。

僕は一方通行を解除し、音無君を抱えて退避する。
ゆりっぺさんや椎名ちゃんも一緒だ。

「撃てえーっ！ー！！」

『ドオーーツ……！！』

連中が撃った大砲はー

ー大破した。

「や、やっぱり記憶にねえもんは適当にゃあ造れね」適当に造るなあ
っ！！」「グハアっ！！」

爆発に巻き込まれて倒れている人にゆりっぺさんが肘を立てたボデイ
イプレスをきめた。

……痛そう。

「コレを使え！！」

チャーが旧型の爆弾を出してくる。

皆がそれを拾って天使に投げつける。

『ドオーンッ…!!』

「よし、全員オールドギルドへ逃げっ!!ギルドを爆破するぞ!」

総員が速やかに退避していく。

「ゆりっぺ、やるぞ」

「ええ、お願い」

『(グッ)……………ゴゴゴゴゴゴ……………ドオーンッ……………』

天使の真下が爆発し、天使が落下していく。

「innオールドギルド」

「しかしホントに何もねえな」

「なあに、此処には土なら幾らでもある」

「よおし皆、作業に取りかかるわよっ！！」

「（ゆり……、お前、立派にリーダー出来てるよ）」

移動中に回復した音無君は、密かにそう思っていたのです。

Guild (2) (後書き)

音無君が刺された辺りはかなり無理矢理でした。すみません……(。
。。
;))

ではまた次回。

次回は岩沢回です。

主人公もライヴに出ます

My songs(前書き)

岩沢回ですっ

ああ、今回はどうなるかでしょっ…？今回は長めですよ (>w>)

それではどうも (>o>) /

My song

』
『

「……何故新曲がバラード？」

今日は岩沢さんの新曲が出来たからと収録をかけられた。

「いけない？」

「陽動には……ね」

「そう」

駄目かなあ……？ my song。良い曲だと思うけどな……。

「ねえ、そろそろこの娘も一緒にやりたいんだけど」

ん？ぼく？

「そういえば梅沢君もガルデメンバーだったわね……。いいわ、好

きにしてちょうだい」

「分かった。直斗、行くよ」

「うん」

— i n 教室 —

『 ～ 』

あの後、僕を含めたガルデモは、教室で音合わせをしている。

『 ～ …… プツンっ！ 』

「ゴメン、すぐ張り直す」

「ん、じゃあ一回休憩にしよ」

「そだね」

ひさ子さんのギターの弦が切れたので、休憩を挟むことにした。

本編のように音無君が居て、岩沢さんと話している。

一方、僕はというところ――

「それですねっ！！私はホントにガルデモの大ファンで、岩沢さんに憧れてたんですけど、最近になって直斗さんのギターやベース、ボーカルを聞いているとヤバイっていうかあ……」

偶々今度の近くでポスター張りをしていたユイにゃんに捕まって話を聞いている。

この娘、可愛いんだけど、ちょっぴり変だからなあ……。

「あのお、直斗さん、よかつたら暇なときでいいんですけども、私にギターを教えてくださいませんか？」

意外な展開だ。

まさかのユイちゃんが弟子 とは…。

「いいよ マンツーマンで手取り足取り教えてあげるよ じっくりと…ね」

ちよっぴり妖艶な笑みを浮かべながら言った。

「は、はい、お願いします…／＼／」

あれ？ユイにゃんってこんなキャラだった？
何かヤバ可愛い…／＼／

「直斗、そろそろ練習再開するよ！」

ひさ子さんからお呼びがかかる。

「分かった、今行くよ」

「練習、頑張ってくださいねっ…！」

ユイにゃんが応援してくれた。

「ありがとっ ユイちゃんもポスター張り頑張ってね (ニコッ)」

「はわぁ〜直斗さん…／／／」

僕は練習を再開した。

――inn本部――

「さあて、集まったわね…。今回のオペレーションは、『天使エリア侵入作戦』よー!」

「おい、アレって確か前は結局パスワードが分からなくて何も出来なかったんじゃないか?」

日向君がツッコむ。

「今回は、同じ失敗を繰り返さないために、彼が作戦に同行する」

「よろしく」

ゆりっぺさんの椅子の後ろからいきなり竹山が現れた。

「椅子の後ろからっ!？」

「眼鏡被り……」

「ゆりっぺ、何の冗談だ」

「そんな青瓢箪が使いもんになんのかよ……」

「まあまあ、そう言わないでくれる?」

「はん、なら、試してやるっ」

ハルバートを構えた野田が言い放つ。

「お前、友達居ないだろ……」

それに対して音無君もツツ「む。

「ふむ。 3 . 1 4 1 5 9 2 6 5 3 5 8 9 7 9 3 2 3 8 ……」

「ぐわぁーっ！…！」

「え、円周率だっ！？」

「止めてあげてっ！…！その人はアホなんだっ！…！」

「そう、私たちの弱点はアホなことっ！…！」

リーダーがそれを言うのっ！？

「だから今回は、天才ハッカーである、竹山君に同行して貰うわ」

「クライストとお呼び下さい」

「あつちやく…、カッコいいニックネームが台無しだぜ…」

「オペレーション開始時刻は18:00、今回もガルデモに頑張つて貰うわ。岩沢さん、それに梅沢君、よろしく」

「「オーケー」」

わあい、岩沢さんとハモった〜 (笑)

「以上よ、解散っ!!」

「チューニングオツケーだよ」

「ああ、私も大丈夫だよ」

「ドラムもセット完了ですよ」

「ベースもいいですよ」

「今日は大量に人を呼び込まなきゃならない。何時も以上に頑張っていくよ！」

「……オツケー（はい）っ……」

岩沢さんの呼びかけに僕らは気合いを入れ直す。

「そろそろ時間か？」

「そうですね」

「よし、派手に行いっせーっ……」

幕が上がリ、観客が盛り上がる。ユイにゃんが頑張ってくれたんだな…。

『ジャーンっ！！』

ひさ子さんが派手にギターを弾き鳴らす。
そしてライブが始まる。

『
』

一曲目は何時もどおりcrow song

僕は今回のライブはサイドギター兼ボーカル。

つまり、ギター×3、ベース×1、ドラム×1、ボーカル×2の構成だ。

盛り上がりは好調。

遊佐さんもステージ横でノリノリだ。(遊佐さんは隠れたガルデモの大ファンらしい)

『ジャーン！！…キユルルッ…』

crow songが終わり、拍手が鳴り響く。そんな中—

「…っ！！来やがったか…」

「天使…」

最初にひさ子さん、続いて皆が天使の入場に気づく。

『……………ジャーン、ジャーン』

「（っ！？Alchemy?こんな序盤で…）」

「（もつと盛り上げてくれ…っ！！いや、そうさせるのは誰でもない、私たちなんだっ！！） 歩いて来た道振り返ると…」

『バンっ！！』

突然扉が勢いよく開いた。

「「らっ！！貴様ら、此処で何をしているっ！！今すぐ止めんかっ！！」

NPCの教師陣が現れた。

「止めてあげてっ!!」

「そっだ、お前らこそ帰れっ!!」

『ワァーっ!!!!』

NPCの生徒たちは此方の味方だ。

「取り抑えるぞっ!!」

教師陣が生徒たちを押し退けて此方へ向かってくる。

僕らはNPCには手出しは出来ない。されるがままに取り抑えられた。

「ゆりっぺさん、ガルデモ、取り抑えられました」

『くっ…此処までか…』

通信機越しにゆりっぺさんの声が聞こえた。しかしその直後――

「ふん、楽器は全て没収だっ!!……ん?こんな汚いギターはもういらんな。処分するぞ」

教師の一人が岩沢さんのアコースティックギターに勝手に触れた。

「…に」

「ん？何だ」

「それに…っ触るなあー…っ！！！！」

岩沢さんが自分を抑えていた教師を振り払い、ギターを引つたくる。それによってできた隙に、ひさ子さんは教師に頭突きをかまして放送室へ駆け上がる。

それを追いかける教師の足を遊佐が引つ張って止める。

僕は一方通行を一瞬だけ発動させ、自分を抑えている教師を弾き飛ばす。

岩沢さんが教師たちに囲まれた。

それと同時にひさ子さんがアンプの音量を最大にして、校内放送をONに切り替える。

岩沢さんがギターを弾きだす。『my song』だ。

教師たちが抑えにかかるが、それを僕がPSY能力の、マテリアル・ハイで空気の壁を造り止める。

《La～LaLa…苛立ちを何処にぶつけるか探してる間に終わる日…》

「新曲…」

ユイにゃんが呟く。

《空は灰色をしてこの先は何も見えない…、常識ぶってる奴が笑ってる次はどんな嘘を言う？それで得られた物大事に飾っておけるの？》

観客が鎮まっっていく。

中には涙を流す子もいた。

《でも明日へと進まなきゃならない、だからこう歌うよ…、泣いてる…、君こそ…、孤独な君こそ正しいよ…人間らしいよ…》

『竹山君、今よ！』

『もうやっています。後、僕の事はクライストと…』流石よ…出ました』

『……これは…？』

ゆりっぺさんの方も進んでいたようだ。通信機から声が聞こえる。

《落とした涙が…、こう言うよ…、こんなにも美しい嘘じゃない…、ホントの僕らを……ありがとう》

ユイにゃんの目からも涙が溢れたのが見えた。

《……っLa、La、……、LaLaLa……、La……っ》

『タララランっ………』

……あれ？消えない？一体どうして……？

「……ちっ、早く帰れ！！お前らは反省文だっ！！」

誰も消えることなく終わったライブであった……。

— i n 本 部 —

「今回分かったことは、梅沢君の言ったとおり、天使は自分で能力

を付加していたということ。それくらいね」

「なんだよ、あんなだけ苦労してこれだけってよ…」

「まあとりあえず今日は解散よ」

「…ねえ、岩沢さん？」

「ん？どうしたんだ直斗？」

寮へ帰る途中、岩沢さんと二人きりになったので、質問してみることにした。

「こないだ音無君と話してるの、偶々聞いちゃったんだけど、岩沢さんの心残りって確か、好きな歌を歌えなかった事だよね？」

「聞いてたんだ…。まあ、そうだよ。それが？」

「うん、今日のライブでさ、アドリブで my song 歌ったじゃん？それは好きな歌を歌えたっていう事にならなかったのかなって…」

本編では確かそれで心残りが解消されて、成仏した筈だった。

「ああ、その事か。確かにその心残りは解消されたよ」

え？

「ち、ちよつと待って！？この世界では、心残りが無い人間は成仏しちゃうんだよ！？なのにごうして…っ！？」

全く意味が分からない…。

僕が介入したことで世界のシステムが変わったのかな…？それだと面倒だな…。

「それなら、多分だけどさ、違う心残りが出来ちゃったんだよね」

「はいっ！？そ、それって…んぐっ！？」

えと…状況が把握出来ない…。すぐ目の前には岩沢さんの少し赤ら

「ん。んじゃあ女子寮は此方だから。おやすみ、直斗」

「う、うん、おやすみ…ま、まさみ…／／／」

その後、寮へ帰った僕はベッドの上で2時間ほど悶えていた……。

My song (後書き)

さあさあ、岩沢さんは消えずに残ってしまいました…。
しかも主人公にチユー…／＼／

岩沢：こ、こらっ！！恥ずかしいから言っなよっ！！

……まさかの岩沢さん登場っ！？

コホンっ……………

とにかく、岩沢さんはヒロインに決まりました。
にしても、何故惚れたのやら…？

岩沢：そりゃあ、楽器やボーカル上手いし、顔だって綺麗だし、
かも、練習中とかにさりげなく気遣ってくれて…／＼／

直斗：ちよっ！？まさみ、キャラ変わってないっ！？しかも、小説
中に出てない所で惚れてるって…

作：すみません、私の文章力が無いばかりに…

直斗：全くもう…

ということらしいです。(笑)

今回はユイにゃんにもフラグ立ちましたね

次回はユイにゃんが出演時間が増えますっ

ではまた(^^)(ノシ

Off time (前書き)

今回はアニメの4・5話である、オペレーション・ハイテンション・シンドロームの更に少し前という設定の話です

野球は難しそうなのでカットさせていただきました。

楽しみにしていただけいた方は申し訳ないです…m(´`´)m

Off time

「だあかあらっ！！幾ら岩沢さんでも、譲れませんか！！直斗さんは私にギターを教えるんですっ！！」

「いや、直斗は私と一緒にセッションするんだ！！」

今、僕はまさみとユイにゃんの二人に板挟みにされて引っ張り合われている。

えっ？そもそも何故こんなことになったかって？それはねー！……

暇だったので、僕は学園を彷徨っていた。

まさかオペレーションが無い日はここまで暇だったとは…。

「あっ！！直斗さーんっ！！」

ん？この声は…。

「こんにちは、直斗さん 何してるんですか？」

「ユイちゃん、こんにちは ちょっと暇だったからね…、散歩かな…？」

暇だったと言った瞬間、ユイちゃんの眼が一瞬光った気がした。

「あの、この前の約束、覚えてますかっ!？」

約束？約束……ああ！

「確かギターを教えるって言ったっけ？」

「はい、で、もしよかったら今、じっくりと教えてくれませんかっ!？手取り足取り、付きつきりで」

うーん、まあ暇だしいつかな…。

「うん、別に構わな「直斗ー!」「ん…?まさみ?」「

「い、岩沢さんっ!?!」

「ん?この娘、確か広報部の…」

「ゆ、ユイって言いますっ!?!」

「そ。で、直斗。今からさ、私と二人でセッションしない?」

「まさみと二人で?」

「うん、駄目…かな?」

「うおーいつ!?!」

「普段クールなまさみの上目遣い…っ!?!
核兵器並みの威力…かはっ…!?!」

「ちょーっ!と待ったアーっ!?!」

「ゆ、ユイちゃんっ!?!」

「…何か問題ある？」

「有りも有り、大有りですよっ！直斗さんは今から私と二人つきりて愛のギターレッスンをするんですよっ！？」

あ、愛のっ！？

確かにギターは教えてあげるって言ったけど、僕はユイにゃんとそ
ういう関係になった覚えはまだ無いっ！！！！

……………何時かはなりたいけど／／／

ってまさみっ！？そんなに睨まないでっ！？

「ふーん…直斗、私とキスまでしたのにその子のこと口説いたんだ

」

「ち、違うよっ！！今僕とそんな関係なのはまさみだけだよっ！！」

「くっつ！！／／／そ、それなら、私とセッションしよ？」

で、冒頭に戻る。

「いい加減諦めて下さいよっ！！」

「そっちこそ諦めなよっ!！」

「ああもうっ!！だったら二人とも僕と一緒に練習しよっ!？それじゃダメなのっ!？二人とも、いい加減にしないと怒るよっ!？」

いい加減に聞きかねた僕が怒鳴った。

「じ、ゴメン…（シユン…）」

「すみません…（シユン…）」

「ん。分かれば良いよ。二人とも、仲良くしてよ？」

そう言っつて二人の頭を優しく撫でた。

「ふにゃあ…／＼／＼」

ネコっぽくて可愛いなあもお…（ ）

「じゃ、練習行こっか」

「ああ（はいっ）」「

これにて一件落着

のはずだったんだけどー

「ねえゆりっぺさん、今日はフリーって言ってたよね？」

「うっ…っ、ゴメンなさい…でもその、伝え忘れがあったから…」

「ん、まあ僕は良いんだけどさ、後ろの二人がさ…」

まさみとユイにゃんはかなり不機嫌だった。

せっかく練習出来る時間がとれたというのに、その時間が潰されたのだから仕方ないけど…。

「まあいいや。で、話って?」

「そうだね、私と直斗の時間を奪ってまで話したい話って何さ?」

「そうですね、私と直斗さんのラブラブタイムを削ってるんですよ!?!?」

もうツツコまないよ...?

「ってちよつと待てええエエエー!?!?!?いつの間に岩沢と直斗ちゃんがそんな仲にっ!?!?羨ましいゾっ!?!?!?つかソイツ誰っ!?!?ソイツとも出来てんのっ!?!?ハーレムっ!?!?何がどうなってるんですかっ!?!?whatっ!?!?」

「日向君、ツツコミくどい。後、僕はノーマルだから。日向君には微塵も興味ないよ」

?Orz 日向君

「あつ、自己紹介してなかったですか?私、ユイって言います
ガルデモ広報部兼直斗さんの第二彼女でえっす」

「「「「「「「「「「か、彼女だとおー！ー！ー！ー！っ！！？」「」「」「」
「」

「ちょっと貴女、それに岩沢さん、彼女ってどういふことよっ！
！（抜け駆けっ！？ずるいわっ！！）」「

「浅はかなり…orz」

何が？

「「…ふっ
「」

勝ち誇ったアーっ！？

っ！かまさみはともかく、ユイには今初めて告白されたんだ
けどっ！？

「くっ…、先を越された…！！」
「浅はかだったなりっ…！！」

二人とも？大丈夫なのっ！？

「ハア、ハア…直斗ちゃんが彼女…」

日向君がド変態イーっ!?

「有りだな…」

「有りだね…」

藤巻君、大山君っ!?!二人とも眼が恐いっ!!

「ね、ねえっ!?!本題っ!?!本題に戻るっ!?!ねっ!?!」

「くっ…、この話は後でじっくりと聞かせて貰っわ。で、本題なんだけど、もうすぐ、天使の猛攻が始まるわ…」

「て、天使の猛攻っ!?!」

またまた音無君が妄想してるよ…。

「そう、地獄の…テスト期間がね…!?!」

あれ?野球大会はカットかな?

「そこで、今回は天使のテストに細工をして、全教科赤点をとらせるわっ!!」

「そんなの意味があるのか？」

「有るわ。少なくとも精神的ダメージは大きいはず。全生徒をまとめる生徒会長が全教科赤点なんだもの」

「ふん、そんなことは女々しい奴のすることだ」

ゆりっぺさん命の野田君は今回は参加しないようだ。

「今回は私、音無君、竹山君、日向君、高松君、大山君そして梅沢君で行くわ」

「りょーかいっ」

「くれぐれも真面目にテストを受けないように。特に音無君は記憶が無いから、心残りが分からない分、そこらは気をつけなさい」

「…分かった」

「じゃあ皆は解散。梅沢君は残ってね 少おしO・H A・N A・S
H Iしたいから」

「えっ?」

その後、ゆりっぺさんと、後々加わった椎名ちゃんにO・H A・N
A・S H Iという名の拷問を受けた……。

『ギヤアーーーーっ!……!』

Off time (後書き)

ユイちゃんと岩沢さんに取り合いされる直斗。

羨ましいですな… (. . . ;)

日向君は変態化してますね、はい (笑)

日向君ファンの方すみません m | | m

次回はハイテンション・シンドロームですかね？

予定が変わったらテストです。

ではまた (^ o ^) ノシ

High tension syndrome (前書き)

予告どおり、ハイテンション・シンドロームです

H i g h t e n s i o n s y n d r o m e

「今回のオペレーションは、ハイテンション・シンドロームよっ！
」！」

『シーン…』

「…えっ！？誰も何も言わないのかっ！？」

「…初めて聞くオペレーションですね………」

「新しく生み出したの」

「ゆりっぺ、どんな内容なんだ？」

「至って簡単よ、ただただ一日中ハイテンションを維持し続けるの」

まあ今までのに比べたらね……。

「例えば？」

「飲み物を飲むときは常にイツキ飲み、喋るときは大声で叫ぶ、移動は全て全力疾走、勿論笑顔も忘れずにねっ」

「そんなことして何になんだよ…?」

「神を誘き出す。私たちは学園生活をエンジョイしている。しかし一向に消える気配が無い。それを見た天使は慌てふためいて神へのコンタクトをとるかもしれない」

『おお…』

「ってちょっと待てよゆりっぺ。そんなことしちゃったら消えちまう奴がでるんじゃないか?」

「……………いや、消えない。見た目は楽しそうでも、実際に俺たちにとっては言わば罰ゲームだからな…」

「ちなみに失敗したら一週間の断食ね」

「はあっ!?!?」

「私と梅沢君は無しょ？梅沢君にはハイテンションの先陣を切って貰う訳だし、それで更に罰ゲームは可哀想なものね」

「あ、悪魔のような人だ…」

「つーか直斗ちゃんは何処に居るんだよ？」

「此処に居るわよ？梅沢君、ハイテンションで皆にご挨拶よ」

そう言われて、ゆりっぺさんの椅子の後ろから飛び出した。

実は今まで隠れてたんだよね

『バツ！！』

『ーっ！？』

皆の顔が驚きに変わる。

それもそうだろう。

まあとりあえず挨拶しよつと。

「はい 皆、元氣かじゃ？私はとっても元氣だよんっ オペレー

シヨン、頑張つて行こーねっ　　おお〜　（＾O＾）／

『……………誰っ！！？？』

皆がハモった。

今の私は実は…

能力で女の子になってますっ

髪はロング、バストはそこそこ大きめでスタイル抜群っ　おめめパ
ツチリのスーパー美少女だ（笑）

『ブシューーっ！！！！』

男子陣が鼻血を噴いた。

ちなみに今の私の格好は、胸元が大きく開いたメイド服デザインの
戦線制服だ。けっこう恥ずかしいけど可愛いんだよね

（　直斗の思考は今完全に女の子です。）

「梅沢直斗改め梅沢尚美ちゃんよ　ちなみに私の物だから、手を出
したら死刑よ」

「あはっ 尚美ですっ 改めてよろしくお願いしますね (ペコリ
っ)」「

挨拶なので頭を下げた。

しかし頭を下げれば当然ー

『ぶるるんっ』

胸が大きく揺れる訳である。

『ブシューーっ!!--!』

男子陣の鼻血(2回目)。今回は椎名ちゃん、まさみ、ユイにゃんも大量に噴いた(笑)

「これも、私の物よ」

『ふにょんっ ふにょんっ …』

ゆりっぺさんは私の胸を激しく揉み上げる。

「はぁあんっ…!!--!あう…んっ!!--!」

『ブツシャアーーーーっ!!!』

戦線本部は血の海と化した。倒れていないのは私とゆりっぺさんの二人だけ。

（20分後）

「ハイテンションなのはてんひのまへだけでいひんだよな？（ふがふが…）」

皆の鼻にティッシュを大量に詰め込んでおいたので鼻血はなんとか止まった。

「いえ、天使は何処で見ているか分からないもの。オペレーション中は常にハイテンションよ。オペレーション開始時刻は午前9:0

0。終了時刻は午後9：00よ
「

「じ、じゅふにじかんもっ！？（ふがふが…）」

「じゃ、検討を祈るわ
「

lat.9:10.in本部

「な、尚美ちゃん好きだアーーーーーっ！！付き合「ごめんな
さいっ」「せめて最後まで言わせてくれえーっ！！（号泣）ゴフッ
…」

「尚美ちゃんに手出しは駄目って言ったわよね？ああんっ！？」

「ぐっ…だが俺は諦めんぞおーっ！！運動ができる男子をアピール
するために音無ィ、キャッチボールいくぜいーっ！！」

無駄な事を…私は普通に女の子が好きなのよ？

「ちょっと待てエーっ！！俺も混ぜろオーっ！！！！」

『ドガアッ！！』

野田君がハルバートを降り下ろした。

机が壊れちゃったじゃない…もうっ！！

「ちょっと待てっ！！お前それ素でやってねえかつ！？」

「素でこんなことするかぁーっ！！バッターが居たらもっとな面白に決まってるだろうがぁーっ！！！！」

「なるほどお、それは盲点だったぜえーっ！！！！」

「だったら外野も居た方が面白いんとちゃうんかぁーっ！？」

「私も混ぜりますよぉっ！！この筋肉はその為に鍛えた物ですからあっ！！！！」

「おおっ！！お前やる気満々じゃねえかぁーっ！？」

「オラオラあーっ！……！退けやあーっ！……！グラウンド行くぞあっ！
」

……。

「よおっじゃあーっ！……！んじゃあ私はギターの実習行くぜえっ！
！尚美さあんっ！……！行きましようかあっ！……！」

「私も行くよっ！……！」

「悪いけど私は授業に行くわよ、ユイちゃん、まさみんっ とっつ
！……！」

『スタツ、ドドドドドドドド……』

私は窓から飛び降りて全力疾走。ちなみに本部は校舎の3階だ（笑）

く『日本史』く

授業に行くと、野球に行ったメンバーがいた。恐らくは天使に見つ
かって連れてこられたのでしょっね……。

「で、ここで井伊直弼がー」「井伊直弼キターー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！
な、何だね急にっ!?!?」

日向君が叫んで先生が驚いているわね…。

「いやあすみません、井伊直弼は僕の中ではスーパーヒーローなも
んですから…」

「また地味な…」

全くね…。

「本能寺の変はまだかあーっ!?!?!?」

今度は野田君ね。

でも、確か本能寺の変はもうー

「そこは既に終わったが…」

そうよね。大体、日本史って史実の順に習うのに、井伊直弼より本
能寺の変が後なわけじゃないじゃない。
相変わらずのバカ具合ね…。

「先生っ！！生類憐れみの令ですっ！！今こそ生類憐れみの令を出すときですっ！！」

今度は高松君？

それに生類憐れみの令もー

「そこも既に終わったが…？」

「江戸…幕…府…（バタンっ）」

…それくらいの歴史は覚えておきなさいよ。一応中学生でも軽く習う範囲よ…？

「こらあーっ！！貴様らあーっ五月蠅いぞ！！貴様らは蘇我入鹿かあっ！？」

……全くもって意味が分からないのだけれど？

「日本史…だけにな（キランっ！！）」

…巧いこと言っただつもりかしら…？

「（巧い）と言っただつもりか…？」

あら、何だか音無君も私と同じようなこと考えてそうね……。全く、バカの相手は疲れるのよね……。

ちなみにゆりっぺさんは少し黒い笑みを浮かべていた。

）『世界史』）

「で、マリー・アントワネットがー」「マルイイキター……
っ……！」な、何なんだっ!？」

またなの？というか、舌をまく必要は何処にあったの？

「いやあすみません、僕の中ではマリーは萌えヒロインなもんで…
ハア、ハア……」

「も、萌え……？」

日向君、気持ち悪いわ…。

今日一日はまともに話さないでおこうかしら…？

今は女の子だし、何をされるか分からないものね…。

「ワットの蒸気機関発明はまだかぁーっ!？」

「いや、そこはもう終わったが…」

「なっ!？蒸気機関車…」

「いや、そこはまだだが…」

「シュツシュツポツポツ…」

子供…というか幼稚ね…。

バカにも程があるわよ？全く、皆をハイテンションにしたいならさっさとするのよっ!…!

「せんせ「先生っ!私、先生のことか…好きですっ!…!」

『何いーーーーーっ!!!?!?』

クラスメイト全員が声をあげた。ちなみに私が女の子になった後は元々女の子だったという事になっていて、私は学園のアイドル的存在だった。

「なっ!?!いや、梅沢っ!?!いかんぞっ!?!先生と梅沢は教師と生徒なんだぞっ!?!」

先生は私の言葉を鵜呑みにして本気で慌てている。が、口はニヤッいていますよ?

「……………ぶっ……………ぶくくっ……………」

『??.?.?』

「あははっ!!!先生も皆も本気に何してるのよぉ」 冗談に決まってるじゃないっ
「……………」

「なっ!?!?ガーン…………orz」

ちよっと先生?生徒に降られて本気で落ち込むなんて、教師としてどうなんですか?(笑)

『あ、焦ったあ…』

「ふふっ 皆ったら、騙されやすすぎよっ」

軽くウィンクしながら笑顔を向けてやる。

『も…萌えエエーーーーっ!!!!』

何故か男子だけでなく女子まで叫んでいた。その中にはゆりっぺさん達も含まれてました。先生もでしたが（笑）

「よっしゃあ、授業終わったし野球行くぜえっ!!!!」

『おおっ！！』

「待って。まだ掃除が終わってないわ」

「……………」

まあ私がサイコネシスで一瞬で終わらせてあげたけどね。

「っじゃあ、今度こそグラウンドで野球だぁ……………」

『オオーっ！！！！』

—innとある教室—

『ジャーン……………』

「おっしや最っ高に良い曲出来たんじゃねえかぁーっ!？」

「うんーっ!?!?!ユイもなかなか良い曲書くよーっ!?!?!」

ユイと関根はそれぞれギターとベースを激しくピッキングしながら
叫ぶ。

「……何だかなあ」

「(ひさ子さん、今はオペレーション中ですよっ?失敗したら、
週間断食ですよ…!?)」

「(ま、まじかっ!?)お、おお確かになかなかじゃねえかぁー
っ!?!?」

「ひさ子さんこそギターテクヤバいつすよぉーっ!?!?あつたまどつ
なつてんすかねえーっ!?!?」

『ドガっ!?!?!』

「ケンカ売ってんのかぁーっ!?!?あ、あつ!?!?」

「ず、ずびばぜんでした…。し、新曲も出来たし、グラウンドでライブでもしませんかぁーっ!?!」

『いいねーっ!?!?!』

ガルデモもグラウンドへ。

ーいんグラウンドー

あの後色々あって運動会をすることになったの。

私は一応ガルデモチーム。

ちなみに格好は体操服にブルマ。しかも、けっこう小さめで食い込んでキツイ…。けれど、男子チームはそれを見ると鼻血を出すために戦闘不能になるの。けっこう楽しんで勝っているのよねっ

たまに味方も戦闘不能になるけれど（笑）

現在はガルデモチームが503ポイント、野球バカチームが264ポイント、食いしん坊ダンサーチーム（笑）が204ポイントと、ガルデモチームがぶっちぎりなの。

最後は騎馬戦。

特別ルールで、これに勝ったら300ポイントが入るわ。つまりこれの勝者が覇者となるわけ。

行くわっ！！！！

『ピューっ！！！！』

「うおらぁーっ！！！！」

野球バカチームは野田君が暴れ回る。

「へっ、おらよっ！！！！」

食いしん坊ダンサーチームは頭のハチマキに可愛いぬいぐるみを付

けた藤巻君がテクニックで奪う。

「ぶっしゅあーっ!!!!」

ガルデモチームはユイちゃんが野性的に奪う。

私はユイちゃんの土台よ ユイちゃんって柔らかくて…可愛いので

とその時—

『シュツっ!!!!』

椎名ちゃんが藤巻君のハチマキのぬいぐるみを奪う。
巻き込まれた皆は崩れる。

しかし私はユイちゃんを肩車してかわした。
よって私たちの勝ちよ

あら？天使と椎名ちゃんが向かいあってる…？

「キョー—————っ!!!!」

ぬいぐるみを抱き抱えて叫ぶ椎名ちゃん。
でも椎名ちゃんの方が可愛いわよ？

あら、天使が帰っていくわ……。入れ違いにゆりっぺさんが。

皆を叩き起こして天使を尾行する。なんでも、ゆりっぺさんは天使が「……………どう報告したのか……」と呟くのを聞いたらしい。

で、建物に入って地下へ降りる。

そして何やらパスワードのような物を押して扉を開く。

ゆりっぺさんが走っていく。扉が閉まりだしたのだ。皆も続く。

何人かが間に合わずに置き去りになる。

私たちが天使の後をつけて見たものは――

『 キュポンっ！ 』

「へっ？」

「キュートだわ」

野菜を収穫する天使の姿だった。

「ふ、ふふふふ…………断食決定…………っ！！！」

『ええーっ！？』

一週間後

「わ、私も……………もう駄目……………」
ガクッ

ユイちゃんが倒れた。

一応私も皆と一緒に断食した。まあ全然平気なんだけどね（笑）

「尚美ちゃん…ホントに貴女って規格外ね…」

今回は皆、お気の毒でした。

でもちよっと楽しかったかも…？ふふっ

High tension syndrome (後書き)

今回は尚美ちゃんが活躍しましたね(笑)

次回からはまた直斗に戻りますよ?多分(笑)

では次回はテストです

また会いましょう(^O^)/シ

T e s t

「さて、今日はいよいよ魔のテスト期間よ……」

ゆりっぺさんが深刻な顔で言った。

前々回に名を指されたメンバーにも緊張がはしる。

「行くわよっ！！」

『応っ！！』

— i n 教室 —

いよいよテスト直前。

テストの座席はくじ引きで決める。

ゆりっぺさんも駄目だった。

しかしー

「一つ前です…」

竹山君が当たりを引いた。

「で、具体的にはどのようにすれば？」

「あらかじめ解答用紙を二枚取っておいて、回収するときにすり替えるのよ」

「なあ、それって気付かれないか？」

「大丈夫よ、回収の時にメンバーの誰がワンアクションを入れて皆の気をひくから」

黒い笑みを浮かべながらゆりっぺさんは言い放つ。

「なっ!?!まさかその為の人員ですかっ!?!」

「ふふ、そのとおり 先ずは日向君よ」

「ぐっ…失敗したら何されるか分かんねえからな…」

「で、答案には何を書けばいいんですか?」

「そうね…適当に将来なりたいものでも書いておいて」

「ちなみに名前は立華奏だよ」

「了解です…」

「さあ、テストが始まるわ、そろそろ席に着いて。それじゃ竹山君、日向君、よろしく」

『キーンコーンカーンコーン…』(テスト終了)

「答案を後ろから集めなさい」

さあ、日向君のアクションだ(笑)

「ああっ!! グランドに巨大な椎茸があーっ!?!」

『(シーン…)』

「はあ、仕方ないわね…(ピッ)」

『ドガアツバキッ!!』

日向君の椅子が火を噴いて空を舞う。日向君は天井にめり込んだ。

『(サツ…)』

その隙に解答用紙をすり替える竹山君。かなり巧くやった。

「おいつ!!何なんだよアレはっ!?!」

「特注で作らせた推進エンジンよ 宇宙飛行士の気分はどうだったかしらっ」

「ぷくく…」

ダメだ…思い出して笑えてきちゃった…。

「さて、次は高松君ね?」

「なっ！？次も同じで良いのではっ！？」

高松君がそう言つと、ゆりっぺさんは真つ黒な笑顔で答えた。

「オオカミ少年の話知ってるかしら？」

「繰り返される嘘は信憑性を失う……………まさかつ！？」

「そういうこと。頑張つてね」

『キーンコーンカーンコーン…』

「ではテストを後ろから集めて来て下さい」

「先生っ！！実は私…（バツ！！）着痩せするタイプなんですっ！！！」

筋肉をピクピクさせながら言い放った。

『（シーン………）』

「そこ、座りなさい」

「はい『ドガアッ………バキッ！！』がはあっ！！！」

「次は大山君よ」

「っ、遂に来てしまったあっ！！でも僕何もネタなんて無いよっ！！？」

「大丈夫よ、大山君は私の言う通りにするだけでいいわ」

「ホッ…」

「ず、ずりいぞ大山アっ!!」

「で、ゆりっぺさんは大山君に何をさせるの?」

「天使に告白するのよ。『こんな時に場所も選ばずごめんなさい、貴女の事がずっと好きでした、付き合っして下さい』って」

「ええっ!?!」

「言われた通りにすれば飛ばないで済むわよ?」

「ったく、告るだけで良いのかよ何かズルいぜ…」

「そんなあつ!!僕の身にもなつてよっ!!そっちは肉体的ダメー
ジで済んだかもしれないけど、僕はメンタルのダメージが凄いやっ
!?!だって女の子に告白するなんて初めてだよっ!?!しかも振られ
るのが分かってるんだよお…」

「へっ、うぶな奴め、練習には丁度良いじゃねえか」

「僕は日向君と違って練習なんかしないっ！！本気の恋しかしないんだよっ！！（ん…？そうかつ！！）」

「どうしても良いけどそろそろテスト時間よ？」

『キーンコーンカーンコーン…』

『ガタンっ！！』

「梅沢君っ！！こんな時に場所も選ばずごめんなさい、貴女の事がずっと好きでした、付き合ってたさいつ！！」

『何いっ！！？』

ま、まさかの展開っ!？

しかもクラスメート全員が反応してるっ!？

しかも何か全員の大山君を睨む眼が半端じゃなく怖い…。

「え、あの…僕はノーマルなんで…、ごめんなさいっ!…!」

『いよっしやあーっ!…!』

何かクラスメート全員が叫んだ。

男子も叫んでるけどまさか…ね…。

「ガン…Orz」

「ふふふ…(ピッ)」

『ドガアッ……バキッイっ!…! (x2)』

「ちょっと待てえ（待ってよ）っ！ー！何で俺（僕）が飛ばされなく
ちやいけないんだよっ！？」

「大山君には天使に告白しなさいと言ったわよね？梅沢君は私の物
よ。日向君はオマケね」

「納得出来るかアーーーーーっ！ー！」

「そんなことより、おっ昼にしっまじよ」

ゆりっぺさん可憐に。。。

その後はゆりっぺさんの思惑通りに話は進んでいった。

天使は見事に全教科0点になり、職員室に呼び出し。
生徒会長を解任させられる。

そして夜はオペレーション・トルネードを行っていた。
ユイちゃんが加入し、更に音楽の幅が広がりパワーアップしたガル
デモの演奏に皆釘付けだった。

一方、生徒会長を解任させられた天使は、オペレーションを止める
こともなく、ただ食堂に夕飯を食べに来ていた。

「今よ、回してちょうだいっ！ー！ー！」

『ブワァっ……！ー！ー！』

大量の巨大送風機が回り、食券が宙に舞う。
天使が買っていた麻婆豆腐の食券も舞い散り、音無君の手に舞い降りた。

そして今は戦線メンバーで食事を採っている。が、
「貴様たちを校則違反のため、反省室へ連行する」

生徒会長代理、副会長の直井文人が現れて戦線メンバーは連行されていった。

Test (後書き)

テスト回でした

大山君、まさかの直斗へのマジ告白でしたね。

まあ撃沈でしたが…(笑)

さあ、いよいよ直井君が登場!

彼を改心させるのは音無君?それとも…?

次回をお楽しみに

感想、アドバイスお待ちしております

では、アディオスっ (^^)ノ

Family affair (前書き)

恐くて今まで見てなかったのですが、なんと、お気に入り登録が80件越え、ユニークは総合で7000近くまでいってました!!
応援して下さいる皆さん、ありがとうございます!!
今後ともよろしく願いしますっ!!

さて、今回は直井回ですね

ではごっご(^o^) /

Family affair

『ギイ…』

反省室の扉が開けられて僕たちは解放された。

「くっそ、あんな狭いところに何日も閉じ込めやがって…!!」

「しかもこの人数だもんね…、ああ寝違えた首が痛いよ」

「っていつか何で高松君脱いでるの…?」

それぞれが愚痴をこぼしながら反省室から出ていく。

「……それにしてもおかしいわね…」

「どうしたんだ、ゆりっぺ?」

「今までのNPCは私たちにあんなことはしなかった。なのにあの副会長…」

「確かに何か引つ掛かるな…」

皆は今はまだ直井君をNPCだと思っている。

「何か対策を練る必要が有りそうね…」

「色仕掛けいつときますかあ?」

「お前の何処に色気があんだよ…」

日向君、失礼すぎ…。

「何だとおっ!!見たことあんのかあっ!!まあ直斗さん以外に見せる気なんかないけどなあっ!!」

「へっ、服の上からでも分からあ!っーが見せる気ねえなら言つなよっ…!」

つまりは服の上からはガン見するんだ…。

「ユイちゃんは可愛いよ？日向君は変態なだけじゃなくても目も節穴なの？」

「酷い言われようだな…。」

音無君がボソッとツッコんだ。

と、まあグダグダ言いながらも僕たちは本部に帰って来た。

「とりあえず、皆は授業にでてちょうだい。但し、別に真面目に受ける必要は無いわ。私が副会長を探る間の時間稼ぎをお願い」

『オッケイ
了解！』

「じゃあ、検討を祈るわ」

僕を含めた皆は授業を受けに教室へ、ゆりっぺさんは副会長を探りに出かけて行った。

～授業中～

『シャカシャカ…』

『カリカリ…』

『チヨキチヨキ…』

『ブンブン…』

『くねくね…』

それぞれ別の事に集中して、全く授業を聞いていない。

『ブンブン…』「あっ！」「カランカラン…』

「……………はめ……………」

何か溜め息が出た。

Side out .

一方その頃のゆりはー

『キイ……………』

屋上の扉を小さく開き、直井を観察していた。

『ドカツバキツ……………!!』

「ぐあ…っ…!!止めっ…!!」

直井は陰で一般生徒に暴力を振るっていた。

「なるほどね…、やっぱり彼は…」

Side out .

— in 戦線本部 —

「— という訳で、恐らく彼はNPCでは無いわ…」

『…………』

皆は驚愕の事実に対し驚く。

「…NPCじゃないのは何となく分かるが、裏で一般生徒に暴力を振るう意味が分かんねえぜ…」

「…彼は私たちと違ってまだこの世界の本当のシステムに気づいていない。恐らくだけれど、表では善行、裏では悪行を行うことで調和をとっているのでしょう」

…ホントにゆりっぺさんの勤ってすさまじいよね…。

「くっそお、またひさ子の一人勝ちかよっ!!」

ひさ子ちゃん、藤巻君、松下五段、TKは麻雀。

「バリバリ…(ぼ、僕…授業中に堂々とお菓子食べちゃってるよ…!!)」

大山君はポテチを頬張る。

「ふっ!!ふっ!!…」

高松君は筋トレ。

「スウ、スウ…」

野田君は机の上で居眠り。

「……。なあ、俺たちは何もしなくて良いのか?」

「良いつて良いつて。適当に喋つとこーぜっ」

音無君と日向君はお喋り。

『トテトテ……。スツ、ガタンっ!!』

「センサー、トイレっ!!」

「はあ、また君か…、行ってきなさい…」

「アイツは何をやってんだ？」

「一分おきにトイレに行く生徒だつてよ…」

とその時――

『ガラガラっ!!』

「貴様ら、いい加減にしろっ!!」

勢いよく扉を開いて直井君たち生徒会が入ってきた。

「わ、私トイレですからっ!!」

ユイちゃんは走って逃げる。

「ヤッベっ!!」

『ジャラジャラ、ボタン…ガタンガタン…』

「ほっ！」

「よっ！」

麻雀組は窓から飛び降りて行った。

…此処、4階何だけど…。

「あわわわ…」

大山君は慌ててポテチを机の中に隠す。

高松君は…あれ？普通に座ってる…いつの間に…？

「…おっと、来やがったぜ」

日向君が呟いた。

「…ん？」

直井君は未だに居眠りを続けている野田君を見つけ、そちらへ向かう。

「おい、起きろ貴様!!」

「あゝん？」

『ブンっ!!』

「ひいつ!!」

不機嫌そうな野田君は半分寝ぼけているのか、クラスメートの一般生徒にハルバートを向ける。

…余談だが、この一般生徒は変化した僕なのだ（笑）

「何のようだ？」

「…貴様は授業を邪魔し、あまつさえ一般生徒に武器を向けておいで、何のようだだと？」

「なんだとっ!?!」

野田君がキレて斬りかかるつとする。

「わぁーっ!?!し、失礼しましたアっ!?!」

日向君と音無君が野田君を連れて逃げてくれた。

「おい、お前ら、離せえっ!?!」

「……ちっ」

僕には直井君が舌打ちしたように聞こえた。

S i d e
o u t .

（音無 side）

あのテストから数日がたつ。俺たち（まあ俺は何もしてないが）は天使のテストに小細工をして、天使を貶めた。あれから天使は何もしてこない。

…… 本当に天使は俺たちにとって悪なのだろうか。授業が終わり、休み時間。

ふと窓際の天使の席を見ると、いつも通りの天使がいた。が、気のせいかな俺には少し辛そうに見えた。

「なあ、此処いいか？」

俺の体は自然と動き、天使の前の席に座っていた。

「……どうぞお好きに」

素っ気ない返事だな……。

……き、気まずい……。

「あ、あ……あのさ、腹……減らないか？奢るぜ？」

『ガタンっ！！』

天使が急に立ち上がる。

やっぱ飯なんかじゃ釣れないか……。どうやって話すのかな……？

と、俺が考えていたらー

「何をしているの？」

「え？」

「ご飯、奢ってくれるんでしょう？」

「あ、ああ、行く。行くよ」

予想外だったな……。

――in 食堂――

「お前……それって……」

確か俺がこの前のオペレーション・トルネードで手に入れた食券。

激辛過ぎで誰も頼まない麻婆豆腐。

この前日向と、実は美味しいという事に気づいたが、まさかコイツ…
好きなのか？

「????」

「いや、何でもない…」

食券と料理を引き換えてもらい、席で食べる。

天使：いや、立華の食うスピードが半端じゃなく速い。……辛くないのか？

「お前、麻婆豆腐好きなのか？」

「……。私は麻婆豆腐が好きなの？」

「いや、俺に聞かれても…」

「…美味いわ」

立華はレンゲに麻婆豆腐をのせてプルプルと震わせる。がー

「時間外の食事は校則違反だ。立華さん、会長を解任になったから
とって、こんなことをされても困ります…」

「えっ！？違反なのかつ！？」

んなこと全く知らねえよ…。戦線で見ると、校則なんて関係ないか
らな…。

「……………忘れてたわ」

と言って、麻婆豆腐を急いで完食する。

……………この真面目な元会長に校則を忘れさせるとは…。好物の麻婆豆
腐、恐るべし…。

「反省室へ連行する」

俺たち二人は連行されていった…。

S i d e o u t .

—直斗sider—

いやあ、一般生徒として一日授業受けてみたけど、ダルいね。
何回も居眠りしちゃったよ…

えっ？今は何をしているかって？それはねー

居眠りしてる間に変身が解けて直井君に見つかったから、反省室（
音無君たちとは別の部屋）で寝てます

また寝てんのかよ…というツッコミを受けそうな気がしますが（笑）

ん？隣に人の気配。

多分音無君と奏ちゃんかな？

………っと、もう睡魔が……。グウー……。……。

「って、寝すぎたアーーーーーっ!!」

ヤバイ、眼が覚めたら隣に人の気配がなくなってた！
急いで出なきゃっ!!

【一方通行発動……】

「キヤハハっ!!…んな扉なんざ屁でもねえっ!!…っらあっ!!」

『ドムウっ!!』

扉がベクトルの反射によってブツ飛ばされる。

【…一方通行解除】

どうでも良いけど一方通行使うと性格変わるな…。
しかもアクセラレータっばく…。

リングランドー

僕がたどり着くと、原作のように地獄絵図だった。

音無君は日向君の元にいる。

直井君は神がどうか語っている。

奏ちゃんは黙ってhand sonicを展開している。

面倒だけど行きますか。

「直井side」

NPCを催眠術で操り盾にしつつ、このクズどもを一掃した。

コイツらのリーダーも僕の足下でひれ伏せている。

抵抗さえしなければ痛い思いをせずに消えられたというのにな…。
馬鹿な奴らだ…。

「さあ、神は決まった」

「コイツ、イカれてやがる…!!」

ふっ、ゴミが今更何を言おうと無駄だ。

立華さんが出てきたのは誤算だったが、最早何をしようが意味はない。

もう抵抗する者などー

「よくもまあ僕の大事な人達をめちゃくちゃにしてくれたね…」

「なっ!?!誰だっ!?!」

もう戦線メンバーも残っていないはず…いや、一人居た!!だがア
イツも天使と同じ独房に入れたはず…!?!?

「さてと、まずはゆりっぺさんを返してもらおうよ?」

奴はそう言った瞬間、僕の視界から文字通り【消えた】。そして気がつくと、僕の後方にコイツらの仲間達全員が奴一人に回収されていた。

いったい、何をしたんだ...!?

そして、奴は一言何やら呟いた。いったい何を...? つ!? 全員の傷が癒えていくだつ!??

「き、貴様は何者だつ...!」

「僕?僕は只の人間さ」

只の人間だつ!? 馬鹿にしているのかつ!?

「そんなわけがあつてたまるかっ!...!っ!?...貴様...まさか、神なのかつ!?!」

そう言うと奴の表情が深刻気味になる。

何なんだ...奴は...?

「直斗sider」

「……まさか、神なのかつ!？」

「神ねえ……」

確かにこの力は神の物だ。が、僕自身は神を殺しに来ているわけだ。神を殺すものは神……」

ふっ、馬鹿馬鹿しいな。

「君はさ、なんで人を簡単に消そうと出来るんだ？それぞれの人生はそれぞれの物だ。君だって同じだろ？」

厳しい眼で。だけど少し温かく、諭すように聞く。

「兄は……死んだ」

双子の兄弟として生まれた直井君たちは、ある日木に登って遊んでいた。

が、二人は落ちた。

一人は無事に生き残るが、もう一人は即死。
死んだのは兄のほう。

天才と呼ばれた才有る者だった。

しかし、世間には死んだのは弟の方として広まった。

弟は必死に兄を演じた。

天才と呼ばれた兄を演じる事は難しいなんて域ではなかった。
それでも彼は努力を続けた。

最期まで。兄として…。

「だから何？」

「な…んだと？」

「自分は自分として生きれなかった。だからって他人を消して良い
ことにはならない」

「黙れ…」

「本当は分かってるんだよね？」

「黙れえっ!!」

『ガバツ!!』

僕は直井君を優しくギュッと抱きしめた。

「な…?」

「…辛かったんだよね…。でもね、もうお兄さんのふりはしなくて良いんだよ。君は君。他の誰でもないんだから」

優しく頭を撫でた。

「…じゃあアンタ…認めてくれんの…?」

「僕は直井文人としての君と仲良くしたいな」

直井君の瞳から、涙が溢れた。

「うっ…うっ…あーっ…!」

僕は直井君が泣き止むまで、ずっと抱きしめて頭を撫で続けた。

F a m i l y a f f a i r (後書き)

直井君、実は直斗をまだ女の子だと思ってます(笑)

だから、抱きしめられた瞬間はー

「黙れ…(胸、無いなorz)」

的な事を考えていたのかも…?(爆)

まあそれは置いておいて、次回は釣り回ですね、はい。

恐らくは原作とあまり変わらない展開になるかと思われます。

ではまた。See you next time!! (^O^)
シ

Alive (前書き)

お待たせしました。

十三話です どうぞ (*^o^*)

A l i v e

「魚を食べたくないかしら？」

突然ゆりっぺさんが言い出した。

「というわけで、今日のオペレーションは、【モンスターストーリー
△】よっ！！！」

「っ、遂に来てしまったアーーーーーっ！！！」

なんだい？いきなり叫び出して。
僕と音無君以外は皆慌てている。

「な、モンスターっ！？」

音無君の頭の中ではまた壮大なオペレーションが行なわれてるんだ
ろっな…。

まあその後すぐに只の釣りだと分かったけど。

「ふん、何故僕が貴様達みたいな愚民と釣りなどー」

と直井君が言いかけたので、

「い、行かないの…？（うるうる）
と涙目の上目遣いで言ってみると

「お供します、梅沢さんのためならばっ！！」（ドクドクドクドク…）
」

…。。 変わり身早っ！！
つか鼻血…。

ちなみに他のメンバーも鼻血だらけになっちゃったんだけどね…。

「と、とりあえず、釣り、行くわよっ！！」

『おおーっ！！』

Lin川

「…で？なんで天使がいるの？」

僕がガルデモのメンバーを誘ってから一緒に来ると、皆と一緒に天使が居た。

「実はカクカクシカジカで…まあ要は音無君が連れてきたのよ」

「ふうん、まあ別に気にしないけどね。じゃ、僕たちはあっちで釣ってるねえ」

という事で、僕はガルデモのメンバー、直井君と一緒に釣りに行く。

130分後…

「とじやっ…！」

「おお、ひさ子さんスゴいですねっ…！」

「これでもじつは匹目ですよ…！」

ひさ子さんは関根ちゃん、入江ちゃんの二人と釣っている。
二人は全然釣れてないようだが、ひさ子さんは凄い勢いで釣り上げていた。

「…まあ私もアレには敵わないさ…」

『あはは…』

三人が見た方向には――

「おっりゃア―っ!!」

「うおーっ!!流石は直斗さんですうっ!!ヤバすぎですよっ!!」

「梅沢さん、流石ですっ!!」

「流石は私の直斗…」

山のように積み上がった魚と、勢いよく釣り上げる直斗、それを讃えるユイ、直井、岩沢。

「みゆきち、なんか直斗くんが来てから岩沢さんもキャラ変わったね…」

「そうだね、しおりん…」

「直斗…カッ」可愛いな…」

『ひそ子さんっ！…っ』

「ふえ？あ、いや、何でもないよっ！？／＼／」

『（直斗くん…いつの間にひそ子さんにもフラグを…っ？）』

「一方他メンバー side」

「こ、コイツはアっ！？ぬ、又シだアーっ！！」

フィッシュ斎藤が天使の竿のしなりぐあいを見て叫んだ。

「皆ア、手伝えっ！！」

音無をはじめとして、日向や松下五段、高松と、どんどん集まってきた。
ガルデモメンバーとゆりつぺ、直井以外は全員集まった。が、それでも又シはビクともしない。

「くっそあ…、このままじゃ俺たちが釣り上げられちまう…」

日向が呟いた。

「直斗 s i d e r」

『……………』

「ん〜 大量大量っ」と

僕が釣り上げた魚の総数 13742匹。それが山をつくりビチビチと音をたてて跳ねている。

「さてと、あつちは…ってめっちゃヤバそうじゃんっ！…！」

見ると天使を筆頭に、大きな蕪状態で魚(?)を釣ろうとしているが、体重で負けているせいで今にも引きずり込まれそうである。

「皆、ちょっとあつちを助けて来るねっ!!」

僕は駆け出した。

―他メンバーside―

「くっ、やべえぞっ…」

「ぐあっ…、い、いくらヌシだからっておかしいだろっ!!」

ヌシはメンバー達が思っていたよりも、遥かに重くて力強く、いくら引っ張っても、動かない。いや、それどころか此方が引きずり込まれそうである。

「……………」

『ダンっ！！！！』

その時天使が力強く踏み切り、高く飛び上がった。

「……って、又シだけじゃなくて俺たちも釣られちまつてるっ！？」

「そ、それどころじゃねえーっ！！このまま落ちたら又シの胃袋にまつしぐらだよっ！！！」

『ぎ、ぎゃあー！！！！っ！！！！』

最高地点にたどり着き、そして落下。

タイミング良く……いや悪く、又シが口を大きく開いた。

「……………助けなきや……」

奏は呟く。そしてー

『h a r m o n i c s ……』

すると奏は二人に分身し、加速。又シに斬りかかる。

しかし又シの身体は金属のように堅い。勿論h a n d s o n i c

で斬れなくはないが、空中であり、上手く狙いが定まらず、傷つけるだけで精一杯だ。

奏は考えた。そして更に『harmonics』を使い、分身を作ろうとした。

その時――

「斬空剣っ!!」

『スパッ!!』

下から鋭い斬撃が飛んできて、又シを真つ二つに。更に追加で何発もの斬撃が飛んできて又シはバラバラになった。が、

『お、落ちるーっ!!!!』

「はぁ…、【風神】」

先ほどの斬撃の主がため息をつきながら悪趣味なブレスレットらしきものを装着する。

こんな上空からではよく見えないのだが、皆には誰だか分かっていない。そう、直斗である。

『ブワッ』

突如突風が吹き、落ちる速度が大きく下がる。

そしてゆっくりと着地。

「た、助かったあ…」

「まさかあんなに飛ぶとはな…」

「っーか…」

皆は一斉に同じ方向を向く。そこにはバラバラになった巨大魚があった。

「…ねえ、こんなのどうやって食べるの？っていつか保存とか出来
ない？」

『あっ…』

皆は何も考えていなかった。

「しゃーねえ、一般生徒にも配って一気に食つか…。」

日向がそう言ったので、皆で分担して振る舞うことにした。

（イングランド（直斗side））

結局、巨大魚を使った汁物を作って配給した。そこそこの味付けをしたので、なかなか美味しくできた。

一般生徒にも好評だったらしく、行列ができた。

2時間くらいかかってようやく配給が終わり、今は皆で片付けをしていた。

「なあ、そついやゆりっぺは？」

「そついや見てねえな……」

作業をしつつ、皆はゆりっぺさんの行方を気にかける。

「まあそのうちフラフラ〜っと帰ってくんじゃね？」

と日向が言った直後――

「……………ぐっ…!」

『ゆ、ゆりっぺっ!?!』

ゆりっぺさんがボロボロになって帰ってきた。

「だ、誰にやられたんだよっ!?!」

「……………天使…っ!?!」

ゆりっぺさんのその一言に皆が驚愕の表情を見せる。

「ち、ちょっと待てよっ!?! 奏はずっと俺と一緒に居たんだぞっ!」?

と音無君が言ったのだが……

『ザッ………』

「う、嘘だろ……? 奏が……二人っ!?!」

そこにも奏ちゃんが立っていた。

『ダッ!?!』

僕たちの誰もが行動するより速く、奏ちゃんがhand sonicを展開して走り出す。

向こうの奏ちゃんも同じくhand sonicを展開して走る。そして――

『グザッ!?!』

お互いに刺しあって血を噴き倒れた。

「か、奏えっ!?!」

音無君が駆けつけて奏ちゃんを抱える。

「急いで保健室へっ！！」

皆で急いで奏ちゃんを保健室に運んだ。

もう一人の奏ちゃんをそのままにして……………。

V S ・ h a r m o n i c s !

「厄介な事になったわね……」

「奏ちゃんの事？」

「ええ、まさか二人になるとはね……」

「それにしてもやけに好戦的だったのは何故だ？」

「あー……多分だけどさ、皆が釣り上げた又シに食べられそうになったとき、最終的には僕が助けたけど、奏ちゃんも確か【h a r m o n i c s】ってやつを発動したんだよね。で、その時強い攻撃の意思を持っていた奏ちゃんの分身ができた。という訳じゃないかな？」

とりあえず説明しておいた。

「ってことはよ、今までの天使よりも好戦的なぶん厄介なんじゃないか……」

「どつやって倒すんだよ……」

「ちっ、何かいいアイデアは無いのか愚民どもっ！！勿論、梅沢さんは美しき姫君でありますが…」

「はあっ！？だったらためえもなんか考えるよっ！！」

「お、落ち着いてっ！！」

「天使が出したというなら…、消すこともできるのでは無いかっ！？」

「…出来たとしても、時間がかかるか難しいかでそう簡単には無理ね…。出来るならこんな風にはならないもの」

「でもきつとそのためスキルはあるはずだよ…。奏ちゃんがリスクをそのままにしておく筈がないもの」

「……とりあえずは天使エリアに潜入して、何か探ってみるわ。今日のところは解散ね…」

「次の日……」

「っ……やられたっ……まさかこんなにも速く行動してくるなんてっ……！！！」

「おい、貴様っ……一体何をしたっ……？」

「プログラムの書き換えをただけよ……」

「とにかく今は、奏ちゃんの間所を探ろう！NPC達に奏ちゃんを診たか聞いてみよ？」

「そうね……各自、天使の目撃情報を集めましょう！」

「2時間後……」

「……ここかよ……」

目撃情報をたどった先はギルドであった……。

「しかし、何やら黒い怪物を見たという情報もあるのだが……？」

「えっ！？」

おかしい……。

影の出現には、まだもう少し時間があるはずだ……。

これも僕が介入したせいか……？それとも……

「……な……とさん、……なおと……ん、直斗さんっ……！」

「ふえっ！？な、何、ユイちゃん？いきなりおっきな声だして……」

「いきなりじゃないですう……ずっと呼んでるのにボーンッとして……」

「う、うめん…」

そんなに何度も呼んでくれていたんだ…。
まったく気づかなかつたよ……。

「で、なあに？」

「あ、はい。今回はガルデモの陽動はなしですって」

「ああ、オツケーだよ、ありがとう」

「はいっ」

うん、やっぱりユイちゃんは可愛いなあ…。

「それじゃ、行きましょ」

そしてギルドへー

「っ！！早速お出ましたいだよ？」

『えっ！？』

「ふっ！！」

分身は、僕を含めた皆が体制を整える前に突っ込んできた。

狙いはー僕だ。

恐らくは最も速く自分に気づき臨戦態勢に入ろうとした僕を狙ったんだろっ！。。

『ブンっ！！』

『な、直斗なほくんっ！！』

分身のhand sonicは確実に僕を貫く

ー 筈だったが、

『ガキーンっ!!!』

「なっ!?!」

「僕のオフエンスアーマーは、そんな剣ごときじゃあ超やぶれませ
んね…。それに…隙だらけですよ?っ…。2体目のお出ましで
すか…」

「……よく気がつくのね?」

『なっ、なんだってっ!?!』

皆、気づいてなかったんですか…。

「仕方ない、先に行つてつ…！すぐに追い付けるから…！」

「で、でも……」

「いや…、私たちは足手まとい…、此処に残るのは浅はかなり……」

「……そうね、梅沢君っ…！絶対に追い付いて来てちょうだいっ！
！皆、今のうちに進むわよっ…！」

皆は走つて次へ進んで行つた…。

「ふっ…貴方一人で私たち二人ともを相手に出来ると思っているの
？」

分身の一人が嘲笑うように僕に言い放つた。

「出来ると思つているのかつて？逆に君たち二人だけで足りると思
つてる？」

逆に笑ってやる。

「……Gird skill hand sonic」

「無駄だ…『ひれ伏せ』」

『ドガアッ!!』

「なっ…!?!」

「永遠にここで寝てなよ…。くらえっ!!」『吸血殺しの紅十字』っ
「!?!」

『ボウっ!!!』

「ぐっ…アッ!!」

分身は焼けて跡形もなく消え去った。

「ふう…、後を追いますか…」

僕は皆を追いかけた。

―ゆりside―

ようやく最下層ね…。

梅沢君と別れてからここまで、松下五段に教わった柔道で一人一殺で進んで来た。

残っているのは、私、音無君、ユイ、岩沢さんだけ。

梅沢君、速く追い付いて来てっ！！

「行くわっ！！」

『ザアっ！！…』

急な斜面を滑り降りる。
そこにもやはりー

「まあいるわよね……」

分身がいた。

「此処は二手に別れましょう！分身の相手は私、ユイ、岩沢さんでするわ。音無君は本体を捜してharmonicsの使用を促して」

「分かった。……気をつけるよ……？」

「そっちなね……。ふっー!!」

『ドガアッンっー!!』

爆弾を投げつけて威嚇する。

煙をかき分けて分身が突っ込んでくるけれど、これで仕止められるとは思っていない。

腕を掴んで背負い投げを極める。すると分身は両腕にhands
onicを展開して真上でクロスさせる。

「あれは…っ！…皆、耳を塞いでっ！！」

「howling……」

『キーン……』

大音量で快音波が鳴り響く。私は分身に突っ込んでナイフを使い押し倒す。

「な…！！…ぜ…！！？」

天使が何かを呟いた。

「えっ？何？耳銚してるからよく聞こえないのよっ」

と言いつつ耳銚を外す。

「ぐっ……。っ！……ぶっ」

分身一瞬が悔しげな顔をして、笑う。

「な、何がおかしいのよっ!?!」

「ゆりっ!!後ろだっ!!」

「えっ!?!」

岩沢さんの声がしたから、後ろを見た。するとそこには10人程の分身と、3体の黒い影のようなものが立っていて、そのうちの一人の分身が私の目前まで迫っていた……。

嘘……、やられる……?

いや……、助けて……っ!!

「助けてっ梅沢君っ!!!!」

私は叫んだ。

しかし攻撃は止まらない。

もうダメだ……。

私が諦めた直後――

『ギーーーーンっ！！』

「超呼びましたか？お姫様っ」

そこには私を守るお姫様のような王子様が立っていた…。

ー直斗 s i d e ー

超あつぶねえーっ！！

超間に合わないかと思ったア…。

何とか『瞬歩』と『オフエンスアーマー』を使って超防げてよかったよ…。

って、超オフエンスアーマー使えばだから超微妙に絹旗っぽくなってるんですけど…。

超解除つと……。

それにしても、まさかホントに影とはね……。とりあえずやっちゃんわないとね……。

【一方通行】……。

「キャハハっ!!パーティーの始まりだぜっ!!かかって来いよ、三下がアっ!!!!」

『…………。』

「あぁん?てめえらいきなりしげやがってよ……。ちっ、来ねえなら此方から行くぞオラアっ!!!!」

『ダッ!!!!』

勢いよく地面を踏みつけ、反射により高速で移動する。

「っ!?!か、かはっ……!!!!」

「一体目エーっ!!!!」

「ゲフツ……!!」

「二体目エーっ!!」

「ゴホっ…っ!!」

「オラオラア、三体目だぜエっ?どうしたア分身さんよオ?」

『は、hand sonicっ…!!』

「はッ、ムダムダァーっ!!」

三体の分身がhand sonicで同時に攻撃して来たが、全ては反射によって跳ね返される。

「ちょオっただけ本気で行くぞオ?三下どもオ」

『フッ』

「う、梅沢君が…消えた…っ!？」

「ゆり、見ろっ…!!分身たちがっ…!!」

「い、いつの間……っ!?!」

「うわぁ……あの直斗さん、えげつない攻撃力ですねえ……。でも素敵ですうっ」

『ドサッ………』

「けっ、雑魚が………」

【一方通行】解除……。

「全く……。まさか、影とはね……。まあ弱いから無問題だけどさあ………」

とにかく僕らは音無君と、奏ちゃん本体の方へ向かう。

すると、音無君と奏ちゃんが居た。が、奏ちゃんはかなり辛そうに叫んでいる。

「あ————っ！！！！う、いやあ——！！！！」

「音無君っ！！！！ちょっとどいてっ！！！！」

僕は音無君を押し退けて奏ちゃんに【大嘘憑き】を発動させて分身の吸収をなかったことにした。

「無事でいてくれ……奏えっ……！！！！」

目を覚まさない奏ちゃんを音無君は抱きしめた……。

A d i s a p p o i n t i n g e n d i n g

I i n 保健室―

「奏ちゃん、やっと落ち着いてきたみたいだね」

「ええ。けれど、今度は油断せずにちゃんと見張りをつけますよ」

「じゃあ音無君、よろしくねえ」

「えっ！？俺なのかつ！？」

音無君は予想もしていなかったようだった。

「だって、奏ちゃんが一番心を開いているのは音無君でしょ？目が覚めた時にいて欲しいのは心を許せる人間の方がいいじゃん」

「梅沢君の言うことも一理あるわね。音無君に任せましょ。最も、近くの部屋に椎名さんとTKを待機させておくけどね」

「……分かった」

「じゃあ僕はしばらく別行動させてもらうね。あの影のこと、気になるから…」

「……良いわ。でも約束して。絶対に私たちの……ううん、私の元へ帰ってくるって」

「ゆりっぺさん…?」

ゆりっぺさんが上目遣いの涙目で、しかも袖をちょっとだけ掴んで言ってきた…。

「本当は恐かったのよ…。あの時…貴方が一人であの場に残って…。もしかすると、追い付いて来ないで、消されてしまっんじゃないかって……。だからーんっ!?!」

ゆりっぺさんはそこで口を止めた。

何故なら、僕の口が彼女の口を塞いだからだ。

「んっ……ぶはっ!っ、梅沢…君?」

「直斗…だよ」

「えっ？」

「直斗って呼んでよ。ゆりっぺさん…いや、ゆりっぺは何時まで経っても僕のこと名前で呼んでくれないでしょ？だったら、今日のこのキスと、名前の呼び方の変化が、ゆりっぺの元へ必ず帰ってくるって証。ダメ…かな？」

「直斗君……。ありが…とうっ／＼／」

「うんっ 好きだよ、ゆりっぺっ」

「わ、私も…。愛してるわ、直斗君…／＼／」

と、良い雰囲気になって、もう一度キスをしようとしたのだがー

「ん、んっ…！おい、俺たちのこと忘れてないかあ？」

「ああ、日向君、居たの？」

「居たよっ…！居ましたよっ…！っーか直斗ちゃん、戻ってくる証

なら、俺にもキスを……チュウ」

「ええっ!?!い、いやぁー……っ!?!」

「日向てめえ……、良いところだったのに……。邪魔した上に下らねえことしてんじゃねえっ!?!」

『バキィっ!?!』

「ほげえっ!?!」

「前にも言ったけど、日向君なんかには微塵も興味なんか無いんだよっ!?!ベエーっ!?!」

「そんな……ガクッ……」

「じゃあ行ってくるよ」

「気をつけてね?」

「うん!?!」

【変身】^{トランス} …っ！！

僕の背中に大きな天使の翼が生える。

『バサっ …！！』

目指すのは寮。

もしもNPCが影化しているのであれば、NPCがたくさんいる此処が一番危険かつ重要な情報に繋がるキーポイントである。

『ファサ……』

【変身】トランス解除…。

ゆっくりと降り立ち翼を消す。

「さて…と、NPCと影は何処にいるかな…？ん？」

男子寮の入口付近の部屋で一般生徒がパソコンをいじっている…。

【パラサイトシーング欲視力】…。

少し気になるからその生徒のしている視界を乗っ取った。

「っ…！…まさか…これは…！…！」

そこにはたくさんの影のデータ、一般生徒のリスト、戦線メンバー及びに人間のリスト。

そして僕が今までに使ってきた能力のリストと画像……。

「こゝ、コイツは……まさかっ!？」

僕が死んだ原因。

憎んでいるとも言える相手――

――神……。

「やはりコイツが影の操作を……。くっ……。コイツだけはなにがな
んでも倒しておかないと……。っ!！」

と言った後、僕は小さな違和感に気付いた。

「コイツの気配……。只の一般生徒……。いや、少し違うな……。まるで、
傀儡……。？」

「はい、だいせーかあいつ」

「なっ…!?き、君はっ!?」

突然の声に反応して臨戦態勢に入った……のだが…、そこにいたのは――

「……幼女？」

若干痛々しい格好をしたちびっこであった…。

「うがぁーっ!!幼女言うなアっ!!!!私は邪神なんだよっ!?!
アンタを不幸にした張本人っ!!!」

「……んで…?」

「ほえ？」

「なんで邪神なのに幼女なんだよぉーっ!!?!もつと魔王的な奴だ
と思っただのにいっ!!!こんな可愛い娘だったら復讐できないじゃ
んかっ!!!」

幼女は可愛がるべきであり、虐めてはいけないんだっ!!

「か、かわっ!?!って、だから幼女言っなよっ!!」

「とにかくっ!!復讐できんっ!!とりあえず影の消去と世界の訂正をお願いしますが!!」

「潔すぎっ!?!ま、まあ?頭を下げられるのは別に悪い気はしないから聞いてやっても良いけど?但し……」

「ホント?ありがとう〜 よしよしっ」

「にゃふ〜/~/…って違あっ!!話は最後まで聞けっ!!」

「なに〜?」

「ふふん 代償として、これからお前が転生するたびにいろいろと私に弄らせてもらっっ」

「例えば?」

「へっ！？そ、そうだな……、えと、あ、あれだっ！！の、能力の制限と基本の姿形を私の好きなようにさせてもらっっ！！どうだっ！！辛いだろっ！！ふはははー」

「オツケー」

「ふはははーは？」

「だから、オツケーだつて」

「な、なんだとっ！？せつかくのパーフェクトチートを中途半端チートにされるのだぞっ！？」

「別に良いよ、じゃあ契約成立っ、よろしくねえ」

「わ、分かった……」

『ピカッー』

世界が輝いたら、いくつも見えていた影が消えていて、影になった

NPC達も元に戻っていた。

そして邪神ちゃんは消えていた…？

「さて…と、後は皆の卒業と見送りだけかな…？」

戦線は、これで解散かな…？
なんか…寂しいな…。

— i n 保健室 —

「皆を…」の世界から卒業させよう
「皆を…」の世界から卒業させよう

奏ちゃんと音無君は二人きりで会話している。

ちなみに僕は、窓の外から覗いてる（笑）
そろそろ入るかな？

『コンコンっ』

「ん？のわぁっ！？う、梅沢っ！？」

「ただいまあゝ」

「お、おかえり…」

「卒業式の準備、する？」

「へっ！？」

なんて間抜け面…（笑）

「もう、僕たちは戦う必要がなくなったから、此処から卒業しない
かって言ってるの！」

「戦う必要がなくなった…?」

「ま、神は消え去ったってところぢ…」

「卒業式…楽しいのかしら?」

「どっちかって言うと哀しいかもね。でも一つの旅立ちには丁度良
いかなって」

「…そう」

「はは…、素っ気ないなあ…。」

「とりあえず、僕は準備しておくから、音無君は皆に簡単に説明し
ておいて」

「あ、ああ…」

「いよいよ、最期の時かな…?早かったなあ…」

今までの事を思い出しながら作業にかかったー！。

A d i s a p p o i n t i n g e n d i n g (後書き)

Angel Beats!編をそろそろ終了して、次の恋姫+無双編に行きたかったのですが、なかなか良い終わらせ方が判らず、このままいくと終わらない気がしてしまったので、かなり強引に終了させることになってしまいました…(. . . ;)

いつもより何倍も駄文でホントに申し訳ありませんm | | m

次回はいよいよAngel Beats!編最終話!!

何とかキレイにまとまると良いんですけどね…(. . . ;)

Graduation

「これより、死んだ世界戦線の、卒業式を行いますっー!!」

今、僕たち死んだ世界戦線のメンバーと、奏ちゃんは、全員講堂に集まっている。

全員で百数十人にもなる我らが死んだ世界戦線。
そんな組織もいよいよ解散となる。

「まず最初に、死んだ世界戦線のリーダー。ゆりっぺこと仲村ゆりさんより挨拶です」

ゆりっぺが立ち上がり、一礼。そしてステージへ上がり、マイクの前へ立つ。

「コホン、えー…長くに渡り、天使と戦い、神に抗ってきた私たち、死んだ世界戦線ですが、本日をもって解散となります…。少人数から始まったこの戦線も、今ではこんなにもたくさんの仲間たちでいっぱいになりました…。そして、我が戦線と長らく戦ってきた天使こと立華奏ちゃんとも、こんなイベントを共に行えるほど、心を許せる仲間となりました…。それも全て、皆のおかげであると私は思います。私たちの戦線は今日で無くなりますが…、共に戦ってきた仲間との絆と想いは永遠の宝です…。それはきつと、来世でも私たちの魂に刻まれたままとなっているでしょう。今日はその最期の思

い出です。最高の時間で旅立って行きましょう!!以上、死んだ世界戦線代表。仲村ゆり』

『ワァーっ!!!』

拍手と野次が講堂に鳴り響く。

「えー続きまして、卒業証書授与です。卒業証書の授与は僕、梅沢直斗より行います。」

『ヒューっ!!!』

『梅沢ァーっ!!!』

『直斗さぁんっ!!!』

僕はステージに上がり、大量の卒業証書を眺める。
一つ一つに名前が刻まれていて、その人との思い出が頭に浮かんで
は消える。

「では…、仲村ゆりっ!!!」

「はい！」

「今まで本当にありがとう。僕たちがここまでこれたのはゆりっぺのおかげだよ」

「こちらこそありがとう…。貴方には、何度も助けられたわ」

「では、卒業証書と共に、卒業記念品を贈呈します」

「えっ？」

『ザワザワ…』

「えー、僕が勝手に用意しました。これは来世に行っても消えることとはありませんっ！！」

「【ARM、バツボ：Ver.1、輪廻口寄せの印】…。」

バツボのマジックストーンで、僕が独自に編み出した技、【輪廻口寄せの印】。これは僕が契約者を呼び出すと、契約した姿、記憶を

もって契約者が現れる口寄せの術式である。

「な、何…？」

ゆりっぺの身体に複雑な術式が吸い込まれ、身体が一瞬だけ輝いて戻る。

更に皆にも【輪廻口寄せの印】を刻む。

「な、直斗君…、これは…？」

「いつか、きっとまた会えるようにおまじないだよ」

ちよつと嘘だけど…。

「ありがとう…。きっとまた会えるわ…」

「うんっ」

ゆりっぺがステージを降りていく。

「では、続いていきますっ！！日向秀樹っ！！」

「おっっ」

式は順調に進んでいった。

そしてー

「では……、卒業生、退場っ……！！」

一人一人、仲のよかった者とゆりっぺ、そして僕に話しかけては消えていく……。

残るのはアニメでも最後まで残ったメンバーと僕だけ。

「ふん、女の泣き顔なんて見たくない。先に行く…」

直井君が言い、僕の前にやって来る。

「ひっく…グスツ…」

「泣かないで、ね？最後に直井君の言葉、ちゃんと聞かせて？」

「うぐ、はい…、梅沢さんが居なかったら…僕は今頃…報われてなくて…でも、もう迷いませんっ！！ありがとございましたっ！！」

「うんっ また、会おうね」

「はい…、必ず…また…」

そう言って消えた…。

「逝っちゃった…」

「さあて、次は誰が泣く番だ？」

「泣きなんて…。奏ちゃん、争ってばかりで、本当にごめんね？私、長女だったから、奏ちゃんの面倒、見てあげられたのにな…。？こんな世界だけど、似合う服とか選んであげられたかもしれないのにな…。？でももう…。お別れだね…。」

「うん…」

ゆりっぺは奏ちゃんを抱きしめる。

しばらくして離すと、今度は僕の方へ来た。

「直斗君…。気づいてなかったと思うけど、貴方のこと…。最初に会った時から好きだったのよ」

「そ、そうだったのっ!？」

驚きだ…。

「ふふ…。やっぱり気づいてなかったのね？だからね、この前貴方からキスをしてくれたとき、凄く嬉しかったわ…。私、あんな人生だったから、人を好きになるなんて、初めてだったの。初めての相手が貴方でよかったわ…。」

「僕もゆりっぺでよかったよ…。」

「ありがとう…。大好きよ。いつまでも…きつと…」

「ん………」

最期に口づけをすると、ゆりっぺは消え去った。

「……まあ俺だわな？」

「ん？俺でも良いぞ？」

「バアカ、奏ちゃん残して先に行くなよ。……音無、直斗ちゃん、二人ともホントにいろいろサンキューな？二人が居ないとこんな終わりも迎えられなかったと思うよ」

「まあ僕は特別なケースだからね…？」

「俺も、本来ならこの世界には来る筈がなかったんだよな…？最期にはちゃんと報われた人生をおくっていた。でもその記憶が閉ざされていたから此処に来られた」

「二人とも選ばれし者って感じだな……ま、立ち話もなんだ…。

そろそろ逝くわ。じゃあな、親友共っ！！」

「ああ、ありがとなっ！！」

「またねっ」

『パチンッ』

ハイタッチをした直後、日向君も消えた。

「さて、残ったのはこの三人だね？」

「ああ、どうする？梅沢は先に逝くか？」

「うーん…。まあ二人にはゆっくりしてから逝って欲しいし、僕は先に新たな世界に行かせて貰おうかな？」

「そう…、ありがとう」

「んっ 奏ちゃん、音無君、バイバイっ」

――僕は光に包まれて消えていった。

Graduation (後書き)

Angel Beats! 編終了ですっ!!

奏ちゃんと音無君は消えました。が、消える時は手を繋いで二人一緒について感じですよ

次は恋姫†無双編ですよ

主人公設定（恋姫十無双編）

身体能力：S++

魔力：F-（皆無）

知力：A+

気力：EX

運氣：A+

特殊能力

- ・ トレースソウル 形態模写：知っているマンガ、アニメ、ゲームの能力を全てコピーし、十全に使いこなすことができる。

状態異常

- ・ 邪神ちゃんとの契約により、
- ・ 魔法の類いが一切使えない。
- ・ 禁書目録の能力は、連続10分間しか使えない。
- ・ 魔道具が一部使用不可。

特徴

見た目と口調がこれはゾンビですか？のセラフィム。
服装は基本的にはセラフィムの物ではあるが、胸が無いので合わせたサイズになっている。

基本的に魔法が使えないので、『めだかボックス』の異常と過負荷、『灼眼のシャナ』の贄殿遮那、『烈火の炎』の魔道具（一部使用不

可)、『禁書目録』の超能力(連続10分間のみ)を使用している。

三國志ですか？いいえ、恋姫十無双です（前書き）

恋姫十無双編、スタートっ！！

三國志ですか？いいえ、恋姫十無双です

「ヤッホー」

目の前がまともに見えはじめて、目を開いた直後に聞こえた声。その主は――

「お約束っ とりあえず次はどの世界に行くんだいつ？」

邪神ちゃんだった…。

「そだね…。恋姫十無双なんてどうかな？あ、真・恋姫十無双のほうね？ゲームの」

「ああ、あれかあ…。じゃあ見た目はねえ…。これはゾンビですか？」のセラフイムで あと、能力の制限は、『魔法使用不可』、『禁書目録の能力は連続10分までしか使用不可』、『アイテムはほぼ無し』の3つね 名前も変えよっか？」

結構えぐいな…。

まあ智力と身体能力がそのままだけマシかな…？

「名前はいいや。じゃあ行ってきてもいいかな？」

「ぶう…、もうちょい相手してくれてもいいのに…。まあいらないけど（笑）じゃあ行ってら」

足下が無くなった。

「ぎぎ、ギヤアーっ！！やっぱり今度シバくっ！！」

ーいんこ？？？ー

「ったた……。全く、まさか落とされるとは……。んーと、こっは何処でしょう?」

(直斗は姿及びに使用中の能力によって話し方が何故か変化します)

「おい、そのキレーなねえちゃんっ!!」

なにか下品な声が聞こえました。

振り返るとそこには三人の男。肥えた男と背が異様に低い男、そして髭面の男でした。

「何か用でしょうか? 気持ち悪い……」

「き、気持ち悪いっ!!? ま、まあいい、俺たちと一緒に来て貰うぜっ
っ 楽しいこと「嫌です」早えよっ!!」

「何故私が貴殿方のような気持ち悪い連中に着いていかなければならないのですか? 第一私は男ですが?」

『なっ何いーっ!!!?!?』

「しゃべらないでください、気持ち悪い……」

「ち、此方が下手に出てりやあ、イイ気になりやがってっ……！おい、てめえらっ……！やっちまえっ……！」

『応っ……！』

「やれやれ……」

l s i d e o u t l

l ??? ? s i d e l

「と、桃香様っ……！お待ちくださいっ……！鈴々っ……！お前も待てっ……！」

「愛紗あゝ、遅いのだあ。そんなにゆっくりしていると御遣い様もどつかに行っちゃうのだ!!」

「そつだよ愛紗ちゃんっ!!急がないとっ!!もう少して流星が落ちた所につくんだからっ!!」

「全く…、妖の類いの可能性だつて有ると言うのに…」

私たち三人は、桃香様が見たと言う、流星が落ちた場所へ向かっている。

「ねえ、愛紗ちゃんっ!!あれって!?!」

桃香様が指を指す方向へ目を向ける。するとそこには一人の女性が三人の賊に囲まれているではないか!!

「っ!!鈴々、桃香様を頼むっ!!私はその女性を助けてくるっ!!」

「あっ!ちよつと、愛紗ちゃん!」

私は走り出した。

l o u t s i d e r

l 直斗 s i d e r

「仕方のない糞虫ですね…。秘剣っ！！燕返しっ！！」

『斬っ！！』

一瞬にして、一人の賊…糞虫を斬る。刀は勿論葉っぱの刃ですよ？

燕返しは一瞬で二度の斬撃を与える業。しかもそれを急所に当てたのです。

チートな身体能力で…。

「こ、コイツっ…！！何しやがったっ！？」

「何って…、単に斬っただけですが…」

と言った直後、後ろからもう一人の賊が斬りかかって来ました…。

「ち…、こうなったら…【一方通…】ん？」

後ろを見ずに能力を使おうとしたのでよくわかりませんでした。が、振り返るとそこにはあの、関羽雲長が青龍錠月刀を構えて立って居ました…。

か、カッコ良すぎますね…。

「大丈夫か？その御仁？」

私に声をかけてきました。

「ええ、お陰様で。さて、残るは髭面の貴方だけですが…？」

「ひっ…！！た、助けてくれえーっ！！」

に、逃げ足だけは速かったようですね…。

「お〜い、愛紗ちゃんっ！！」

「と、桃香様っ！？彼処でお待ちくださいと…」

「あ、もしかして、この人が御遣い様？凄く綺麗な人だね〜…」

「ん？そういえば珍しい着物を着ている…？」

「ねえねえお姉ちゃん、お姉ちゃんって御遣い様なのだ？」

劉備、関羽、張飛の三人と早速会えました…。
感動ですね…。

「御遣い様…というのかは分かりませんが、こことは違う所から来ました」

「やっぱりい〜っ　ねっ？愛紗ちゃん、言った通りでしょ？」

「し、しかし、まだ御遣い様と決まった訳では…。そ、そうですっ
！！違った場所から来た証拠がありませんっ！！」

「証拠か…。ねえねえお姉さん、何かある？」

劉備ちゃんが私に向かって聞いてきます。

「そうですね…。とりあえず…、これでどうでしょうか…？」

だしたの1000円玉。

「うわぁ…綺麗な細工…」

「凄いのだぁ…」

「これは見事な菊の紋様ですね…。これは貴殿が彫ったので？」

「いえ、これは私の国で使われている硬貨…、まあお金です」

「確かにこれは見たこと無いよ…。愛紗ちゃん、どうかな？」

「…これだけでは判断しづらいのですが…。しかし、先ほどの剣の腕を見ると、力を貸して欲しい人物ではある…」

関羽が考え出しました。
時間がかかりそうなので一つ提案を出してみましよう。

「あの…、私はこの国に来たばかりで、今いるこの場所すらわかりません。しかし、貴女方に案内していただければなんとか街へはたどり着けるでしょう。そこで、お願いです。見たところ貴女方は旅の途中。次の街までで良いので一緒に一緒させてはいただけませんか？」

「…どうしますか？桃香様？」

「うん、困っている人は見捨てられないよ…」

「なのだっ！！」

「しかし、我々三人分の金銭だけでも最早ギリギリですよ…？」

金銭面を気にし出しましたか…。

まあつまり、金銭があれば良いということですかね…？

「あの、金銭ならば、私が持っているこの国に無い珍しい道具を幾つか好事家に売れば大金になるかと…」

「えっ? いいの?」

「勿論ですよっ お世話になるのですからそれくらいは」

「うーん、どうかな、愛紗ちゃん?」

「しかし、素性が判らぬものを連れていくのも…」

「その件ですが、もし私が不審であると思ったら、信用に値しない
と思った時は迷わず斬っていただいて構いません」

『…!?』

「覚悟の上です…」

「愛紗ちゃん…」

「そっ…ですね…」

「なのだっ!!」

???何事でしょうか、三人の目の色が変わりましたね？

「あの、御遣い様っ!! 私たちの、主人になってくださいっ!!」

「……はい？」

「貴女は初対面である私たちのことを信用するどころか、自分が斬られる覚悟までしていらっしやる。そんな御仁を信用出来ないほど私たちも未熟ではありません」

「お姉ちゃん、お願いしますなのだ」

三人共……。

「分かりました。私の力を貴女方にお貸し致しますよう」

「ホントですかっ!?! やったあーっ!?!」

「ありがとうなのだ、お姉ちゃんっ」

「あ、先ほどから気になっていたのですが、私、男です……」

『……………ええ————っ!!!?!?』

荒野に叫び声が鳴り響いた。

三國志ですか？いいえ、恋姫十無双です（後書き）

主人公は蜀 ですよ

でも、蜀以外の女の子も落としますよ（笑）

桃園の誓い

とある料亭にて…

「ハグハグ…ゴクツ…ぷはあ…、美味しいのだあ」

「こら、鈴々つー！御遣い様に代金を出してもらえるからといって、食べ過ぎだつー！」

「まあまあ愛紗ちゃん、鈴々ちゃんは育ち盛りなんだし…」

「桃香お姉ちゃんの言う通りなのだあつー！」

「すみません、御遣い様…」

「いえ、気になさらずに…。それより私の名をまだ言ってませんでしたね。私は梅沢直斗と言います」

「姓が梅、名が沢、字が直斗ですか？」

「いえ、私は字が無い国から来たので、姓が梅沢、名が直斗です」

「ほえ、変わった名前だね」

「では私たちも……。私の名前は姓が関、名が羽、字が雲長、真名は愛紗です」

「鈴々は張と飛と翼徳と鈴々なのだっ！！」

「私は姓が劉、名が備、字が玄德で、真名は桃香です」

「真名とはいったい…？」

ゲームの知識で一応知ってはいますが他の国から来たばかりで真名の意味を知っているのはおかしいので…。

「あ、そっかあ、御遣い様は真名も無い国から来たんですね？あのね真名っていうのは、その字の如く、その人の本質を示した名前で神聖な物なんだ。だからね、親しい人しか絶対に呼んじゃあいけないの」

「もしも心を許していない者がその名を呼んだりした場合は首を落とされても文句は言えないのです」

「それを私に教えるという事は…」

「信頼の証ですよ」

「お姉ちゃ…お兄ちゃんは鈴々達のご主人様なのだっ！！」

「ご主人様…ですか？」

「そうだね じゃあ改めまして、これからもよろしくお願いしますね、ご主人様っ」

「こちらこそよろしく、桃香、愛紗、鈴々」

「じゃあそろそろ出発しますか？」

「これから何処に行くのだ？」

「どうせならあゝ、ご主人様に決めてもらおう」

「そうですね、ではご主人様、どういたしますか？」

「どうでしょうか…？」

劉備、関羽、張飛と言えは…。はっ！そうですっ！！あれがあるではないですかっ！！

「桃園へ行きましょう」

「ふえ？なんで？」

「義姉妹の契りを結んでおきましょう。どうですか？」

「義姉妹かあ…」

「鈴々はそれでいいのだった！！後、お酒も買っていくのだ」

「ふむ…、では参りましょうか。確かもう少し街から離れた所に綺麗な花が咲き乱れる園があったはずですよ」

「では…、すみませーん！！お勘定を！！」

「はいはい只今あっ！ー！」

お勘定を済まして料亭をでる。

……ちなみに勘定は洒落にならないほど高かった。まあ1000円玉やボールペンなどを売って金にしたのであまり懐は痛まなかったが……。

「酒っ 酒っ 酒なのだあ〜」

「いら鈴々っ！ー！はしゃぎすぎだぞっ！ー！」

「むう……、愛紗は「々々るさいのだ……」

「誰のせいだ、誰のっ！ー！」

「あはは、愛紗ちゃんも楽しめば良いのに…。ね？ご主人様っ」

「ふふ…、そうですね、愛紗は真面目過ぎますね。もう少し肩の力を抜いても良いのではないですかね？」

鈴々ははしゃぎ、愛紗が怒り、桃香が笑う。
それが何故か凄く心地よいのです…。

「さて、着きましたね」

「わあ…」

三人共満開の花に見とれています。

その姿に私が見とれていたのは内緒の話です

「雅だねえ」

「美しいですね」

「酒ーっ」

「……約一名、ものの雅も判らぬ者もおりますが……」

「ふふ…、鈴々は花より団子ですね？」

「なのだっ
」

「では、始めましょうか」

「我ら四人っ！！」

「姓は違えども、姉妹の契りを結びしからは！！」

「心を同じくして助け合い、みんなで力無き人々を救うのだっ！！」

「同年、同月、同日に生まれることを得ずともっ！！」

「願わくば同年、同月、同日に死せんことを！！」

「……乾杯っ！！」

世に有名な桃園の誓いー。

それが目の前で繰り広げられている。

その事に感動をおぼえながら、酒を口へ運んだー。

義勇軍集結！

桃園で結盟した我ら四人は、今いる幽州を治めている公孫贄の本拠地へと向かい、街の中でしばらく情報収集を行った。

何故なら、公孫贄は今の私たちよりも遥かに立場が上である。何かしらの情報をもって行かないと足下を見られるだけ。

まずは公孫贄の目的と、それに対して私たちが提供できるものを探すことから始めた。

「というわけで、一通り情報を集めたところ、この辺りに巣くう盗賊の規模は、約五千人と云ったところですよ。一方の公孫贄軍は約三千人」

「いくら相手が雑軍だからといって、この差は大きいですね……」

「そう、そこで勝敗の鍵を握るのは隊長……つまり將軍の質であると私は考えました」

「なるほど……しかし、我らも兵を率いた経験は皆無なのですが……」

「でもね、愛紗ちゃんに鈴々ちゃんなら、兵隊さん達を上手に率いることが出来ると思うよ?」

「ええ、その点に関しては私もそう確信していますよ」

何故なら二人はアノ関羽と張飛なのですから…。

「しかし、例えそうであっても現状で経験もなく、兵隊もない我らでは、ただの腕自慢になってしまいます」

「うう…そつかあ…。じゃあどうしたら良いのかな?」

「簡単なのだ!! 兵隊が居ないからダメなら、兵隊を連れて行けば良いのだ!」

「鈴々、正解です。例え少数であっても、兵を率いて合流するといふ点が最も重要なのです」

「では、どうやって兵を集めましょうか?」

「それは簡単です。これを使って雇えば良いのです」

私が懐から出したのは、兵を1500人は雇えるであろう大金。

「ご、ご主人様凄おい…。お金、こんなに持ってたんだ…」

「いろいろと不要な荷物を好事家に売り捌いただけですが、まだこれでも2割程度ですよ？」

「凄いのだあ…」

皆は見ただこともないような大金に見とれている。

「さて、ではこれで兵を雇って来て貰いたいのですが…」

「はいはーいっ！！じゃあ私が雇って来てあげるー！」

「桃香には悪いですが、ここは愛紗にお願いします」

「御意、お任せください」

にっこりと微笑み、大金を受け取った愛紗が小走りに外へと出てい

きました。

それから数時間後ー！。

私たちの前にズラリと並ぶ人の行列。

「思った以上に人がいますね。愛紗、感謝しますよ」

「ご主人様のご期待に沿えて、光栄です」

私はがんばってきてくれた愛紗の頭を優しく撫でてやる。

「ふあっ！？ご、ご主人様あ…／／／」

「あーっ！！愛紗ちゃんだけずるーい！！私も私もー！！」

「鈴々もー！！」

「ふふ…、ダメですっ これはご褒美ですから。さて、ここに集まっている3000人を連れて公孫釐の元へ行きますよ？」

「ぶう…」

桃香が不機嫌になってしまいました。

「では公孫贇との交渉で頑張ったなら、桃香にもなでなでしてあげましようかね…？」

「まっかせーなさーい！」

凄く変わり身が早いですね…。
少し心配になってきました…。

「では、行きましょう」

街の勇敢な若者3000人を連れて城を訪ねると、門前にいた兵士が驚いていたのですが、とりあえずは桃香が公孫贇に取り次ぐように頼むと、玉座の間へと案内されました。

「桃香！ひっさしぶりだなー！」

「白蓮ちゃん、きゃー！久しぶりだねー」

「廬植先生のところを卒業して以来だから、もう三年ぶりかー。元氣そうで何よりだ」

「白蓮ちゃんこそ元氣そうだね それにいつの間にか太守様になっちゃって。すごいよー」

「いやあ、まだまだ。私はこの位置で止まってなんかいられないから。通過点みたいなもんだ」

「さっすが秀才の白蓮ちゃん。言うことがおつきいなー」

「武人として大望は持たないとな。……それより桃香の方はどうしてたんだ？全然連絡が取れなかったから心配してたんだぞ？」

「んとねえ、あちこちで色んな人を助けてた！」

「ふんふん。それで？」

「それでって？それだけだよ？」

「……………はぁー……………」

「ひゃうっ!?!?」

「ちょっと桃香! あんた、廬植先生から将来を嘱望されてたくらいなのに、そんなことばっかやってたのかっ!?!?」

「う、うん……」

「どうしてっ!?!? 桃香ぐらい能力があつたなら、都尉ぐらい余裕でなれたろうに!」

「そうかもしれないけど……でもね、白蓮ちゃん。私、どこかの県に所属して、その周辺の人たちしか助けることが出来ないっていうの、イヤだったの」

「だからって…、おまえ一人が頑張っても、そんなの高が知れてるだろうに……」

「そんなことないよ? 私にはすっごい仲間たちがいるんだもん」

「仲間?」

ふと公孫贛が此方側を見る。

「桃香が言っているのは、この三人のことか？」

「そうだよ。んとねえ、関雲長、張翼徳、それに菅輅ちゃんお墨付きの天の御遣い、梅沢直斗様っ」

「菅輅？菅輅って、あの占い師のか？」

「うんっ 流星と共に天の御遣いが五台山の麓にやってくるって占い、白蓮ちゃんは聞いたことない？」

「聞いたことはある…。が、なんでも最近内容が変わったと聞くが…？」

「えっ！？どんな内容なのっ！？」

「確か、『流星と共に二人の御遣いが現れる。一人は白く輝く衣を着て、知識を持った天の御遣い、もう一人は美しき黒の髪の毛を靡かせて、文武を兼ね備えた天の御遣い。天下を治める器の元に、御遣いは現れる』って占いだっと思ったと思うけど…」

「前よりもより具体的になっていますね…?」

「最初の方はよく分からないけど、後の方はご主人様のことだよね?」

「文武を兼ね備えたって…、占い通りなら軍を率いて貰いたいが…、そんな強そうには見えないけど…?」

「おやおや、白珪殿にはその御仁の力量が判りませぬか?」

痺れ毒を含んだような言葉と共に、水色の髪を靡かせた一人の美少女が姿を現しました。

「むう……なら、趙雲にはこの女性の力量が分かるとでも言うのか?」

「当然。武を志す者として、姿を見ただけでただ者ではないことくらいは分かるというもの」

「へえ〜……まあ星がそういうならば、確かに腕が立つんだろ?」

「ええ。その後の二人もだろっ？ 関羽殿」

「そういう貴女も腕が立つ……そう見たが？」

「うんうん！ 鈴々もそう見たのだ！」

「ふふ……、さて……それはどうでしょうな」

「謙遜を。趙子龍ともあるうものが、腕が立たない訳が無いでしょっ。」

わざと趙雲の字を言ってみました。

「……ほう？ 私の字をいつお知り？」

「あっ！ 確かに……、子龍という字を呼ばなかったのに……？」

「まあ、これも天の知識ですよ。私の世界では趙雲子龍は英雄としてかなりの有名人ですから」

「ふむ…。まあ悪い気はしないな…」

英雄と言われてご機嫌なようですね。

「これはこれは…、ふむ、器量もなかなかのようですし、主君にふさわしい方かもしれませぬな？」

「それは嬉しいものですね…しかし、貴女のような美しい方が仲間だと、惚れてしまうかもしれませんよ」

「う、ご主人様っ……!!」

「おや？貴女にはそっちの気がおありで？」

「ふむ…。私は男ですよ？」

「……………は？」

「こんななりですが、男です」

「こ、これはたまげた…。これほど美しい方が男性とは…」

「桃香…。ほ、本当なのか？」

「そうだよ。ご主人様、綺麗だよねえ…」

「綺麗なのだあ…」

「コホン、私の話も良いですが、そろそろ本題を。私たちの参加を認めていただけますか？」

「あ、ああ…。まあ桃香の力はよく知っているし、他の三人も星に認められるほどの力が有るみたいだしな。私に力を貸してくれるか？」

「うん！私、たっくさん頑張っちゃうもんね」

「お三方もよろしく頼むぞ」

「ああ。我が力、とくとご覧しろ」

「鈴々に任せるのだ！」

こうしてー

公孫贇と共に戦うことになった私たちは、陣割が決まるまで、しばしの休息を過ごした。

侍女に呼ばれ、城門に向かった私たちの目の前に、武装した大軍が整列をしていた。

「これは壮観ですね…」

私たちが集めてきた義勇軍3000人に、公孫贇の兵が1000人程混ざり、全員がきちんと武装をして並んでいる姿に少し感嘆が漏れます。

「にしても、凄い兵の数ですね…」

「まあ私の軍の半分くらいも義勇兵なんだがな」

「それだけ、大陸の情勢が混沌とし、皆の心に危機感が出ていると
いうことでしょう」

「ふむ…。確かに最近、大陸各地で盗賊だ何だと匪賊共が跋扈して
いるからな」

「いったいこの国はどうなっていくのだ…」

「民のため、庶人のため…。間違った方向には行かせやしないさ。
…この私かな」

趙雲の瞳には真剣な光が宿っていた。

その光には、単に自信という言葉以上の強い煌めきがあった。

「……趙雲殿」

「ん？どうされた？関羽殿」

「貴女の志に深く感銘を受けた。……我が盟友になって戴けないだろうか」

「鈴々も、おねーさんとお友達になりたいのだ！」

「ふっ…志を同じくする人間、考えることは一緒ということか」

「……??どついつことだ」

「関羽殿の心の中に、私と同じ炎を見たのだ。そして志を共にしたいと……そう思った」

穏やかな微笑みを浮かべ、趙雲は愛紗に手を差し出した。

「友として、共にこの乱世を治めよう」

「ああ！」

「治めるのだ！」

「あー！私も！私もだよ！」

「ふっ…。我が名は関羽。字は雲長。真名は愛紗だ」

「鈴々は鈴々！張飛と翼徳と鈴々なのだ！」

「劉備玄德、真名は桃香だよ！」

「我が名は趙雲。字は子龍。真名は星という。……今後とも宜しく頼む」

そこへ私と公孫贇が加わる。

「私の名は公孫贇。字は白珪。真名は白蓮だ」

「私は梅沢直斗。真名は無いので、親しみの証拠に直斗とでも呼んでください。…まあ桃香たちの様にご主人様と呼んでもらっても構いませんが」

「……いや、それは遠慮させて貰うよ」

白蓮が切り捨てて話が終わる。

これから乱世はどのように変化していくのだろうか……。

義勇軍集結！（後書き）

白蓮と星が出ました

お気に入り登録が100件を越え、より頑張っていきたいと思いま
す。

感想やアドバイスお待ちしております

初陣！（前書き）

戦闘描写って難しいですね…（ - - - ）

頑張って書きました。

ではどござf^_^ ;

初陣！

「ご主人様、我らは左翼の部隊を率いることになりました。新参者に左翼全部隊を任せるとは、なかなか豪毅ですな、白蓮殿も」

「それだけ期待されてるって思ってた良いのかな？」

「そうですね。……鈴々、頼みますよ？」

「任せろなのだっ！！」

ドンツと胸を叩いて自信満々な鈴々。

我らが話していると、白蓮が全軍に演説を始めます。

「諸君！いよいよ出陣の時が来た！今まで幾度となく退治しながら、いつも逃げ散っていた盗賊共！今日こそは殲滅してくれよう！公孫の勇者たちよ！今こそ功名の好機ぞ！各々存分に手柄をたてい！」

『うおおおおー！！！』

大地をも揺るがす鬨の声を満足気に聞いた公孫贇が、

「出陣だ！」

高々と剣を掲げ、出陣の号令を出しました。

意気揚々と城門から出発する兵士たちと共に、私たちも一隊を率いて移動を開始しました。

しばらく行軍していると、盗賊共が見えだします。

「さあ、いよいよ決戦だ！皆の者、剣を抜け！」

『おおーっ！！』

勢いよく抜刀した公孫贇軍と盗賊たちがぶつかり始めました。

『おおーっ！！』

やはり数が多くとも所詮は只の雑軍。
愛紗や鈴々、星が率いる我が軍には質で遠く及びません。

「今だっ！！矢を放て！！」

『ビュッ…っ！！…ビュッビュッビュッ…』

愛紗の号令で大量の矢が放たれる。

「ぐわっ…！！」

「ぎゃあっ！！」

矢は敵軍の中心部に当たり、敵は混乱に陥る。

「よし、敵は総崩れだ！今こそ我らの力を見せつけるとき！」

「みんな、鈴々に続くのだ！」

『うおおおー！！！！っ！！！！』

周囲の兵士を勇ましく励ました二人が、戦線を崩壊させた盗賊団に敢然と立ち向かっていきました。

それに呼応するかのように、中央と右翼の軍も突撃を開始します。

こうしてー。

愛紗や鈴々、そして星たちの活躍もあって、公孫贖軍は完全なる勝利を手に入れました。

意気揚々と引き上げる兵士たちの中、私たちは白蓮たちと合流します。

「完全なる勝利、だったな。いやあ、良かった良かった。」

「やったね、白蓮ちゃん よっ、さすがっ!!」

「いやいや。桃香たちの力があってこそだよ。ありがとう」

「えへへ、そう言ってもらえると嬉しいな」

お気楽な様子で会話をしている二人を尻目に、

「しかし……白珪殿。最近、何やらおかしな雰囲気を感じないか？」

星が空を睨み付けながら問いかけます。

「おかしな雰囲気……?どうだろう。私は特に感じたことは無いけど」

「白蓮ちゃん、のんびりしてるねえ」

「むむっ……。確かにのんびりしているかもしれないが、桃香に言われるのは無性に腹立つ……」

「あ、ひどおい!私は白蓮ちゃんみたいに、のんびりなんかしてな

いもんねー！」

「ぶぶ… そう思ってるのはお姉ちゃんだけなのだ」

「ぶー。鈴々ちゃんまでそんなこと言うの？みんなひどーい！」

ブンスカと頬を膨らませて抗議する桃香が、鈴々の混ぜっ返しを受けながら、キヤイキヤイと騒ぎます。

と、その様子を微笑みと共に見つめていた愛紗が、

「しかし、星の言うことも尤も。最近、特に匪賊共の動きが活発化しているように感じます」

至極マジメな表情でポツリと呟きました。

「やはり、そう思うか…」

「ああ。ここしばらく、匪賊は増加の一方だ。その者共が村を襲い、人を殺し、財貨を奪つ。……地方ではすでに飢饉の兆候すら出ている」

「収穫した作物を奪われたりするんだから、当然飢饉も起こっちゃうのだ……」

「うむ。それと共に、国境周辺で五胡の影もちらついているという。……何かが起ころうとしている。そう思えるな」

「大きな動乱に繋がるかもしれない、か……」

「おそらくは、そうなるでしょうね……」

「ご主人様もそうお考えで？」

「ええ。匪賊などだけでなく、いつかは暴政に対しての爆発が起きるでしょう」

少なくとも、原作や正史では、そうなっているのですから。

「その動乱の中で、私たちがどのように立っていくのか。……それが問題になるでしょうね」

「そうですね」

小さく呟きながら、愛紗は遠い未来を見据えるように天空を見上げます。

視界一杯に広がる蒼い蒼い空。

しかし私たちには……大陸を覆う暗雲が、初陣を飾った我らの前に不気味にその身を横たえているー！。

そんな気がしてなりませんでした……。

初陣！（後書き）

お気に入り登録やアクセス数が順調に増え続けておりますっ
嬉しいかぎりですね（Ｔ　Ｔ）

感想、アドバイスお待ちしております

ちびっ！軍師あらわる！？（前書き）

はい、あの二人の登場です

ちびっこ軍師あらわる！？

大勝利で初陣を飾った私たちは、城の一角に部屋を与えられて、公孫贄の下に留まっていました。

その間も盗賊討伐の日々は続き、最近では我らの武名を知らぬ者は殆どいない……というまでの活躍をしていました。

もともと私はあまり戦闘には出ず、軍の指揮に専念することが多かったのですが。

そんな日常を過ごす私たちと違い、最近の大陸の様子は益々おかしなものになってきました。

匪賊の横行。大飢饉。

そして極めつけは疫病の猛威。

暴力に晒され、憤ましく生きようとしても、その日食べるものにも困り、拳句の果てに病に倒れる……となれば、人々の心が安定するはずもなく。

暴乱は暴乱を呼び、暴力は暴力を招き――大陸全土は混沌とした空気に満たされていました……。

その空気は、日々、重く重く圧縮され、人々の心に沈殿していきま
す……。

一日に起こるトラブルの数も増加し、刃傷沙汰も増え……街を警邏
する兵たちにイライラが積もっていくのが肌で分かります。

ピリピリとした雰囲気か村を覆い、街を覆い、城を覆い尽くし……
その範囲が大陸全土へと広がっていくのも時間の問題だと思われた
ある日。

地方太守の暴政に耐えかねた民が、民間宗教の指導者に率いられて
武装し、官庁を襲うという事件が起こりました。

大陸の……それも地方で起きた事件。
官軍に鎮圧され、事はそれで終わるかに見えたが――現実はその
れほど簡単にはいきませんでした。

鎮圧に向かった官軍が反撃により全滅。
それをきっかけに、暴徒たちは周辺の街へと侵攻を開始。

あっという間に大陸の三分の一が暴徒たちに乗っ取られ、世は動乱
の時代を迎える。

漢王朝は討伐軍の全滅の報に接して狼狽し、驚愕し……そして最期に恐慌に陥ったのです。

官軍は頼りにならずと判断し、地方軍閥に討伐を命じたのが昨日の話。

「すみません、遅くなりました」

侍女に連れられてやってきた玉座の間には、白蓮の他に星や愛紗、桃香に鈴々……と、仲間たちが一同に揃っていました。

「休んでいるところをすまん。呼び出してしまって」

「いえ、それより話というのは…?」

「直斗も、この城に朝廷よりの使者が来たのは知っているよな?」

「ええ。確か黄巾党を討伐しろという命令を伝えに来たのでしたね?」

「そつだ。私はすでに参戦することは決めているのだが……」

「白蓮ちゃんがね、これは私たちにとって好機なんじゃないかって」

「好機……ですか。なるほど……」

独立のための好機というわけですか。

しかし、それだけでは無いでしょう。

恐らく白蓮は私たちの扱いに迷い始めているのでしょう。

客将として既に星が居る。更に最近、名を上げてきた私たちが幕下に居るとするのは、太守としては良くないこと。

一つのグループの中で、リーダーより有能で尚且つ名声を得ている人物は必要ないですから。

ならば功名をあげるチャンスがあるときに手柄を立てさせ独立させるのが最も効率的。

もっとも、人の良い白蓮はそこまで意地悪く考えてはいないでしょうが。

しかし私たちもいつまでも白蓮に迷惑をかけるわけにもいきません。

「そうですね。私たちもそろそろ自分たちの力で頑張りましょう」

「でも、鈴々たちだけで大丈夫かなあ？」

「それは分かりませんが、いつまでも白蓮に迷惑はかけられませんから」

「そうですね。幸いにも我らには手勢も3000人程いますし」

「ま、多少の装備くらいなら出させて貰うよ」

「ありがとう、白蓮ちゃん」

「では準備を始めましょうか。鈴々、それと星。手伝いを頼んでよろしいか？」

「勿論ですぞ」

「任せるのだ！」

私たち三人は、武具を用意しに歩き出しました。

「星、貴女は白蓮の家臣になるつもりは無いのですか？」

ふとした拍子に聞いてみました。

「ええ。好意によって力を貸しているだけに過ぎませぬ」

「なら、星はいつかどこか行っちゃうのだ？」

「さて……今はまだ私にも分からんよ。……この乱世を白珪殿と共に戦い抜くのか。それとも徳高き主を探すのか」

「そうですね……。ならもしも星が白蓮の下を去るときが来たら、私たちのところへ来てはくれませんか？」

「ふむ……それもまた、一つの道なのやもしれない。だが自分の道は自分で見つけたいと。私はそうおもつのですよ」

「そうですね…。残念です」

「いや、正直に言うと貴女の下へ行く可能性はかなり高い。貴女は大きな器の持ち主であり、武にも長けている。そして何より、私は貴女を気に入っている」

「では、期待して待つとしましょうか」

「うむ。私も期待しておこう」

嬉しい気分になりつつも、武具の確認を終わらせた私たち。その間に桃香たちはもう一度義勇兵を募る。

こうして作業をしているうちに、いつしか一週間が経過し――。

「とうとう出発ですね」

全ての準備を整え終えた私たちは、集まった義勇兵を率いて出陣の時を迎えていました。

「たくさん集まってくれたねー」

そう。ここには今、最初からいる3000人に追加して、5000人も的人数が集まり、総計約8000人という大軍になりました。

その分白蓮の顔はひきつっていましたが。

「しかし、これからどうしましょうか」

「こづきんとーを探し出して、片っ端からやつつけるのだ！」

「勇ましいのは関心ですが、そのやり方ではすぐに兵糧が尽きて自滅ですよ？」

「むう……ならどつすりゃ良いのだー？お兄ちゃんは何か考えあるのかー？」

「ふむ……、そう言われると少し迷いますが……」

「しゅ、しゅみましえん！あう、噛んじやった……」

どこからともなく声がありました。

「……………?」

桃香と愛紗はキョロキョロと周囲を見渡しています。

声の主には私と鈴々しか気づいていません。

「はわわ、こっちはです。こっちはですよ〜!」

「えーっと……………声は聞こえど姿は見えず……………」

「ふむ? 一体誰が?」

「みんなひどいことを言うのだなー。チビをバカにするのは良くないのだ」

「そうですよ、二人とも。ほら、ここに可愛らしい二人組がいるではないですか」

「こゝ、こんにちゅわー!」

「ち、ちは……………」

小さな二人の少女が緊張した面持ちで立ち尽くしています。

「こんにちは。貴女方の名前は？」

優しく聞いてみました。

「わ、私はしよ、諸葛孔明れしゅ！」

「私はあの、その、えと、んと、ほ、ほーとうでしゅ！」

「……二人とも、カミカミすぎなのだ」

「んーと……諸葛孔明ちゃんに、ほ、ほ……」

「鳳統でしゅ！あう……」

「諸葛亮に鳳統、か。……あなたたちのような少女が、どうしてこんなところにな？」

「あ、あのですね、私たち荊州にある水鏡塾っていう、水鏡先生と

「いう方が開いている私塾で学んでいたんですけど、でも今の大陸を包み込んでいる危機的な状況を見るに見かねて、それで、えと……」

「力の無い人たちが悲しむのが許せなくて、その人たちを守るために私たちが学んだことを活かすべきだって考えて、でも自分たちだけの力じゃ何も出来ないから、誰かに協力してもらわなくちゃいけない」

「それでそれで、誰に協力してもらえば良いんだろうって考えたときに、天の御遣いが義勇兵を募集してるって噂を聞いたんです！」

「それで色々と話を聞くうちに、天の御遣いが考えていらっしやることが私たちの考えと同じだって分かって、協力してもらおうならこの人だって思ってる」

「だからあの……わ、私たちを戦列の端にお加えください！」

「お願いします！」

真剣な眼差しで私たちを見つめる二人の少女。

「んー。ご主人様、どうしよっか？」

「戦列の端に加えるには、歳が若すぎるような気がします……」

「しかし、それなら鈴々も同じですよ？」

「それはそうですが、鈴々の武は一騎当千。歳は若くとも充分に戦力になります。しかし二人は見たところ指は細く、体格は華奢……。戦場に立つには可憐すぎるかと……」

「愛紗、二人の言葉をよく思い出してください？二人は私塾で学んできたのですよ？つまりは武将でなく知将なんです」

「さ、さすが御遣い様でしゅー！あの少ない情報から私たちのことをしっかりと把握していらっしやいませしゅー！」

「す、凄いでしゅー！」

「なるほどお……。確かに軍には軍師が必要だよね？」

「鈴々は戦つのは得意だけど、考えるのは苦手なのだ……」

「そういうことですよ。では……、私の名は梅沢直斗と言います。――」

応天の御遣いという身分になります。二人とも、これからよろしく
願いますね」

「わ、私はえと、姓は諸葛！名は亮！字は孔明で真名は朱里です！
朱里って呼んでください！」

「んと、姓は鳳で名は統で字は士元で真名は雛里って言います！よ
ろしく願います！」

「朱里に雛里ですね？頼りにしてますよ」

「はいっ！..！」

「は、はいっ！..！朱里ちゃん朱里ちゃん、えへへ、真名で呼ばれ
たよお.....」

「良かったね、雛里ちゃん」

「うんっ えへへ.....」

ほのぼのとした会話をする二人の少女に、

「早速で悪いですが、二人の意見を聞いてもよろしいですか？私たちはこれからどうするべきなのかを」

「新参者の私たちが、意見を言っても良いのでしょうか…？」

「勿論ですよ。二人とも、これからは仲間なのですから」

「…は、はいっ…！」

弾むように頷いた朱里が、

「私たちの勢力は、他の黄巾党討伐に乗り出している諸侯に比べると、極小でしかありません。今は黄巾党の中でも小さな部隊を相手に勝利を掴み重ね、名を高めることが重要だと思います」

「敵を選べと？」

「あつ……そういっことですけど……。えと」

言葉を繋ぐとして戸惑う朱里。

………そういえば自己紹介がまだでしたね。

「この子は関羽。字は雲長と言います」

「私はね、劉備玄德！真名は桃香だよ。これからは桃香って呼んでね。」

「鈴々は張飛って言って、鈴々は真名なのだ。呼びたければ呼んでも良いぞー」

「むう。皆が真名を許すのならば、私も許さねばならぬな。ご主人様が紹介してくださったように、我が名は関羽。真名は愛紗と言つ。宜しく頼む」

「は、はい！宜しく願ひします！」

「あう…！」

二人はペコリと頭を下げます。

「さて、自己紹介が済んだところで、私も朱里の言つ通りにすべきであると思います」

「ご主人様もですか？しかし些か卑怯では……」

「確かに誇りも大事です。しかし今の私たちはどれだけ足掻いても極小であることは変わりません。ならば朱里の言う通り、名を高めて義勇兵を募るしかありません。幸いにも兵糧を買う資金ならまだまだ余裕がありますから」

「分かりました。私に否はありません」

「桃香と鈴々はどうですか？」

「私もなーし。ご主人様の方針に従うよ」

「鈴々は別に何でも良いのだ」

「ふふ、鈴々らしいですね…では、方針も決まりましたし、そろそろ出発しましょう！」

こっぴどー。

新たな仲間が加わった私たちは、白蓮と星に別れを告げ、意気揚々と出発しました。

ちびっ！軍師あらわる！？（後書き）

朱里と雛里のカミカミ…

可愛いですよ〜）（

さて、次回あたりに霸王様が出ますかね？

ではまた次回！

さよなら）；；（；／

霸王と二人の天の御遣い（前書き）

今回はかなり長めです。

どろぞろ f ^ | ^ ;

霸王と二人の天の御遣い

果てしない荒野を進軍しながら、各方面に細作を放ち黄巾党の動向を探ります。

「申しあげます！」

と、前方へ放っていた一人の細作が私たちの前に跪きます。

「ここより前方五里のところに、黄巾党とおぼしき集団が陣を備えております！その数、約一万五千！」

「一万五千ですか…少し多いですね」

こちらの兵数は約8000。

兵力の差は大きく、苦戦は必至でしょう…。

かといって、ここで進路を変更すれば、黄巾党討伐という大義名目を掲げたことで集まってくださった義勇兵たちは私たちを見限ることになるでしょう。

さて、どうしてもでしょうか…。

伝令の兵士が報告してくる敵軍の状況を聞きながら、頭の中でどう

戦えば良いのかをシミュレートしているよ、

「あ、あの……」

朱里の背中に隠れるようにしていた雛里が、緊張した声と共に、躊躇いがちに私の袖をクイクイと引っ張ってきました。

「どうしましたか？」

「だ、だいじょうぶです。きっと勝てますから……」

「何か策があるのですね？」

と、私が問うと、

「はい。本来ならば、敵より多く兵士を用意するというのが用兵の正道ですけど……、でもそれが無理な以上は戦力の差は私たちの策で覆すしかありませんから」

雛里に代わり朱里が話を続けます。

「朱里たちはどんなべんきょーしてたのだ？」

「えと、孫子、呉子、六韜、三略、司馬法……それに九章算術、呂氏春秋、山海經……あとはいくつかの経済書と民政書を勉強しました……」

「うわぁ……それ、全部勉強して覚えたの？」

桃香が驚いて聞きます。

「……………」

「すごい！愛紗ちゃん愛紗ちゃん。この子たちってば、もしかしてとってもすごい子かも！」

「そうなのですか？孫子の兵法書は私も読みましたが、その他の書籍に関しての知識はありませんね。いったいどのような書籍なんですか？」

愛紗の質問に、私が口を開きます。

「孫子、呉子、六韜、三略、司馬法に関しては全てが兵法書。残り

は算術、農政、地理書……経済学などの、民を治めるための書籍ですよ」

「ご主人様もお読みになられたことがあるのですか？」

朱里が関心したような表情で見つめてきます。

……かわゆいですね……

「いえ、あくまでも知識があるだけですよ」

「ほえー。すごいのだー！朱里たちは完璧超人なのだなー」

「そ、そんなことないですよ、えへへ……」

皆に絶賛されて嬉しかったのでしよう。

慌てたように謙遜しつつも、頬を緩ませて微笑みを漏らしました。

「それでは二人の策を聞かせてくれますか？」

「はい！えつとですね、伝令さんからの報告を聞くと敵軍は五里先に陣を構えているとのことですけど、ここより五里先というのは、兵法で言う衢地となっています」

「くちー？なんなのだ、それ？」

「衢地とは、各方面に伸びた道が収束する場所のことを言っんです」

「……なるほど、そういうことですか」

衢地のくだりで私は二人の策を理解しました。

「ご主人様？朱里ちゃんたちの策が分かったの？」

「ええ。まあ一応確認の為に続きを聞かせてもらいますが」

「はわわ……。ここまでで私たちの策が分かっちゃうなんて……」

「あわわ……。ご主人様、凄いでしゅ……！」

「いえ、二人が衢地ということを行わなければ分からなかった策ですよ」

「むう…、三人だけ分かってずるいのだ！鈴々たちにも教えるのだあ！」

「は、はい！敵は私たちよりも多くの兵を持つとはいえ、雑兵でしかありません。またその雑兵が守っている地は黄巾党全軍に影響を及ぼすであろう重要な地」

「そこを破れば、私たちの名は否応なく高まります。だからこそ、これは千載一遇の好機」

「更に言えば、私たちの兵は敵よりかなり少ない。そんな部隊が前に現れたとしても敵は恐れられないでしょう。……そこが付け目なんです」

「なるほど。敵を油断させ、策を持って破る。……そう言いたいのだな？」

「は、はひっ！」

「……そんなに緊張しないで欲しいのだが」

「あわわ……ごめんなさいでしゅ……」

「よしよし。愛紗は見た目と違って凄く優しい子ですからね。怖がらなくてもいいですよ」

「……ほう。ご主人様は私の見た目は怖いと言いたいのですね？」

「いいえ？ただ、どちらかといえば凛々しい方かと……」

「そんなのどっちでもいいのだ！とにかくさっさと方針を決めて戦うのだー！」

長話に飽きてしまったのでしようね。鈴々がウガーと痾癢を起こします。

「そつだよ、ご主人様。愛紗ちゃんとイチャイチャするのは後にしてね」

「と、桃香様っ！」

「分かりましたよ。では後でゆっくりとイチャイチャしましょうか。ね、愛紗（ニコッ）」

「ふえっ！？ご、ご主人様っ！？／＼／」

あたふたと表情を変える愛紗を横目で見つつ、軽く吹き出そうになるのをこらえます。

「では朱里、雛里。そろそろ策を」

「はい。まずは敵を陣地から引つ張り出すことです」

「その後野戦に持ち込みますが、決して平地では対峙しないことです」

「近くに谷などはありますか？」

「は、はい！ここより北東へ二里ほど行ったところに、川が干上がってできた谷があります」

「ええっ？でも地図にはそんなの載ってないよ？」

「その地図、市販のものですか？」

「う、うん。お店に売ってたヤツだけど……」

「なら、正確な地図では無いですね」

「えーっ！ そうなのカー？」

「……じゃあこの地図って偽物？」

「ううん、真正正銘、本物ですよ。ただ、市販の地図には、旅人や隊商の人たちがよく使う道とか山とかしか書いてないってだけです」

「それだけ書いてあれば、地図としての役割は果たしますからね」

「はい。正確な地図は、漢王朝や官軍しか持ってないんです。地図というのは戦力戦術を決定する上で一番重要な要素となります。地理に詳しくないと作戦は立てられませんから……」

「最近、力をつけてきた地方の諸侯も、独自の力で地図を作っているみたいですけど、多分、公孫贇さんはそこまで気が回っていないかっただのかも……」

「うー……白蓮ちゃんって時々、そういう大ポカをやらかすんだも

んなあ……………」

「お姉ちゃんが言うんなのだ」

「うぐう……………それもそうだねえ……………」

「……………幸いですね、私たちは水鏡先生のツテで正確な地図を見るこ
とが出来ました。だからおおよその地理は覚えていきますよ」

「ま、まさか大陸全土の地理を覚えているのですか？」

「……………（コクッ）」

「す、すごいのだあ……………」

「えへへ、それほどでも……………」

テレテレと顔を赤くしながら、恥ずかしそうに身体をよじる二人に、

「では誘い出しはどうしましょつか？」

作戦の確認をとります。

「簡単です。敵が構築する陣の前に全軍で姿を現して……あとは逃げるだけです」

「敵に追尾させるといふことが……」

「はい！」

「では、私と愛紗が前衛を率いて状況に応じて反転、その後狭間を目指します。鈴々は後衛」

「えーっ！鈴々は先陣を切りたいのだ！」

「今回は我慢してくださいね？次は絶対に鈴々を先陣にしますから」

「ホントー？約束だよー？」

「ええ、勿論ですよ。で、鈴々の補佐を朱里にお願いします」

「了解です」

「ご主人様！。私はどうするのー？」

「桃香は当然本陣です。補佐は雛里。宜しく頼みますよ？」

「はいっ」

「では、出陣です！」

『応っ！！』

荒野を吹き抜ける風に旗をなびかせ、威風堂々とした足取りで、進軍していきます。

「前方、黄巾党陣地に動きあり！」

進軍すると同時に前方へ放っていた斥候が次々と状況報告に戻ってきます。

「了解です！愛紗！鈴々！」

「御意！全軍戦闘態勢を取れ！作戦は先ほど通達した通りだ！」

「まずは敵の初撃をいなしてから、隙を見て転進！この場から後退するのだ！」

「ここより二里ほど先に峡間がある！そこへ退くまでは極力戦いを避けて移動する！各員、我らの指示を聞き逃すなよ！」

『応っ！！』

「皆、がんばるっね！」

『おおおー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』

「敵陣開門！来ます！」

「皆さん、行きますよ!」

「御意!勇敢なる戦士たちよ!我に続けえええーっ!」

『おおおーっ!』

愛紗の雄叫びと共に咆哮した兵士たちが、地響きをあげて敵陣へと突撃していきます。

そんな我らの動きに合わせてるように、前方で天高く土煙が舞いました。

やがて……両軍が激突しました。

「死ね!死ね!死ね!死ねーっ!」

「うおおおっ!死ねこの野郎!」

戦場の各所で巻き起こる、激しい罵りあい。

「ふっ！てやあっ！！……我は天の御遣いなり！！さあ、倒せるものなら倒してみよっ！！」

大太刀『贄殿遮那』にえとのしやなを振るいながら私は叫ぶ。

「な、なんだコイツはっ！？めちやくちや強いぞっ！！？」

「ば、バケモノっ……！！」

「コイツ一人に既に五百人は斬られてるぞっ……！！」

私は敵陣前衛のど真ん中へと突っ込み、一人、また一人……と切り裂いてゆく。

「ご主人様っ！！一人で突撃されては困りますっ！！無理をなさらないでください……！！」

「ふふ……すみません愛紗。しかし、こうした方が早く敵本陣が出てくるかと思ひまして」

「全く……。ご主人様の背中は私が護ります！！無理だけはなさらずに！！」

「クスッ 分かりました。では背中はお任せしますね！」

と、会話しているうちにも私たち二人の周りの敵はどんどんと居なくなります。

「……そろそろ敵本陣が出てきましたね……。愛紗！退きますよ！」

「御意！皆、峡間まで駆け足っ！！急げ！」

『応っ！！』

期を見て敏に。

戦場ではそれが命取りにもなりますから。

I s i d e o u t

「華琳様。西方に砂塵を確認しました。……恐らく黄巾党とどこかの軍が戦っているのだと思われます」

「そう。この辺りの敵に目を付けたとなると、その部隊は官軍ではなさそうね」

「恐らくは。……主戦場より離れた地であるのに、戦略上、重要な拠点となりうるこの場所に目をつけるなど、愚昧な官軍に出来るはずがありません」

「諸侯の中にも、なかなか見所のある人物がいるということでしょうな」

「ふむ……。一度顔を見てみたいわね」

「向かいますか?」

「そうね。だけどまずは目の前のことを終わらせましょう。……春蘭」

「はっ!」

「秋蘭」

「は……」

「羨のなっていないケダモノに、恐怖というものを教えてあげなさい」

『御意！』

「ケダモノって……華琳も嫌な例えをするもんだな……」

「何言ってるのよ、この全身精液男！アンタこそケダモノの中のケダモノじゃない！」

「はいはい……」

「桂花、……それに一刀。今はそれくらいにしておきなさい」

「……は」

「分かったよ華琳……」

I s i d e o u t i

「桃香！皆！」

「お兄ちゃん！」

「ご主人様！お疲れさま 無事でよかった…」

「お姉ちゃんは心配しすぎなのだ〜！お兄ちゃんは鈴々たちよりも強いのだ！」

「まあそうなんだけどね…」

「では、反撃に移りますよ！」

「待ってましたなのだーっ！！そろそろ我慢の限界が来てたところなのだ。お兄ちゃん、思いつきりやっちゃって良いよねー？」

「ええ！存分にやってしまってください！」

「よっしゃー！なら鈴々、ちょっとだけ本気出しちゃうもんねー！
愛紗ー！お兄ちゃん！背中はお願いなのだ！」

「こちらこそ背中はお任せしますよ？」

「鈴々とご主人様の背中が私が守る。……私の背中も頼むぞ？」

「当然 じゃあ行くよーみんなー！」

『応っ！！』

「突撃、粉碎、勝利なのだー！」

私たちは、敵に向かって反撃を開始しました。

「さて…と、こちらで私のスキルを使いましょうか」

邪神ちゃんによれば、魔法は使用不可能とのこと。
つまりはそれ以外なら…！

【過負荷：凍る火柱】

アイスファイア

『ビキビキビキ……!!』
『ボオツ……!!』

身体の一部が氷を纏う。

私が狙った場所からは巨大な氷や炎が溢れ、敵を呑み込んでいく…。

「な、なんだあつ……!!身体が……凍っていく…っ!?!」

「ぐわぁ…!あちい、あちいよぉ…!」

「ひいっ!?!た、助けてくれえーっ!?!」

突然のことに驚いた黄巾党たちは、あわてふためき逃げ出すものが続出する。

「……はっ!い、今です!今なら敵は浮き足だってます!ご主人様、今こそ総攻撃の号令を!」

呆気にとられていた朱里が我に返り、指示をする。

「皆の者！これが天の御遣いの裁きの力ぞ！！さあ、天は皆に味方している！！今こそ総攻撃をかけよ！！」

『お、…おおおーーーーーっ！！！！』

一瞬は呆けていた兵士たちも、天が味方していると聞き、一気に士気が高まり総攻撃をかける。

あっという間に黄巾党を壊滅に追い込み、勝利を確定させる。

「我らの勝利だっ！！」

『おおおーーーーーっ！！！！』

愛紗の雄叫びに呼応し、皆が咆哮をあげる。

黄巾党を完全に追い払い、私たちは放置された陣地に侵入しました。

「敗残兵が潜んでいるかもしれん。各員、陣地内をくまなく調査しろ！」

「見つけた物資には手を付けず、すぐに私たちに報告してくださいね」

『応っ！！』

愛紗たちの命令を受け、兵士たちは陣地の奥へ散っていきました。

「ふう………一応一段落ですかね？」

「みんな、お疲れさま」

「そういえばご主人様、あの力は何だったのです？」

「んー……。禁則事項です………といたいたところですが、それでは納得してくれそうにありませんので……、仙術の類いだと言っておきましようか」

「仙術ー？お兄ちゃん、仙術つかえるのかー？すごいのだーっ！」

「天に住む人々は皆、仙術をつかえるのですか？」

「いえ、はつきりいって、私以外の人間は使えないでしょうね？」

「ご主人様だけなんだあ…。凄いなー」

「はわわ…。知謀に長け、武も秀でて、更には仙術まで使いこなすとは、ご主人様は凄すぎですう…。」

「でしゅ…。」

「そうですか？私にとっては皆も凄いと思いますよ？」

「えへへ…。」

「鈴々も愛紗も、桃香お姉ちゃんも朱里も雛里も、お兄ちゃんもみんなすごいのだ！」

話しているうちに微笑みが溢れ、ゆったりしたムードになっていた。しかしそこへ、

「申しあげます！曹操と名乗る者が、我が軍の指揮官に取り次ぐよ

う申し出てきました！」

『曹操！？』

「曹操といえば…、陳留の刺子の、曹操さんですか？」

「……通すように伝えてください」

「ご主人様、お会いになられるのですか？」

「はい。恐らく曹操と会っておくことは、私たちにとっては悪いことでは無いですから。官軍の中でも有能な曹操なわけですから、それなりに有益な情報を持っているかもしれないですね」

「なかなかの推測ぶりね？」

私が意見を言った直後に声がありました。

「おや、今呼びに行かせたばかりですが？」

「他者の決定を待つてから動くだけの人間が、この乱世の中を生き延びられると思っっているのかしら？」

「なるほど。流石は英傑の曹猛徳ですね。我らが貴女を通すことが分かっていたのですね？」

「寡兵なれど、戦場を俯瞰して戦略的に動ける部隊ならば、大軍を率いて現れた不確定要素を放置しておける訳は無い。……ただそれが分かっていただけよ」

たいしたことではないと言いたげに答えた少女が、

「改めて名乗りましょう。我が名は曹操。官軍に請われ、黄巾党を征伐するために軍を率いて転戦している人間よ」

淡々とした口調で自己紹介を済ませました。

「こ、こんにちは。私は劉備って言います」

「劉備。……良い名ね。貴女がこの軍を率いていたの？」

「それはその……私が率いていたのじゃなくて、私たちのご主人様が……」

「ご主人様あ？」

「はい。えと……」

「……私です。梅沢直斗と申します。以後お見知りおきを」

「梅沢直斗……聞いたことのある名前ね」

「そりゃそうですよー。ご主人様は最近噂の天の御遣いなんだもん
」

「て、天の御遣いだって!？」

と、桃香の言葉に反応して、一人の青年が出てきました。

「……一刀。今はこちらが話をしているの。話の腰を折らないでち
ようだい」

「で、でも……」

「一刀！」

「……分かった」

曹操の一言で青年が引き下がる。

「部下が失礼したわね。彼はうちに居る天の御遣いの北郷一刀よ。ただ、占いのように光輝く衣は着けていても知識はかなり片寄っていたのだけれど……」

「彼がもう一人の天の御遣いでしたか……」

まあ知っていましたが……。

「……ところで貴女は占い通りの美しい黒髪をしているわね？武や知謀にも長けていると聞くのだけれど？」

曹操が私をじろじろと眺めてきます。

「そりゃあもう！ご主人様はスツゴク強くて頭も良くて、人望だつて厚いんですよ」

桃香は私が誉められて嬉しかったのでしょうか、ご機嫌で更に私を褒め称えます。

……なんだかくすぐつたい気分ですね…？

「ふうん…？……………貴女、私の物になりなさい？」

『えっ！？』

曹操の言葉に、桃香たちが反応します。

「……………理由は？」

「貴女の美貌が気に入ったからね。その上、将としても申し分ない能力を持っているのなら、欲しいに決まっているわ」

「貴女の理想を聞かせていただけますか？」

「ご主人様っ！？」

「勿論よ。私の理想は『霸道』と言えば分かるかしら？」

「ええ……。では、結論から言いますと、お断りさせていただきま
す……」

「き、貴様ア、華琳様のお誘いをーっ！！」

いきなり曹操の後ろから飛び出し斬りかかってくる女性の斬撃。し
かし、

「ふっ……」

『ギーンー！！』

「なあっ！？」

いきなり懐から取り出した贅殿遮那で軽く受け止めました。

「馬鹿な！！私の斬撃が、そんな細っこい刀などに……！く、てやあ
ーっ……！！」

と、更に振りかぶり斬りかかってくる女性に対し、私が横から勢いよく刀を振るおうとしたその時、

「春蘭っ！！！」

曹操が怒鳴り、女性の動きが止まりました。

それを確認してから私も懐に贄殿遮那をしまいます。

「……またしても部下が失礼したわ……。この子は夏侯惇。あちらの夏侯淵とは姉妹よ。で、こちらが荀イク」

「宜しく頼む……」

「アンタがもう一人の御遣い？ウチの全身精液男とは大違いね？」

「ふん、華琳様の命令だから止めてやったのだ。華琳様に感謝するんだな！」

「いえいえ、そちらに怪我が無くて何よりですよ？」

軽く殺気を交えて微笑みました。

「（ゾクツ……！？……この子……）……それより、何故断ったのか、聞かせて貰えるかしら？」

「簡単なことです。まず、貴女の理想よりもこの子たちの理想の方が私の理想に近いこと。そして何より、私はこの子たちのことを人間としても女性としても愛してますから」

『う、ご主人様あ……』

顔を赤らめ、うつとりとした表情を見せる桃香たち。
それを他所に、

「その子たちの理想？」

「ええ。『みんなが笑って暮らせる世界』素敵でしょう？」

「……そう。分かったわ。残念ね。貴女のような女の子を手に入れられないなんて。諦めないわよ？私は欲しいものは全て手に入れるの。それが例えどんな物だろうと。…勿論、人でも…よ」

「それは頑張ってください。ただ一つだけ訂正を。私は女の子では

なく、男ですよ？」

『……………は？』

曹操軍の全員が呆気に取られています。

「そ、そんなわけ無いじゃない！もしアンタが男だったらこの全身
精液男みたいな臭いがするに決まっているもの！！」

「……………桂花。貴女は表現が少し卑猥よ？」

「ですが華琳様…！」

「確かに私にも信じられんな…。北郷とはまるで違うからな……………」

「け、桂花だけじゃなくて秋蘭まで…！？」

「黙りなさい！この汚物！」

「ひでえ……………」

「あ、貴女…本当に男なの…!?!?」

「ええ。男だと分かれればもう欲しくなくなりましたかね? (ニコッ)
」

「っ!?!? / / / ……いいえ、これだけ美しいのだから。益々欲しく
なっただわ」

「いつそのこと、この汚物と替えて貰えないかしら… (ボソッ)…」

「今のが一番酷くないかつ!?!?」

「聞こえてたの? ……ちっ…」

「クスっ…」

なかなかのケンカっぷりに思わず微笑んでしまう。

『くっっ!?!? / / / 』

あら? 何故か私の方を見て皆顔を赤らめていますね…?

そんなにおかしな顔をしていたのでしょうか？

「……はっ！いい、幾ら微笑みが可愛らしいからといって、華琳様のお誘いを断ったことは、ゆ、ゆ、許さんからなっ！！！！／／／」

「はわぁ……ご主人様、可愛いでしゅ……／／／」

「むう……。私が姉者と華琳様以外に見とれるとは……／／／」

「ご、ご主人様……／／／」

「な、何よ……。本当に男なの……！？／／／」

上から夏候惇、朱里、夏候淵、愛紗、筍イクですよ。

「ご、コホン……！直斗、劉備、黄巾党討伐の間私たちと同行しなさい？」

「へ？」

「……いいですが、条件を少し」

「何かしら？」

「私たちの軍は、義勇兵です。幾ら人数が揃っても、装備はなまくらでしかありません」

「そういつことね。いいわ。桂花」

「はっ」

「劉備軍に、あまりの幾らかの武器を分けてやりなさい」

「御意！」

筈イクは曹操の指示を受け、走って行きました。

「ありがとうございます」

「これくらいはたいしたことではないわ。その代わり、きちちりと身体で返して貰うもの」

「ふふ…、そうしましょうか」

「こうしてー」。

曹操軍と共に行軍することが決まった私たちは、曹操軍から貰った武器などを整え、戦いに備えていくのであります……。

霸王と二人の天の御遣い（後書き）

はい。一刀と華琳様、春蘭秋蘭に桂花が出てきましたね

桂花がデレましたwww

けっこう好きなんですよね〜（笑）

次回か次々回あたりで黄巾党討伐が終了する……
と良いですね…。

ではまた次回！

劉備軍の実力！

曹操軍に所属する軍師、荀イクと、ウチの軍師の朱里と雛里により作戦が決められ、私たちはその作戦に従って、黄巾党の本隊が蟠踞するという冀州に向かって進軍しています。

「うう…いよいよ決戦かあ…緊張するね、ご主人様」

「そうですね…」

「それにしても、さすがと言うべきなのでしょうが。曹操の兵の動き、見事という他ありませんね」

「隊長の号令一つで動いたり、止まったり。すごいのだー！」

「ホントですね。良く訓練されていて…これだけ見ても、曹操さんが只者じゃないっていうのが良く分かります」

「向こうは生粋の軍人でしょうしね。でもこちらの兵も、士気では負けてませんよ」

「気概一つで戦場に身を投じ、我らに力を貸してくれているのです

からね」

「武器では負けるけど、勇気では負けないのだ！」

「鈴々ちゃんの言う通り！武器や軍装が見窄ぼらしくたって、目指す場所は一緒なんだから。胸を張って堂々としてれば良いの」

「ふっ、そうですね。では、我らは我らしく堂々と精一杯戦いましょうか！朱里、状況の説明をお願いします」

「はい！筈イクさんから提供された情報によると、今から対峙する相手は黄巾党の中心部隊だそうです。しかしながら兵数はそれほど多くありません」

「中心部隊なのに兵数が少ないのですか…？」

「今、あそこには、黄巾党の中心人物である張角、張宝、張梁の三人が居ないみたいなんです」

「ふむ…。主力部隊は出陣中で、本拠地の防衛兵力は多くない………ということか」

「そついつことです」

「でも、主力が居ないなら、そんなところを攻撃しても意味ないんじゃないのかなー？」

「ううん、そんなこと無いです。あの場所には黄巾党の兵糧の約半分が備蓄されていますから」

「なるほど…。兵力を削るのではなく、兵糧を削る…。いわゆる兵糧攻めですね？」

「いくら諸侯が討伐に乗り出しているとはいえ、数では黄巾党の方が上です。兵力のみを考えて戦争をしているのは、負けは自明の理つてやつです」

「極力兵力を減らさず、黄巾党に痛恨の一撃を与えられるには、補給を断つことが一番です。……それを知っていた曹操さんってやっぱり只者じゃありません」

「ふむ。……しかし曹操はどのようにして、主力の不在を偵知できたのでしょうか」

「黄巾党の中にも、誇り高い人間も居れば、下衆もいるというこ

ですよ」

「……買収、ですか」

「恐らくですが」

「お金で情報を漏らすなんてサイテーなのだ」

「まあそのサイテーな人のお陰でこうして隙を突くことが出来るわけですから」

「それはそうだね。……釈然としないけど」

と、我々が話していると、

「劉備軍は横隊を組み、号令と共に敵陣に向かって突撃せよ。我らは後方より弓による援護の後、すぐに後を追う！」

「……………」

『チャキ……………』

「ひっ…!?!」

誓殿遮那を伝令の首筋に当てて睨みます。

「ご、ご主人様!?!」

「無礼ですね…。我々は曹操殿の下に就いた訳でも無い。現状ではあくまでも対等な関係。なのに、その伝令でしかない貴方ごときが此方の主に対し、命令ですか…?曹操殿は部下の躰も出来ていないのですかね?」

「……し、失礼いたしました……」

「ふっ、分かれば良いのです。まあ曹操殿に伝えなさい。策は理解しました。そちらに従う……と」

「は、はっ!」

曹操の伝令は怯えながら走って行きました。

「ご、ご主人様！！私たちの兵力じゃ、敵さん相手に時間稼ぎにもならないよ！」

「時間稼ぎ…？そんなことしませんよ？」

『ええっ！？』

皆は驚き此方を見ます。

「先ほどの伝令の様子からも分かるように、曹操は私たちを下に見ています。が、実質今のところは兵力や将の質もあまり変わりません。差があるとすれば兵の練度と武器。それだけです」

「それでそれで？」

「私たちだけで、先に黄巾党の部隊を壊滅に追い込みます」

『ええーっ！！？』

「そんな、無茶だよご主人様っ！！」

「桃香様の言う通りです！！無謀すぎますよ」

「朱里と雛里はどう思いますか？」

「……策によつては可能かと」

「朱里ちゃん！？」

「敵軍との差は兵力のみ。それ以外は私たちの方が上ですので、可能です……」

「雛里もか！？」

「そういうことです。要は兵力の差を覆す策を用意すれば良いのです」

ニヤリと笑って言い放ちます。

「ご主人様、何か良い作戦があるの？」

「良いですか？敵軍は、数が多いため、攻撃の種類は多彩です。が、逆に数の多さは動きの遅さ。訓練していない雑兵がいくら集まって

も、鈍いだけの只的。そこへ大量に用意するのが、この矢と弓。そして長槍です。こちらの兵はあまりまともに調練できていなくとも、弓くらいは射てるようにしています。矢に火をくくりつけて飛ばしても良いですけど」

「矢と弓って、いつの間にこんな大量に用意したのですかっ!？」

「……あまりの金で旅の商人から買い占めました」

『（……あまりのお金で買える量じゃ無いよ……）』

「とにかく、大量に矢を放ち敵を攪乱。その後、長槍を持ち列を組み突撃……といったところですが……」

ちらつと朱里の方を見て確認を取ります。

「……黄巾党相手になら通用するでしょうね……。被害も少なく済みそうですし、今回はご主人様の策で行きましょう!」

朱里の言葉に雛里もコクツと頷きました。

「では、軍師殿のお墨付きも貰えましたし、すぐに準備に取り掛か

「…」

『応っ！！』

こうして私たちは、曹操軍の指示には逆らわず、されど自分たちだけで黄巾党を倒して名を高める策にでることにしました…。

「よし！弓兵の準備は整ったな？」

『応っ！！』

「じゃあ全員、鈴々の合図で一斉に矢を放つのだ！」

『応っ！！』

敵の様子を伺いつつ隙を見て鈴々が合図をした。

「今なのだ！一、二、三、だー！！」

『ビュッ！…ビュビュッ！…』

どこかのしゃくれたレスラーのような合図に合わせて、一斉に矢を放った。

「ぐわあーっ！！」

「な、なんだっ！？敵襲か！？」

「一体何処からあらわれやがった…！？ぐわあっ！！」

次々に黄巾党を貫いてゆく大量の弓矢。

「弓兵さんたち、矢を止めてください…！」

雜里の号令で一斉に戦場を飛び交っていた矢が止まりました。

「今なのだ！歩兵隊は鈴々に続くのだーっ！！」

『応ーっ！！』

「我らには天の御遣いがついていて！勇敢なる戦士たちよ！恐れずに敵を殲滅せよ！」

『応ーっ！！』

鈴々と愛紗の雄叫びに呼応し、兵隊たちが咆哮をあげる。

「我は天の御遣いなり！！悪事を働く黄巾党共よ！観念して成敗されるがよい！！」

「【鉄碎牙】っ！！風の……傷っ！！」

『ドゥオオーツー！！』

「ギヤアアアっ！！」

鉄碎牙より生じた衝撃『風の傷』は、大量の黄巾党を巻き込んで消えました。

「さあ、まだまだ行きます！【致死武器】……！！！」
スカーレット

『ブシュブシュっ！！』

「ぐわっ！！な、なんだあ！？何もされて無いのに…血が！？……ギヤアアア……！！」

「ひ、ひい……っ！！」

黄巾党たちは怯えて怯みます。

「今だ！ご主人様の、天の御遣い様による仙術の援護で、戦況は一気に傾いた！総攻撃をかけるっ！！」

『応ーっ！！』

劉備軍の兵士たちは士気が最高に高まっている。

「ま、不味いわ……！！これでは私たちは全く名が売れないじゃない！桂花！秋蘭！春蘭……！」

「は、はい！皆、劉備軍だけに良いところを持っていかせるな！」

「突撃だっ！！私に続けえーっ！！！」

『お、応っ……！』

「ご主人様！曹操軍が慌てて後ろから追いかけて来ました！」

「既に戦況は終盤。恐らく曹操軍が到着する前に終戦を迎えるでしょう」

……と言っている間に、

「我らの勝利だっ……！」

『うおおお……う……う……！……！』

勝鬨が上がりましたね。

「朱里、被害総数は？」

「はい！最後の交戦時に数十名ほど軽傷者が出ましたが、重傷者、死者は共に無しです」

「そうですか！完勝ですね…」

「はい」

朱里と私は現状を確認して大勝に喜びます。

「では、敵軍の本陣に侵入し、敵の残兵に気をつけながら敵の兵糧に火を放ち、手の空いている者は怪我人の手当てを！」

『はっ！』

私は更に次の状況を読み、必要であると思われる事を指示します。
と、そこへ、

「流石、手の回しが速いわね」

曹操が夏侯姉妹と荀イク、北郷を連れてやって来ました。

「此方は何もすることがなかったわ。私の指示に従うのではなかったのかしら？」

曹操が嫌みたらしく言ってきました。

「別に指示には反していませんよ？指示通り槍を構えて横隊を組み突撃はしましたし」

間違ったことは一つも言っていませんよ？

「き、貴様ア…揚げ足を取りおつて……っ！！」

「やめなさい春蘭。考えてみれば確かに指示には反していないわ。」

「しかし華琳様…！」

「それに、この兵力差でこの圧勝。余程有能な者でないとは出

来ないわ。そうよね、桂花？」

「はい。これほどの策をこの短時間で考え付くとなると、劉備軍の軍師はなかなか有能であると」

「あ、あのう、この策を考えたのは私たちじゃなくて、ご主人様です…。」

「なんですって？直斗、そうなの？」

「ええ、まあ…。」

「ふうん…？確かに占い通り、知謀にも長けているようね。武も先ほどの戦いでよく分かったわ。ウチのとは大違いね？」

「か、華琳っ！？なんかスゲー酷くない？」

北郷が曹操の言葉に騒ぎだします。

…五月蠅いですね…糞虫が…。

「まあ、あれでも本気の三割にも満たないのですが…？」

「……へえ……。それを聞いて、何としても貴女を手に入れたくなっ
たわ」

「ふふ　そう簡単にはいきませんよ?」

私にはっこりとしながら曹操に言いました。

「それでも……よ　(ホントにこの子、女の子にしか見えないわ……)
／／／」

「……北郷、アンタ、梅沢と替わりなさいよ!」

「ええっ!?　そんな無茶なこと言っなよ!」

「煩い!!　黙りなさいよ!　この汚物!」

……この世界の北郷って、魏　なのに魏の女の子にもフラグを立て
られないんですね……。
何故なんでしょう?

《アンタのせいよっ!》

……気のせいか、邪神ちゃんの声が聞こえた気がします……。

「まあとにかく、これで黄巾党の動きもかなり制限されてくるでしょうね」

「ええ。もう、黄巾党が滅びるのも時間の問題……。それまでは共に行動しますか？」

「こちらは構わないわ。そちらも色々都合が良いでしょう？」

「そうですね。では曹操殿、」

「華琳で良いわよ。私は貴女をとても気に入っているのだから」

「……では華琳。もうしばらく宜しくお願いしますね？」

「ええ、こちらこそ」

手を握り合い、握手をする。

端から見れば腹の探りあいをしているようにも見える私たち二人は、
黄巾党を滅ぼすまでの間の束の間の仲間意識を楽しむものであった…
…。

邪神ちゃん再び（笑）

前回の戦闘から数ヶ月が経ち、各地の黄巾党のほとんどが有力な諸侯たちの討伐されていきました。

そしてついに、華琳が黄巾党の親玉である張角、張宝、張梁を討ち取ったという噂を聞き、華琳とも別行動になりました。

最後まで何としても私を 手中に収めようと勧誘してきましたが、全てやんわりと断りました。

また、我々劉備軍は、黄巾党討伐の功が称えられ、王朝から平原の城を任されました。

「ふう、今日も書類がなかなか片付きませんね…」

と言いつつも私はてきぱきと作業を続けます。

「ご、ご主人様：何で私の倍以上の量をやってるのに私より数倍速いの〜!？」

桃香が呆気にとられています。

「はわわ……。腕の動く速度が凄すぎですよ」

「あわわ……。でも、ちゃんと書類に正しい解決策を書いてましゅ
……」

と、朱里と雛里が言っている間に、

「ふう、これで私の分は終了ですかね？」

私の前に山積みになっていた書類は全て無くなっていました。

「は、はい！お疲れさまでしゅ……！」

「ふええん！！私のは全然終わらないよお！！ご主人様、手伝つて
え！」

と桃香が言ったので手伝おうとすると、

「ダメです！ご主人様だけでなく、桃香様もこの城の主なのです。
このくらいの量は自分でこなして下さい！第一、ご主人様は働きます

ぎです！ここに来てからは毎日他の者に比べて大量の書類をこなしているのですから！」

近くにいた愛紗に止められました。

「ふええん！でもお……」

「でもではありません！ご主人様は部屋でゆっくりしてして下さい」

「では、そうしましょうか。気を使ってくれてありがとうございます、愛紗」

そっと愛紗を抱きしめて一言言いました。

「ご主人様あ…… / / /」

最近、桃香や愛紗たちが、華琳に接する夏侯惇や筍イクのように私にメロメロになっています…

「では、お先に。桃香、頑張ってくださいね」

そう言い残して部屋を出ていき、自分の部屋へ戻ります。

「ふう……」

疲れも有って、寝台へと寝転がると、すぐに睡魔が襲ってきました。

《……え……》

うーん……？

《ねえ……！》

誰……ですか……？

《寝ぼけてんじゃないわよ！いや、夢だけど！》

夢……？というか、何処かで聞いたことがある声……。

《私よ！ワ・タ・シ！邪神！》

ああ……って、何故此処につ！？

《いやね、アンタに能力制限かけたのに、あんまり意味なかったじゃない？だから、もーちよっと制限強めよっかなって》

……は？

《大丈夫！アンタの制限強めてもチートのままだから》

……制限の内容は？

《とりあえず、人間離れた技は一切無し！但し、身体能力は今以上にしたげる！まあ恋姫の世界には気は有るみたいだし、気は例外な？風の傷とかも、気で応用しなよ》

……まあこの世界で今の能力は無敵過ぎですからね……。良いですよ。

《んじゃ、起きたら能力封じかかってるから。ああ、武器は贄殿遮
那と鉄碎牙、鋼金暗器を部屋に置いとくから》

……どうもです…。

辺りが光に包まれるー

「……夢…？いや、過負荷や異常が使えない……それに……」

視線を横にやると、

「贄殿遮那、鉄碎牙、鋼金暗器……」

三つの武器が置いてました。しかも、

【チートだからといって無茶ばっかすんなよ？邪神より】

手紙付きで。

……汚い字。

「ふふ……これからは愛紗たちの訓練に加えて貰いましょうかね……？」

楽しみにしておこうと心に決めたのです。

邪神ちゃん再び（笑）（後書き）

最近、自分でこの小説を見返してみて、

「…………やり過ぎた！！（。 。 ;ノノ）」

と、無敵過ぎる主人公に後悔し、無理矢理ですが弱体化させました…。

今回は主人公設定（恋姫十無双編）その2です…。

主人公設定（恋姫十無双編）その2

身体能力：EX（限界値突破）

知力：A+

気力：S++

魔力：F--（というか皆無）

〈状態異常〉

・人間離れした技は一切使用不可。
例えば、禁書目録の超能力や魔術、めだかボックスの過負荷や異常など（但し気は例外である模様）

・身体能力が無敵。というかバケモノ並み（？）

・能力値に成長の限界無し（本人は知らない）

〈現状でのフラグ〉

蜀：桃香、愛紗、鈴々（恋愛感情かは不明）、朱里、雛里、星

魏：華琳、桂花、春蘭、秋蘭（一刀は魏　なのに空気ですwww）

呉：無し

その他勢力：無し

再会！（前書き）

アノ人と再会します

再会！

「今日もたゞのしく見回りだあ」

「桃香、あまりはしゃぎすぎて転ばないでくださいね？」

私と桃香は今、街へ出て見回りをしています。

「もう、子供じゃないもん！ぶんぶんっ！」

桃香は頬を膨らまして怒りますが、正直、可愛いだけです……

何て事を考えていると、

「ご主人様あゝ、桃香様あゝ！はあ、はあ、はあ……やっと見つかりましたあ」

「朱里ちゃん？何かあったの？」

「えっとですね、すぐにお城に戻って貰っても良いですか？」

「何かあったのですか？」

「その、実はお城に、お二人を訪ねて来た方が……」

「お客さん？誰だろ？」

「お名前は、確か趙雲さんとか……」

「星が？……白蓮のところに居たはずでしたが」

「白蓮ちゃんの使者として来たのかな？」

「わかりませんが。……とにかく城に戻りましょう」

「ん。そだね」

私と桃香は走って城に戻って行きました。

「はわわ、お二人とも、待ってくださいよお〜！」

……朱里の事を置いて（笑）

（innお城）

「星ちゃんっ！」

「おお、これは桃香殿。久方ぶりですな」

「ホント、久しぶりだねー」

「我らの旗揚げ以来……となると、半年ぶり、ということになりますね」

「久しぶりなのだ。星、元気だったかー？」

「ふふつ、お陰様でな。息災だった。……そちらの方もなかなかの活躍ぶりだったな。各地の街でえらく評判になっていたぞ」

「ほんと？えへへ、頑張った甲斐があったね」

「ですね。……ところで星。各地の街でって言っていましたか、もしや……？」

「ふふつ、相変わらず鋭いですな。……黄巾党の乱が収束に向かいだした頃に伯珪殿から暇を貰い、各地を放浪しておりました」

「放浪？お主ほどの人物が何故そのような真似を。探せばいくらでも仕官先はあるだろうに」

「私は安く無いのでな。我が剣を預ける人物は、我が眼で見、我が耳で聞いてから判断したかったのだ」

「それで見つかったのかー？」

「ふむ。それが中々難しくてな。主となる人物の器量と徳、そしてその周りに居る人物の質。その三つを兼ね備える勢力は少なかつた」

「少なかったということはいくつかは見つけたってこと？」

「一応は。ただどの陣営に於いても、どこか肌に合わぬところがあったのです。……だからこうして放浪していたという訳で」

「ふむ。……それにしても気になる。星ほどの人物が認めた勢力というのは、どこになるのだ？」

「まずは曹操だな。兵力、財力、そして人材。全てを兼ね備えた勢力であり、なおかつ当主である曹操は器量、才能豊かな、まさに英雄だ」

「おー。あのちびっ子凄かったもんなー」

「だろう？しかしなあ……」

「何か不満が？」

「……あの陣営の中に漂う、百合百合しい雰囲気はどれも好きでは無いのですよ」

「……なるほど…」

確かに華琳は美しい女の子が好きですしね…。

「百合百合しって、どついつことお〜？」

「何とというか……。曹操を支える忠臣たちの瞳が、桃色というか何と
いうか………」

「そ、それは……どついつことだろっ？」

「簡単に言えば、女同士で仲が良すぎる、ということだな」

「な……っ!?!?!」

「ねえねえ桃香お姉ちゃん。仲が良すぎてなにが悪いのー？」

「あ、あはは……それは鈴々ちゃんにはまだ早いかなあ？」

「鈴々には早いのー?……むー。お兄ちゃんは何か知ってるかー？」

「ふふつ、鈴々にはいつか私が教えてあげましょうか？」

「ちょ……ご主人様！鈴々に変なことを教えるのは止してください！」

「ふふつ、すみません」

「にゃー……なるほどお。鈴々、ちょっとだけ分かったのだ」

愛紗と私のやり取りを聞き、鈴々は意味を悟ったようです。軽く頬を染めながらも、鈴々は興味津々な様子を見せます。

「まあそういうことだな。その道も耽美ではあるが、あの国の将たちは少し排他的だな。正直つまらん」

「つまらん……ですか……」

「で、もう一つは孫策殿のところだ」

「孫策……江東の麒麟児か」

「ああ。性勇猛、知略にも通じ、従える将はそれぞれ一騎当千……
なのだが」

「だが？」

「完璧な布陣過ぎてつまらんですよ。私の活躍できる場所が無い」

「なるほど」

「あとは？」

「その他は、有象無象ですな」

「……まあ、そうですね」

袁紹や袁術も、この世界では「おっほっほ」と「蜂蜜水」ですから
ね……。

そういえば、董卓はダメなのですかね？

「そうなのか？河北の袁紹、荊州の袁術、西涼の馬騰、董卓と、大勢力はいくつもあると思うのだが……」

「勢力が大きくとも、志が天下に向かい、またそれを実現する力があるとなると、先に挙げた二名の他は有象無象」

「それで放浪を続けてきたんだ。……すごいなあ」

「でもどうして鈴々たちのところに来たのだー？ちよつと休憩なのか？」

「ふっ……休憩では無い。私自身の戦いを始めるために来たのだ」

「……では？」

「ええ……。貴殿らさえ良ければ、私も共に戦わせて頂きたい。貴殿らの理想の実現のために。……私の理想を形にするために」

力強い瞳で私たちを見つめてくる星の言葉から、その志の高さが伝わってきました。

「うん！一緒に戦おう星ちゃん！みんなが笑顔を浮かべて、平和に

暮らせるその日のために！」

星の手を両手で包み込んだ桃香が、大きな瞳を煌めかせる。

「星が来れば百人力なのだー」

「ふふっ、そうだな。……星。お主の力、あてにさせてもらっぞぞ」

「ふっ、任せておけ」

自信満々に頷いた星が、スッと私の方を振り返ります。

「では……主よ。私の初任務を命じていただきましたでしょうか」

「任務ですか……」

「兵の訓練から街の治安維持、はたまた開墾の指揮や灌漑指導。……もちろん夜も……、何でも命じて頂いて結構ですぞ」

「よ、夜って……／＼／」

いくら何でも刺激が強すぎますっ！！

私はそういった経験は皆無なのに、星のような美人にそんな…… /
 /

私は顔が真っ赤になるのが自分でも分かりました…。

「ゴホンッ。着任早々、ご主人様を誘惑するようなことは止めても
らおうか」

「ふむ、なるほど。……では怖いお姉様に目で殺されないように注
意するだけは注意しよう」

ククツと喉で笑いながら、星は愛紗の言葉を華麗にスルーします。

「まあ、ご主人様が好かれるのは良いことだよ」

「そうそう。お兄ちゃんはみんなのものなのだ」

恥ずかしいです…。 / / /

未だに顔の火照りが直りませんし…。

「……主よ。良い環境を構築しましたな」

「も、もう！おちよくらないでください…！／／／」

「おやおや、慌てふためく主は可愛らしいですなあ」

「せ、星！いい加減にご主人様をおちよくるのは止せ！（た、確かに何だか物凄く可愛い……／／／）」

愛紗のフォローでなんとか星の意地悪も止まります…。

「と、とにかく、朱里！今しなければいけないことは何でしたか！？」

「はい。えーっと……色々ありますけど、やはり、募集に応じてやって来た兵隊さんたちの訓練が急務かと……」

「ふむ。ならばその仕事、私に任せて貰おう。……お嬢さん」

「あ、そつえば星は朱里や雛里とは初対面でしたっけ？」

「ええ。なかなか利発そうなお嬢さんですな」

「あ、あの、その……私、諸葛亮って言います。字は孔明で、真名は朱里です。朱里って呼んでください」

「朱里と雛里は我が軍の軍師として働いてもらっています」

「ふむ……。朱里とは美しい名だ。……では我が真名星をおぬしに預けよう。軍師殿、宜しく頼む」

「い、こちらこそでしゅ！」

初対面の緊張からか、朱里は軽く噛みながら勢いよく頭を下げました。

「それでこちらのお嬢さんが……」

「あわわ、鳳統でしー！」

「……………！」

「二人とも、緊張すると噛んでしまつくせがあった…。可愛いでしょう?。」

「少女のカミカミ口調とは良いものですね」

「私は好きですよ 可愛らしくて」

「はあ……何をバカなことを言っておるのです。星もさつと自己紹介を済ませろ」

「おお、怖い怖い。……では鳳統殿。我が名は趙雲、字は子龍。真名は星。……星と呼んでくれてかまわないのだが……」

「あわわっ、わ、私もあの、ひ、雛里って言いますから、えと、宜しくです!。」

「雛里殿か。こちらが良い名だな。その可憐な姿にはぴったりだ」

「あう……」

まっすぐ雛里の目を見つめて、まるで男が女性を口説くかのような言い方をする星に、

「桃色が肌に合わないって、どこらへんが合わないのだ？」

的確な鈴々のツツコミが入りました。

「全く。貴様がこのように不埒な性格だとは思わなかったぞ……」

「良いではないか。美味しい食事に極上の酒、美しい少女と素晴らしい仲間。……戦いだけの日々では身が持たんというものだ」

「うんうん。星ちゃんの言う通り 仲間がいるって素晴らしいことだよ」

「……少し違うような気もしますが」

「愛紗、もう諦めるのだ」

「むう……」

「そ、それよりご主人様。お仕事の配分はどのようにいたしましょうか？」

「そうですねえ……。愛紗と星には新兵の訓練、鈴々と桃香には街の警邏、朱里は市の管理をして、雛里は兵站の管理……という感じでどうですか？」

「ええと……適材適所かと」

「お兄ちゃんはどつするのだ？」

「私ですか？私は皆がまだ手を着けていない書類でも整理しておきますよ」

「え？でも確か、書類って量が凄いよ？お城の政務室が一つ丸々埋まるくらい……」

「あ、じゃあ私が、あの……お手伝いします」

「ありがとうございます。でも大丈夫ですよ。あのくらいの量なら三刻ほどで終わりますから」

「……ホントご主人様って、常人離れしてるよね？」

「はい…。仙術が使えなくなった後も、武の強さにもほとんど影響はありませんし、軍師顔負けの知能ですし…。桃香様も少しは見習ってくださいね?」

「うう…。がんばります…」

「では仕事にかかりましょうか。夜には星の歓迎会をしますので、そのつもりで頑張ってください」

「やた! 鈴々ね、今日はお仕事頑張るのだ!」

「今日は、では無くいつも頑張って欲しいものだ」

「うーっ、イタイところを付かれたのだあ……………」

愛紗のツツコミに頭を掻きながら、鈴々は桃香の背中に身を隠します。

その姿の滑稽さに皆の間に笑いが生じました。

「うううのも……………良いものですね…」

理想を共に出来る仲間が居るーそれはとても素晴らしいことだと、

今の私は心の底から素直にそう思えました。

こうして私たちに新たな仲間が加わりました。

姓は趙、名は雲、字は子龍。

三國志で人気のイケメンヒーロー、趙子龍。

……この趙雲もまた、ヒーローであることを期待します。

とても個性的ですが、素敵なおひとですからね

少し上機嫌で執務室へ向かった私。

そのせいか、仕事が異様なスピードで終わり、更に機嫌が良くなる
のでした

再会！（後書き）

星、可愛いーっ
大好きっ

……失礼しました。
作者は星が大好きです

まあ蓮華や愛紗、桃香たちも大好きなんですが。

さて、もうそろそろ反董卓連合ですね…。

どう展開していくのか。
おっほっほ達（笑）、おバカはどうなるのか楽しみにしてください
さいね！

ではまた次回！
さよなら〜（＾　＾）ノ

王朝の崩壊と反董卓連合（前書き）

お待たせしました。
ではどうぞです

王朝の崩壊と反董卓連合

新たな仲間が合流し、初めての内政に私たちが取り組みだして苦勞し出した頃――。

私たちが知らないところで、この大陸の運命を変える大きな出来事が起こっていました。

漢の皇帝、靈帝の死です。

この国の支配者が死んだことで、黄巾党の乱から朝廷内に燻っていた権力争いが具現化しました。

朝廷内を牛耳る宦官・十常侍と、軍部を握る軍人とが、自分たちの懐中にある皇太子を即位させようと、血で血を洗う権力闘争を起したのです。

靈帝の崩御に伴い、その妻、何太后とその兄である大將軍何進によって擁立された弁太子こと少帝弁。

そして宦官一派と靈帝の母である董太后に擁立された、聡明と評判の高い次子、劉協。

この二人の皇位争いは、すぐに決着がつかしました。軍という実行部隊を持つ大將軍何進が、その力を背景に妹の息子である弁を即位させたのです。

しかし十常侍たちも黙ってはいません。

何大后の名を騙り、何進を呼び出して暗殺。

その後、自らを守る盾を無くした何大后を洛陽より追放、そしてこちらにも暗殺します。

これを聞いて黙って居られなかったのが、何進の部下である將軍たちでした。

報復とばかりに十常侍を急襲し、その数名を排除することに成功したのです。

が……これあるを予感していた十常侍筆頭の張讓は、少帝弁と劉協を連れて都より逃亡をしていました。

逃亡の途中、実行部隊の必要性を痛感した張讓は、その政治力を駆使し、涼州に駐屯する部隊を率いていた董卓を味方に引き入れました。

董卓率いる大軍団を伴い、意気揚々と都に凱旋する張讓でしたが、

所詮は皇帝を掌中にしているだけの文官でしかなかったのです。

すぐに董卓に裏切られて掌中の皇帝を奪われ、用済みとばかりに殺されてしまったのですから、間抜けとしか言い様がありません。

権力の中枢に居座った董卓は、少帝弁を廃位し、次子であった劉協を王座につけます。

献帝と名乗った劉協を傀儡とし、自らを相国（現代の総理大臣的な位）という位につけて、朝廷内を牛耳っていききました。

しかし、その頃には何進の部下であった將軍たちがそれぞれの任地で割拠の姿勢を取り始めていました。

そして……第二の権力闘争が開始されました。

反董卓連合結成の檄文が、各地で割拠する諸侯に飛んだのでした。

「……という、経緯まで懇切丁寧に書かれた書簡が届いたのですが」

河北の雄、袁紹から届いた手紙を皆に回しながら、これからの方針を相談します。

「一応、皆の意見を聞かせて貰いますね」

「当然参戦だよ！董卓さんって長安の人に重税を課してるって噂を聞くし。そんな人を天子様の傍に置いておくなんて言語道断！さっさと退場してもらわないと！」

「桃香様の仰る通り。力無き民にかわり、暴悪な為政者に正義の鉄槌を喰らわさなければ」

「悪い奴は鈴々がぶっ飛ばしてやるのだ！」

手紙の内容を読み、やる気をまくしたてる三人。

しかし、それとは対照的に、首を傾げる素振りを見せるもう一方の三人がいました。

「……星、朱里、雛里の意見はどうですか？」

「ふむ。……桃香様や愛紗たちが言うことも尤もだとは思いますが」

「なんだ。星は反対とでも言うのか？」

「そうは言わん。ただ……」

「この手紙の内容が気になっているんですね？」

「……軍師殿も同じか？」

「はい。敵対勢力について書かれているとはいえ、あまりにも一方的過ぎるか……」

「一方的？ どういうことなのだ？」

「董卓さんは悪い奴。だからみんなで倒そう……分かりやすいことばかり書かれていますけど、この手紙はそんな単純なものではないと思っんです」

「これは諸侯の権力争い。……抜け駆けして朝廷を手中に収めた董卓さんへの諸侯の嫉妬が、このような形で現れたと見るべきです」

「……うー。そんなに複雑に考えなくちゃならないことなのかなあ。今、董卓さんに苦しめられている人たちが居るってことだけで充分だと思っんですけど」

「董卓の圧政に皆が苦しんでいる。……それが本当なら桃香様の仰ることも尤もなんですけど……」

「逆にどの辺りまでがホントのことなのか。その辺りを見極めなければならぬかと……」

「うー……何だかややこしいのだあ〜……」

「それが政治というものだ。鈴々よ」

「我々は既に流浪の義勇軍ではなく、一つの地域を支配する候ですからね」

「それに……既に漢王朝に崩壊の兆しが見えている以上、先のことを見据えて動かなければ、私たちのような弱小勢力は、巨大な濁流に飲み込まれるのは必至だと思います」

「……自分たちの理想を実現するためにも、その理想を客観的に見つつ、実現するために現実的な考え方をしろ……そついうことか」

「理想というものは大切だ。だが自分で自分の理想の目映さに目が

眩んでいては、いつかは転んでしまつたろう？太陽は蒼天に、確かにあるのだから。その光を浴びながら地に足をつけて歩くことこそが重要だと私は思うのだよ」

「星ちゃんの言いたいことは分かるけど……でも、じゃあ私たちは参戦しないほうが良いってこと？……そんなのイヤだよ」

「例え圧政の確たる証拠がないにしても、苦しむ庶人がいる可能性があるのならば、私はその人たちを助けに行きたい……」

「……私とて本心ではそうなのだがな。……さて。どうする、主」

皆の意見は出揃つた……そんな表情で私を見つめながら星は口を閉じました。

「皆の意見は分かりました。では、ここからは私が個人的に調べておいた情報を」

「情報……ですか？」

「ええ。私の親衛隊の何人かを隠密部隊に育て上げ、洛陽に忍び込ませて来ました。で、その報告なのですが……、圧政どころか、今の洛陽は董卓のお陰で庶民の暮らしが楽になったようです」

『ええっ!?!?』

「ご主人様!それは本当なのですか!?!」

「ええ。ですから、先ほど朱里が言ったことが恐らく真実でしょう」

「そ、それじゃあご主人様、董卓さんは悪い事はしてないのに皆に攻めて来られちゃうの!?!」

「……………そうなります」

「ダメだよそんなの!」

「私も同じ意見です。ですので反董卓連合には参加を……………」

「しないんだよね?」

「いえ、します」

「な、なんで!？」

「桃香。例え私たちが反董卓連合に参加をしなかったとしても、他の諸侯は参加をしてきます。となると董卓は……」

「死……ですか……」

「はい。ですから、私たちは反董卓連合に参加をして、洛陽で董卓を救出することと、風評を上げることが目標にします」

「それに、董卓さんを助けられたら董卓さんを慕っている敵方の將軍さんたちも仲間になってくれるかもしれませんし……」

雛里が私に補足して言いました。

「なるほどお……。じゃあ、董卓さんを助けに参戦しよっか」

『応っ!?!』

「では、色々と準備が必要です。各自で必要なことを考えて、準備をしてきて下さい!?!」

『はい』

「こうしてー」

私たちは反董卓連合に参加することを決定させたのでした。

王朝の崩壊と反董卓連合（後書き）

そのうちオリキャラとして今回に言っていた親衛隊の隠密部隊を出そうと思います。

できれば次回「虎狼関辺りまでには……」

集いし諸侯の英傑たち

私たちはようやく、反董卓連合との合流地点に到着しました。

「これはなかなか壮大ですね……」

陣地の至るところに天幕が張られ、その周辺には諸侯の旗がところ狭しと並び、色とりどりの軍装に身を固めた兵士たちがあちこちにたむろしていました。

「ほわー……たくさん兵隊さんが居るねえ〜」

「さすが諸侯連合……といったところでしょうか。こうやって一同に会すると壮観ですね」

桃香と朱里が思った以上の大軍に驚いています。

「ふむ……陣地中央の大天幕の位置になびく旗が、河北の雄、袁紹の旗か」

「その横に荊州・南陽の太守にして、袁紹の従妹にあたる袁術の旗

……」

「あのちびっこの旗もあるのだ！」

「その奥には……江東の麒麟児、孫策さんの旗も見えますね」

「西涼の馬騰さんや官軍に所属していた方の旗も、いくつか見受けられますねー」

星、愛紗、鈴々、雛里、朱里は反董卓連合に参加をしている諸侯の名を挙げていきます。

「あーあっちにあるのは白蓮ちゃんの旗だー！」

桃香が白蓮の旗を見つけました。

「ホントですね。……まさに諸侯が集まる武の競演……といった感じですねえ」

歴史上に名を残すような英雄たちと同じ場所に立っていると考えると、何だか少し興奮しますね

おや、向こう側から金色の鎧を着けた兵士が走って来ました…。

「長の行軍、お疲れさまでございました！貴殿のお名前と兵数をお聞かせ下さいませでしょうか！」

「平原の相、劉備です。約二万の兵を率いてただいま参陣しました。連合軍の大将さんへ、取り次ぎをお願いしますか？」

「はっ！しかし恐れながら現在、連合軍の総大将は決まっておらずぬのです……」

「なに？総大将がまだ決まっていなないだ？」

「ということとは、この場所に駐屯し、いったい何をしているのだ？」

兵士の言葉に、恐らく全員が思ったであろう疑問を星が代表して口にしたとき、

「総大将を決める軍議をしているのだ」

私たちの背後から、聞き覚えのある声が飛んできました。

「白蓮ちゃん！」

「よ、桃香。久しぶりだなあ」

「お久しぶりだね。元気だった？」

「お陰で、無病息災さ。……星も久しぶりだな。元気にしていたか？」

「ええ。あれからあちこち放浪し、今は桃香様、直斗様の下にお仕えしております。……白珪殿もお元気そうで何よりですな」

「ま、お前が抜けたあとの穴を埋めるのは大変だったけどな」

「おお。厭味を言われるなどと、白珪殿も成長されたようですねあ」

「ほざくな、バカ」

口ではきつく言いつつも、微笑みを浮かべて星と話す姿に、二人の間にある友情が垣間見えました。

「ところで白珪殿。……総大将がまだ決まっていけないというのは本当のことなのですか？」

「ああ。残念ながら事実だ……」

「どついうことなんでしよう？やはり諸侯の主導権争いが泥沼化しているのでしょうか？」

「それがなあ。……実はその逆なんだよ」

嘆息と共に眉間を抑え、白蓮は心底困った様子で言葉を続けます。

「一部を除いて、総大将なんて面倒な仕事はごめんだ……という人間が殆どでな。軍議が進まん」

「面倒なのはやだーって言ってるなら、やりたいヤツにやらせれば良いのだ。……違うのか？」

「いや、実際そうなんだが、やりたそうにしている人間が自分から言い出さなくてなあ」

「……つまり、やりたそうにしている人間に押しつけるつもりなのに、やりたそうにしている人間が立候補せず、また他の諸侯も発言に対しての責任を負いたくないから薦めない……ということですか？」

「ぴったりその通り。……腹の探り合いで疲れるよ、ホント……」

トホホ……と嘆息しながら、白蓮はがっくりと肩を落とします。

「あまりにも疲れるから、会議を抜け出して気分転換をしようと思っただけ。そしたら桃香たちがちょうど到着してたって訳だ」

「そうでしたか……。仕方ありませんね……」

「ご主人様？」

「ちょっと軍議に顔を出して来ます。桃香も行きますか？」

「あ、うん！私も一緒に行くよ」

愛紗たちに少し待っているように伝え、一番大きな天幕に向かいます。

（inn天幕）

「さて皆さん。何度も言いますが、我々連合軍が効率よく兵を動かすにあたり、たった一つ、足りないものがありますの」

金ぴかの衣装を身に纏い、天を衝くほどのクルクルドリルヘアを颯爽となびかせた少女が、沈黙する軍議の中で一人だけ喋りに喋りまくっていました。

「兵力、軍資金、そして装備……全てにおいて完璧な我ら連合軍。その連合軍にただ一つ足りないもの。……さて、それは何でしょう」

高飛車なお嬢様のように、口元に手をあてて不敵な笑みを浮かべているこの少女が、河北の雄、袁紹です。

……どの辺が雄何でしょうか？

その口調や物の言い方に接してみれば、袁紹が総大将になりたがっていることは一目瞭然です。

はあ……。これがかの有名な袁紹なのでしょうか……。

「まず第一に、これほど名誉ある目的を持った軍を率いるには、相應の家格というものが必要ですわ。そして次に能力。気高く、誇り高く、そして優雅に敵を殲滅できる、素晴らしい能力を持った人材こそが相応しいでしょう。そして最後に、天に愛されているかのような美しさと、誰しもが嘆息を漏らす可憐さを兼ね備えた人物。……そんな人物こそ、この連合軍を率いるに足る総大将だと思うのですが、如何かしら？」

「……で？貴女が挙げたその条件に合う人間は、この連合軍の中に居るのかしら？」

「さあ？それは私の知るところではありませんけれど、世に名高いあなた方ならば、誰かお知りなんじゃありませんの？」

このままでは時間の無駄ですね……。仕方ありません、こうなったら

…。

私は華林に視線を送り、私の意図を伝えます。

すると、流石は華琳。私の考えていることを即座に理解したようで、立ち上がりました。

「そうね…。私を知る限り、この連合にも一人居るかもしれないわ」

「でしよう？で、その方のお名前は？」

「梅沢直斗よ。天の御遣いの一人にして、知謀にも武勇にも長けており、男性でありながら、女性と間違えるほどの美しさと気品。どうかしら？」

『ザワザワ…』

諸侯たちが騒ぎ始めましたので、私も立ち上がり挨拶をします。

「ただいま曹操殿より紹介に上がりました、梅沢直斗です。どうぞお見知りおきを…」

「な、なんじゃ！？お主、本当に男なのかえ！？」

袁紹によく似た子供が騒ぎます。恐らくは袁術でしょう。

「ほう…。雪蓮が興味を持ちそうだな…」

こちらは…確か周瑜さんですね。原作知識ですが。

「へえ」。世の中には、こんなに綺麗な男もいんだな…。そういや髪型もアタシと似てるな」

こちらは西涼の馬騰さんの娘さんの马超さんですね。

「ちよ、ちよっとお待ちなさい！天の御遣いだか何だか知りませんが、三國一の名家であるこの袁本初を差し置きこの方が総大将ですって！？」

「ええ。何か問題でも？直人は構わないわよね？」

「皆さんの力になれるのであれば、是非」

「し、しかし、そんな何処の弱小勢力かも分からないようなところの当主がたいした力を持つわけが……」

「……他に直斗が総大将をする事に反対意見は？」

「無いな」

「無いのじゃ！」

「別に無いよ」

「じゃあ決まりでいいかしら？」

「ちょ、ちょっとお待ちなさい！私が！この私が総大将を務めますわ！」

「あら、そつ？ならばこれで決まりね」

と決まった時――

「おおーい、まだ軍議は進んでないのかー？」

気分転換を終えた白蓮が戻って来ました。

「いい加減、さっさと総大将を決めないと、董卓軍が万全の態勢を敷いちまうぞ〜……って、あれ？」

そこまで言っつて、ようやく軍議を包む不思議な雰囲気気づき、私たちに説明を求めて来ました。

「どっつなっつてんだ？これ……」

「今、軍議が終わったのですよ。袁紹が自分から連合軍の総大将をやると言い出しましたから」

「おっ？そうなんだ。……んじゃ、これでようやく本題に戻ることが出来るな」

「その本題も、連合軍の総大将である人が決めてくれることでしょうね。……私は陣に戻る。決定事項は後ほど伝えてくれれば良いわ」

「私も自陣に戻らせてもらおう。曹操殿と同様、作戦は後ほど通達してくれればそれで良い」

「じゃあ私たちも帰りますか。行きますよ、桃香」

「え？あ、うんっ！待って！」

私たちは袁紹たちに背を向けて軍議の場から立ち去ります。

「それにしても、久しぶりね、直斗。それに劉備」

「はい！お久しぶりです」

「久しぶりですね、華琳。元気そうで何よりです」

「そちらこそね。……今回は助かったわ。あのままだと軍議が永遠

に終わらなかつた気がするもの。礼を言つわ」

「いえいえ、そちらこそ、私の意図を一瞬で理解してくれて。そのお陰で袁紹に自分から言わせることが出来ましたからね」

「相変わらずよく頭が回るのね」

「ええっ！？あれって、二人とも演技だったの!？」

「まあ、そうですね…」

「私と直斗なら簡単よね」

華琳が何故か桃香に向かって自慢気に言いました。

「むう…。私のほうがご主人様と息ピッタリだもん！」

「さて、どうかしらね？ま、私はこれで失礼するわ。またね、直斗」

「ええ。筍イクや夏侯姉妹にも宜しく言っておいて下さいね」

「ええ、分かったわ」

そう言っつて華琳は自陣に戻って行きました。

「じゃあ私たちも愛紗たちのところに戻って策でも考えておきますか」

「むむむ……。……。へっ！？そ、そーだね〜……」

桃香はいつまで華琳のことを気にしているのでしょうか？

「ご主人様。ご苦労様でした。何でも、色々と大変だったようです
ね……。？」

「え？愛紗ちゃん、なんで知ってるの？」

「先ほど、白珪殿から聞いたのですよ。そうそう。そういえば確か、我らが先陣を切れとも伝言をされておりましたな…。どうされますか、主よ？」

「先陣ですか？受けますよ。名を上げる好機。それにここで他の諸侯に任せて負けるのは一番許さないことですからね」

「主が良いならば、私たちも全力で当たらせて貰いますぞ！」

「頼りにしますよ」

「あとう、ご主人様あ…」

「……どうしましたか、雛里？」

「は、はい…。その、先ほど袁紹さんから伝えられた策なのですが…」

「……あまり期待はしていませんが、一応聞いておきましょうか…」

「『雄々しく、勇ましく、華麗に前進!』だそうだしゅ……」

『……………』

皆のやる気が一気に削がれました……。

「策……というものを馬鹿にしていますね……」

「これなら鈴々が考えた方がマシじゃないのかー?」

「呆れてものが言えませんか……」

「袁紹さんって、物凄おくおバカなのかな?」

「勢力が大きいだけの無能……というわけですな」

上から朱里、鈴々、愛紗、桃香、星と続けます。

「……とりあえず、個々で自由に動けるわけですから、その点に関

してだけは感謝しておきましょう……」

「そうですね……」

「とにかく、こうなった以上、我々がしっかりと董卓軍に当たらなければいけません。朱里」

「はい。恐らく私たち連合軍の行軍の中での難関は二つ。『汜水関』と『虎牢関』です。」

「敵の配備状況などは分かるのか？」

「ご主人様と桃香様が軍議にいらっしゃっている間に、前線に向けて斥候を放っておきましたから、おっつけ情報が入るか」と

「おー！さすが朱里ちゃん 頼りになるう」

「えへへ……」

桃香の褒め言葉に頬を染めてーだけれどまんざらでも無い様子で笑った朱里が、

「とにかく今は、出来る限りの情報を集めるのが肝要かと思えます」

そんな言葉と共に説明を締めました。

「うむ。情報が無ければ作戦は決まらんからな。……ならば主よ」

「はい。出陣しましょう。士気にも影響することですし」

これから予想されるであろう激戦に、軽い戦慄を覚えながら、私たちは出陣の準備を開始しました……。

汜水関攻略戦！その？

「さあ！連合軍総大将、袁本初の号令と共に、雄々しく、勇ましく、華麗に進軍しようではありませんかっ！」

「全軍、汜水関に向けて進軍してください」

「ヨッシャー！行くぞみんなー！」

『応っ！！』

袁紹の大号令と共に陣地を発し、私たちは第一の目的地、汜水関へと進軍を開始しました。

汜水関——三國志演義では、虎牢関と並ぶ難攻不落の要塞として名

高い。

朱里が放った斥候の話によると、汜水関に立て籠る董卓軍は約五万。

そのうち強敵たり得るのは、猛将として名高い華雄將軍が率いる籠城戦の主力部隊で、約三万。

いずれも装備の質、兵の質共に高く、士気も大いに高まっているらしいです。

「……全く、そんな相手に無策で挑むなど、袁紹の気がしれませんよ……」

ついつい愚痴をこぼしてしまいます。

「確かに作戦が無いという状況というのは、不安ではありませんよね
……」

「だけど、こと攻城戦に限って言えば、作戦や策らしきものは必要
ではないです」

「そうなの？」

「そうですね。攻城戦はどのように戦っても、圧倒的に籠城側が有
利になりますから。……なので、野戦とは違い、策というものは調
略方面でしか活躍出来ないのですよ」

「それに今回は董卓さん相手に、複数の諸侯が連合を組んでの戦い
ですから、挟撃される心配も少ないでしょう」

桃香の質問に、私と朱里が答えます。

「つまりは作戦は無しで戦えということですか？」

「戦況を見て、その都度即応する……ということしか言えませんで
す……」「めんなさい」

「雞里が謝ることじゃないのだ。悪いのはアンポンタンな袁紹なのだ」

「鈴々の言う通りですよ。雞里はよくやってくれていますよ」

そう言って雞里の頭を優しく撫でてやります。

「あ、ありがとございませゆ……えへへ……」

雞里は目を細めて気持ち良さそうにします。

「さて、ここからは私たちが何とかしなくてはならないのですが、確か汜水関の将は……」

「華雄將軍ですね。董卓軍の中でも猛将として知られ、兵士たちの人気も高い方です。……かなりの強敵と言って良いと思います」

「猛将にして良将か。……難儀なものだな」

「何か弱点とかはないのかー？」

「弱点……かどうかはわかりませんが、華雄將軍は己の武にかなりの誇りを持っているようです。その辺りを攻めてみると良いかもです……」

「ふむ。自らの武に誇りを持っている人間ならば、それを冒瀆されることを嫌うはず。……彼奴を罵って関より引き出す、というのもありかもしれない」

「しかし一軍の将となっている者が、見え透いた挑発に乗るだろうか？」

「乗るぞ。……なあ鈴々」

「じゃ？何で皆して鈴々を見るのだ？」

「ふっ……なるほど。案外、図に当たるかもしれないな」

「ふふっ、それ以上言うては鈴々がかわいそうですよ？……朱里、離里。愛紗の作戦の効果は大丈夫そうですか？」

「そうですね……単純な策ですが、案外いけるかもしれません。ただ……」

「ただ？」

「作戦が成功して、華雄將軍が関から出てきたら、それを受け止めるのは私たちの役目ですから……」

「全軍火の玉になって攻め立ててくる華雄將軍を、どういなすか……それが問題かと」

「個人的にやりたい策が一つだけあるのですが……」

私は一つ提案を出します。

「え、何々？」

「ご主人様、どういった策なのですか？」

「突撃してきた華雄將軍の部隊を、袁紹に擦り付ける……というものです」

「ほう…… 主もおもしろい事をお考えで」

「し、しかしそのような事が可能なのでしょうか？」

愛紗が質問します。

「一応は出来ると思いますよ？突撃してきた華雄將軍の部隊に押し込まれたフリをして袁紹のところへ敵を引き入れる。更に言えば、敵の懷で身動き出来ない華雄將軍を一騎討ちで討ち取る事も可能です。尤も、皆が反対なら止めますが」

「ふむ……それもありですね」

「ああ、ありだな」

「ありだねえ」

「ありなのだ！」

こちらも承認したとはいえ、いきなり先陣を押し付けられた恨みがあるからか、皆が皆、袁紹を巻き込むことに賛同の意を表明します。

「では、この策で。……どうせなら袁紹の兵力を大量に削るくらい

の勢いで殺りましようか」

え？漢字がオカシイ？

気のせいですよ、きっと

「では、先陣は私と一緒に星と愛紗にお願いしますね。うまく戦線を崩してきましょう！」

「ふふっ、主と一緒にとなると、気合が入りますな」

「ご主人様の背中には私に任せてくださいね！」

「ええ。二人とも、頼りにしています。雛里と朱里は戦況を見て補佐を。桃香には本陣の指揮を任せます」

「お兄ちゃん、鈴々はっ？」

「鈴々は桃香と本陣です」

「イヤなのだ！鈴々も先陣が良い！」

「こら、鈴々！我が儘を言うな！」

「イヤイヤ！鈴々だって暴れたいのだ！本陣で待機なんてつまんないのだ！」

「鈴々。鈴々が本陣にいなければいけないのはとっても重要な訳があるのです」

「訳……があるの？」

「当然です。良く考えてみてくださいね。撤退する私たちを援護するのに、桃香だけではとっても大変です。その時の切札が鈴々です。……敵の追撃を辛うじて防ぎながら撤退してくる私たち。そこに本陣を率いて颯爽と登場する鈴々……如何ですか？」

「か、かっくいいのだ……」

「そうですね？だから鈴々には本陣に居てもらわなければ駄目なんです。……良いですよね？」

「……」

「よし、いい子です」

すっかり上機嫌になった鈴々の様子に、ホッと一安心していると、

「……………お見事です、ご主人様」

愛紗に労いの言葉を掛けられました。

「ふっ、何だか詐欺師にでもなった気分ですが」

「そろそろ先陣に行きますぞ？主、愛紗」

「了解です」

「分かった」

「いよいよ攻撃開始ですね……」

連合軍の中でジリジリと高まっていく緊張感が、肌を通して伝わってきました。

と、その時

『ゴオオ
ン……!』

連合軍の本陣から、激しい銅鑼の音が聞こえてきました。

「主、命令図ですぞ」

「ええ。では、軽く挑発しに行きますかね」

in 氾水関

「華雄將軍。連合の先陣が進軍を開始しました」

「ああ。しかし小勢のようだな。……将は誰だ？」

「斥候の報告では、平原の相、劉備。及びに天の御遣い、梅沢直斗と名乗るものだそうです」

「天の御遣いだと……？しかし、劉備……聞いたことの無い名だ」

「最近売り出し中の人間だそうです、百戦錬磨たる我らの敵では無いかと」

「そうか。ならば鎧袖一触、敵の先陣を殲滅し、連合軍の総大将に目にももの見せてやるうではないか」

「了解です！」

「全軍、出撃準備！先陣の劉備なるものを粉碎し、敵陣中央にそびえ立つ袁家の牙門旗を墮とすぞ！」

「はっ！」

「ちょ……待ちいや華雄！賈馱つちの命令は汜水関の死守やで！？出撃してどないすんねん！」

「ふん……。亀のように甲羅に縮こまるのは性に合わん」

「やからって、総大将の命令を無視して突っ走ってええんか！……そりゃ料簡が違いすぎるやろ」

「違わん。現場の判断だ。……それに敵を殲滅すれば軍規など何ほどのものでもない。……何よりな、張遼」

「なんや？」

「戦に逸る兵の気持ちを抑えることなどできん。その戦意こそ、我が軍の力となっているのだからな」

「……どうしても出撃するんか？」

「くだい。貴様は後生大事に命令を守り、功名の場を逃せば良い。私は私で好きにやる」

「……分かった。ならウチは虎牢関に退く。それでもええな？」

「勝手にしろ」

そう言つて華雄は出撃していった。

「……猪、ここに極まれりやな。戦は戦意だけでやるもんやない。現実を見んあんたには、多分明日はこーへんやる。さらば華雄。先にあの世でまっとき。ウチもいつかそつちに行くから。……誰かおるか！」

「はっ！」

「ウチの部隊は虎牢関に退く。……残念やが汜水関で連合軍を止められんようになったからな」

「華雄部隊の暴走、ですか……？」

「せや。……ただし、一方的に華雄を責め立てることはできん。……暴走を止められんかったウチにも責任はあるからな。ただ、その責任を果たすために華雄と共に戦うよりも、ウチは虎牢関に退き、董卓を守ることでの責を全うしたいと思う。……みんな、ついてきてくれるか？」

「無論です。我ら張遼隊、どこへなりとも將軍にお供致します」

「……あながとな。ほんならすぐに退こか！部隊の移動準備、ちやつちやと済ますで！」

「はっ！」

i n 汜水関前

「んむ？主、愛紗。汜水関の方で何か動きがあるようだが」

「動き？……ふむ。まさか華雄が突出してくると言うのだろうか？」

「そうならば楽なんですけどね……」

「砦という絶対的に有利な条件を棄てて突出してくるなど、あり得るわけが」

『ギイ………』

「……開門……したな」

「旗は、華の一字。華雄ですね……」

「星、ご主人様……」

「なんですか？」

「我らが頭を捻って考えた作戦が、こつも無駄になると、空しくは
ありませんか？」

「贅沢なことを言うな。敵が突出してくれるなら、それこそ大助か
りでは無いか」

「まあ、愛紗の言うことも分からなくは無いですけど」

「ふつ、まあ考えるだけ無駄か。……では子龍殿、それに「ご主人様、
背中任せます」

「我が背中も同様だ、雲長殿……では参ろうか」

「ふふつ、頑張ってくれたら、何か個人的に褒美をとらせましょう
かね？」

『ピキーン……』

愛紗と星の目の色が変わりました。……この二人って、こんなに現金な子でしたっけ？

「褒美……ご主人様と……」

「主に……」

何故か私に何かをさせようとしてますが。……まあ良いですけど。

「よし！……聞け！勇敢な戦士たちよ！」

「いよいよ戦いの鐘が鳴る！この戦いこそ、苦しむ者を救う為の、義の戦い！」

「恐れるな！勇気を示せ！皆の心にある想い、皆が持つ力……その全てを振り絞り、勝利の栄光を勝ち取るために！」

「我らに勝利を！」

『勝利を！』

「我らに栄光を！」

『栄光を！』

「全軍拔刀！我、天の御遣いの名にかけて、この戦いに必ずや勝利する！」

『ジャキイーン！！』

「位置につけ！」

「皆の命、私が預かりましょう！」

私は腰元の贄殿遮那を天高く掲げて叫びました。

華雄 side

「敵の先陣部隊が突貫してきます！」

「うむ！全軍抜刀！猪の鼻っ面に拳骨を叩き込んでやるぞ！」

『応っ！！』

「怯んだところを更に追い詰め、一気に殲滅する！我らの恐ろしさ
を存分に思い知らせてやれ！」

『応っ！！』

「全軍、突撃せよ！」

汜水関攻略戦！その？（後書き）

長くなりそうだったので、二回に分けました。

明日か明後日にはその？も投稿しますf ^ | ^ ;

汜水関攻略戦！その？（前書き）

汜水関攻略戦の続きです！

汜水関攻略戦！その？

「来ましたよ！……愛紗！」

「はいっ！全軍魚鱗の陣に移行！敵の突撃に真っ正面からぶち当たり、その勢いをもって敵を後退させる！」

「その後はすぐに後退します！時機を見失わず、合図を聞き漏らさずに！一瞬の油断が命取りになることを忘れてはいけません！」

「我らの旗に付き従えば勝利は間違いなし！勇を奮え！名を惜しめ！勝利の栄光を掴むために！」

「全軍……突撃いいいい　　っ！！」

『うおおおおお　　っ！！』

『おらあああ！』

鉄と鉄がぶつかり合う鋭い音と共に、肉体がぶつかり合う鈍い音が、戦場に不協和音を奏でます。

嗅覚には火花の匂いが染み渡り、死の恐怖に面した男たちの汗の匂いが、兵士たちの絶望を更に加速させていきます。

「死ねええええええ！」

死への恐怖を紛らわせるように、大声で喚き散らす若き兵士たち。

「皆、離れるな！三人一組になって敵の兵に当たるんだ！」

「友を守れ！守れば友がお前を守ってくれる！そう信じて突き進め！」

「このまま一気に敵を押し返すぞ！」

「ほお。なかなか頑強に抵抗しているな。……良い将が率いていると見える」

「は。しかし兵たちの動きはぎこちなく、このまま押し切ることは可能かと」

「当然だ。こんなところで時間を浪費してたまるか。……さつさと突き崩すぞ！」

「はっ！では前線の兵をまとめ、突貫します！」

「よし。そのまま一気に連合軍の本陣を突くぞ！」

「応っ！！」

「敵が後退する……？いや、違うな。距離をとって突貫するのか」

「ならば傾合いは良し！敵の突貫直前で退きましよう、ご主人様！」

「分かりました。……皆さん、秩序を守りつつ、作戦通りに後退します！我が旗に続け！」

『応っ！！』

「華雄將軍！敵の前線が我が軍の突貫を受け、敗走を始めているようです！今が好機かと！」

「よし！鋒矢の陣を敷け！このまま一気に連合軍の本陣まで押し進む！」

『応っ！！』

「桃香様ー！作戦が成功しましたよ！」

「華雄將軍は、鋒矢の陣を敷き、私たちを突破して袁紹さんの居る本陣に迫ろうとしています！」

「このまま突っ込んで来ますよお。早く兵をまとめて道を開けないとおー！」

「そ、そうだね！」

「雛里ちゃんも桃香様も落ち着いて下さい。先ずはご主人様たちと合流しないと」

「あわわ……そうだったね……」

「合流後、作戦通りに動きましょう。……鈴々ちゃん、撤退の援護、お願いしますね？」

「任せろなのだ！」

「では、桃香様は私たちと一緒に合流後の兵の指揮をお願いします」

「うん、任せて」

「ふむ……良い感じで食いついて来ますね。……付かず離れずで」

「しかしこつも張り付かれています、要らぬ損害が増えるばかりです。……逆撃しますか？」

「やめておきましょう。今は本陣に合流するのが先決です。相手にせず、一気に走り抜けましょう」

「御意。……皆のもの！あと少しで本陣と合流できる。気を抜くな！」

『応っ！！』

「よし、良いぞ。このまま敵の殿をギリギリと削っていけ。混乱状態のまま、先陣の指揮系統を粉碎し、一気に連合軍の本陣へと突入する！」

「しかし連合軍の先陣はもろすぎですな。あれで売り出し中とは笑わせる」

「それだけ我らに力があるということだ。……このまま奴らを飲み干すぞ。全軍に攻撃の手を緩めるなと厳命しておけ！」

「はっ！」

「来た！砂塵が見える！お兄ちゃんたちが帰ってきたのだ！誰か！」

「はっ！」

「桃香お姉ちゃんに合流の伝令を頼むのだ！」

「御意！」

「よし、皆、鈴々についてくるのだ！これからお兄ちゃんたちを助けにいくのだ！」

「応っ！！！」

「弓兵の皆は、ひたすら矢を放つのだ！歩兵の皆は鈴々と一緒に突撃なのだ！」

『応っ！！！』

「退却してくるお兄ちゃんたちをやりすごしたあと、全力で華雄の軍にぶつかるとのだ！そのあとすぐに後ろに向かって前進なのだ！分かったかー？」

『応っ！！』

「なら行くよー！突撃、粉碎、勝利なのだー！」

「愛紗、主。前方に砂塵が見える。鈴々の援軍が来てくれたようですよぞ」

「よし、ならばこのまま一気に駆け抜けて桃香様たちに合流しましょう」

「了解しました。では全軍、援軍の後ろに駆け抜けます。その後桃香たちの居る本陣に合流です」

『応っ！！』

「ここが正念場だ。気張れよ、勇者たち！」

「華雄將軍。敵前方に砂塵を確認！どうやら敵の援軍のようです！」

「ふん！吹けば飛ぶような寡勢に援軍が来たところで、何ほどのものでもない。同じように粉碎してしまえっ！」

「はっ！」

「ちよっ……早いぞ鈴々！」

「いえ、速度を上げて駆け抜けるならドンピシャです！皆、更に速く駆けてください！あと少し、頑張りますよ！」

『御意！』

『ビュッビュッ……ビュビュビュッ！』

前方から矢が私たちの後方へ飛んでいきます。

「ぐっ…もう少し加減して欲しいぞ、鈴々め」

「確かにな。だがさすがというか意外というか。戦場の機微を良く心得ているな、鈴々は」

「当然だ。鈴々は天性の戦上手だからな」

「ふっ、なんとというか、姉バカにもほどがあるな」

「……放っておけ」

「ふふっ……。気持ちは分かりますよ。……さて、そろそろ合流です。二人とも、無駄話をして不覚を取ったりはしないで下さいね？」

『御意!』

「御遣い様、関羽様、趙雲様！後方に射撃命中！敵の速度が落ちていきます！」

「よし、ならばこの隙に一気に引き離すぞ！」

「各員駆け足！あと少し、気合いで乗り切れ！」

『応っ！！』

「くっ……吹けば飛ぶような寡勢相手に、何を手こずっているのだ！我が軍の質はそこまで落ちているのか！」

「申し訳ございません！敵の抵抗が思ったよりも激しく、また敵援軍の射撃により、前線の兵士が慎重になっておりまして……」

「言い訳などいらん！さっさと突破しろ！」

「は、はっ……」

「お兄ちゃん！」

「鈴々！良い援護でしたね。助かりました」

「えへへ、こんな当然なのだ！えっへん！」

「じゃ。あんまり調子に乗るなよ？」

「はい」

「っと、桃香は……後ろですね。全軍の指揮をやってくれるよう
です」

「なるほど。ならばすぐに合流しましょう」

「そうですね。鈴々、殿を頼めますか？」

「合点なのだ！」

「あれえ〜……?」

「どうしたんだよ斗詩い。変な声出して」

「……えっとね、何だか前線がすごく混乱しているような気がするの」

「前線が?……んーどれどれ?」

「砂塵の舞いかたが尋常じゃない気がする?」

「んー……ありゃ?マジだ!めちゃくちや砂塵が舞ってるなあ」

「先陣は劉備さんだっけ?押されてるのかな?」

「弱小だからなー、劉備ってお姉ちゃんのこと。……こりゃこっちにまで流れてくるな」

「だよな？……私、各部署へ行つて戦闘準備の指示を出しておくから、文ちゃんは姫への報告お願いね？」

「姫に報告う〜？そんなのしなくても、あたいたちでチャチャツとやっちゃったら良いじゃん」

「またそんなこと言うて〜。のけ者にされたつてあとで怒られるよお？」

「大丈夫大丈夫。どうせ戦況を姫に伝えたって、ちゃんとした指示なんて来ないって」

「まあ……それはそうかもだけどお」

「雄々しく、勇ましく、華麗に反撃なさい。……って言われるだけなんだから、報告したつて無駄無駄」

「もお〜。仕方ないなあ〜。じゃあ姫には私が伝えておくから、文ちゃんは戦闘準備の指示を出しておいてね？」

「ほいよ〜」

「ご主人様、こつちこつち！」

「桃香、朱里、雛里。本陣の指揮、ご苦労さまでした」

「ご主人様もお疲れ〜」

「お疲れさまです」

「ですう…」

「状況はどうなってるの？」

「殿に食らいついてる華雄の部隊をうまくいなしながら後退してますよ。あとは諸侯を上手く巻き込めるか……」

「今のところ、殆どの諸侯の陣営で本陣救援の動きがありますが、曹操さん、孫策さんの陣だけは未だに動きを見せてませんね」

「私たちの思惑に気付き、静観しているか……」

「思惑に気付いた上で、最も効果的な参戦時機を計っているか……です
すね」

「恐らく」

「どちらにせよ、袁紹を巻き込めば向こうの思惑も分かりますよ」

「そうだね。じゃあそろそろ私たちも後退を開始しよ！」

「ええ。ちょうど愛紗たちもかなり近くまで来ましたよ」

「それじゃ、行きますかー！」

「はい！」

「星！桃香様の牙門旗だ。いつの間にかご主人様も合流している！」

「ああ、こちらでも確認した。あとは袁紹の本陣に向かって殴り込むだけだ！」

「みんなー、あと少しだぞー！頑張るのだ！」

『応っ！！』

「おいおいおいおい……！もう目の前にまで迫ってきてるじゃんか！劉備のおねーちゃんは何やってんだよ！」

「え、袁紹軍はすぐに臨戦態勢を！敵の本陣乱入を防ぐからね！」

『応っ！！』

「斗詩い、あたいたちも出るぞ！」

「うんっ」

「くっ、結局先陣を粉碎することは出来なかったか。……まあ良い。敵の本陣は目の前だ。このまま一気に突入してくれよう。……誰かある!」

「はっ!」

「敵を押し込み押し込み、そのまま本陣に突入したあとは連合軍の牙門旗に向かう!先陣の奴らに構うな!狙うは大将の頸のみだ!」

「はっ!」

「この戦、拙速こそが重要だと思え!……皆の命、この私に捧げよ!」

『おおおおおお』

『っ!~!』

「行くぞ!全軍突撃いいい

っ!~!」

』しゅおおおお

っ！！』

「きた

っ！！斗詩い！背中は任せるからな！」

「うん！文ちゃん、気をつけて！」

「おうよっ！……勇敢なる戦士たちよ！成り上がりの董卓軍なんざ、名門の袁家に勝てるはずがねえ！みんな、気張っていくぜー！」

』おおおおおお

っ！！』

「良い返事だ！んじゃ全軍突撃いいい

っ！！」

「華琳さま。袁紹の本陣に華雄が乱入。両者がつぶり四つに組んで乱戦を始めました。……呆れて開いた口が塞がりません」

「全くね。……諸侯の動きは？」

「慌てて本陣の救援に向かっていているようですが……孫策は逆方向に向かって動いています」

「空き家を掠めるか。……この状況ではそれが最善の策のようね」

「どうします？我らも汜水関に向かいますか？」

「ふむ……。秋蘭、あなたの意見は？」

「桂花と同意見ですな。乱戦に巻き込まれるほど、馬鹿らしいこと
はないでしょう」

「……春蘭の意見は？」

「はあ……」

「あら、どうかしたの？珍しく躊躇して」

「いえ。……戦略的に見て秋蘭や桂花の意見が正しいとは思って
すが、ただ……」

「ただ？」

「天下の風評を得るには、逆に本陣へ救援に向かい、華雄を蹴散ら
した方が良いのではと思うのです……」

「……空き家を落としたところで、何の自慢にもならない、か」

「はっ。それよりも友軍の苦境を救う方が、世間への聞こえも良い

でしょう。義軍としての風評を得られれば、今後、何かと役に立つかなあと……」

「……」

「な、何ですか華琳様。ああ……また私はバカなことを言ってしまったのでしょうか……」

「ふふっ……姉者。華琳様は驚いていらっしやるのだよ」

「私もかなりビックリしてるけどね」

「二人の言う通り。……見直したわよ、春蘭」

「は、はい……」

「ふふっ……じゃあ春蘭の意見を採用しましょう。秋蘭、桂花。すぐに行動を起こしなさい」

「御意」

「はっ！」

「春蘭は先陣を切って本陣へと乱入し、敵の大將を討ち取りなさい」

「はっ！お任せを！」

「ただし。直斗の思惑に乗せられ、必要以上に戦を長引かせないこと。華雄を討ち取ったあとは素早く兵を退きなさい」

「それは了解しましたが……梅沢直斗の思惑、とはどういったもので？」

「そんなことも分からないの？……兵の損失を抑えるために、諸侯を巻き込むつもりなのよ」

「その通りよ。……ふふっ、流石は直斗よね 一刀とは比べ物にならないわね」

「……酷いなあ」

「なっ！？何よ！アンタ、居たの！？汚らわしい！私に近づかないでよー！」

「全く、居るのなら少しは発言しなさい。貴方、この連合に来てから存在感が全く無いわよ？」

「北郷？お前、居たのか？気づいていたか、秋蘭？」

「いや、存在感が無すぎたな……」

「……泣いてもいいっすかね？」

「ホントにアンタ梅沢直斗とかわりなさいよ！同じ男でもあっちの方が何万倍も良いわよ！」

「……はぁ……」

「ふむ……曹操は実より名を取ったか。少し意外だったな」

「良いんじゃない？そのおかげで私たちは勞せずして実を手に入れられるんだから。それよりも気になるのが……」

「梅沢直斗……か？」

「そうね。冥琳がこの前言ってたから少し様子を伺ってたんだけど、なかなかのやり手みたいね」

「だが、策は軍師の諸葛亮や鳳統のものだろうか？」

「うーん……私の勘だと、違うような気がするのよねえ……」

「……またそれか」

「あら、私の勘は当たるわよ？冥琳も知ってるでしょ？」

「まあな。だがもし本当にそうならば、梅沢直斗……侮れん奴だ」

「案外仲良く出来たりして？」

「だと良いがな」

「よし、上手くいきましたね！ではここから反撃に出ます！準備は良いですか？」

「勿論なのだー！鈴々、待ちくたびれちゃった」

「ふふっ、私もそろそろ一暴れしたい頃ですな」

「全く、二人とも落ち着きが無さすぎるぞ…。私はいつでも大丈夫です！」

「では、戦場の混乱に紛れ、敵を蹴散らして道を作り、愛紗。あなたに一騎討ちで華雄を討ち取って貰えますね？」

「はい！必ずやご期待に答えて見せます！」

「いいなー愛紗…」

「では、星は華雄隊の右翼、鈴々は左翼に当たってください」

「御意」

「任せるのだー！」

「では、全軍、今までの鬱憤を晴らすべく、華雄軍を存分に蹴散らせ！」

『おおおおおお つー！』

「全軍、進めええ つー！」

『うおおおお』

っ！！』

贄殿遮那を天高く掲げ、突撃命令を出します。

「敵は動きが単調だ！よく見れば楽にかわせる！」

「我が贄殿遮那の鎧となれ！はああっ！！秘剣・燕返し！！！」

『ビュンビュンビュンっ！！』

「ぐああっ！！！」

「かふっ……！！！」

私の燕返しで鮮血が戦場に飛び散ります。

「さあ、劉備軍の戦士たちよ、私に続け！」

『おおおおおおっ！！！！』

「ええい！一度シツポを巻いて逃げ出した部隊が、調子に乗ってじやれついてくる！邪魔な！」

『ザッ……』

「お前が華雄か？」

「なっ！？貴様は……！？」

「我が名は関羽！劉備軍の一将だ！」

「ちっ！一度逃げ出した部隊のくせに凶に乗るなあ　　っ！！」

『ブウンっ！！』

華雄の戦斧が愛紗に向かって降り下ろされる。

「そんな攻撃、当たるものか！はぁあっ！！」

『ビュっ！！ビュっ！！』

愛紗は華雄の攻撃をいとも簡単に避けると、青龍偃月刀で二発の突きを放つ。

「くっ、……ぐあっ！」

一発目は辛うじて避けた華雄だったが、二発目には反応しきれずに身体をかする。

「これで止めだっ！！」

「くっ、……させん！」

『ブウンっ！！』

愛紗は力強く偃月刀でなぎはらう。華雄はそれを戦斧の斬撃で払おうとする……が、

『ギーンっ！……ズシュッ……！』

「かはっ……！」

先ほどの怪我で弱った華雄には愛紗の一撃を止めることはできず、戦斧ごと偃月刀で吹き飛ばされてしまった。

「敵将華雄、劉備軍が一の家臣、関雲長が討ち取ったりいっ！」

そこからの董卓軍の崩れようは凄く、その後一刻足らずで汜水関を落とした連合軍でした。

「はあ、はあ……ぐっ……！くそ……、関羽めっ……！」

「あら、これは董卓軍が将の華雄殿じゃないかしら？」

「なっ！お前は、曹操！」

「劉備軍は甘いから関羽も貴女に止めをささなかつたけれど、私は簡単には逃がさないわよ？春蘭」

「はっ！」

『ジャキ……』

華雄の首筋に春蘭の七星牙狼が添えられる。

「降伏しなさい」

「くっ……分かった。だが私は董卓様に刃は向けられんぞ」

「構わないわ。貴女に働いて貰うのはこの戦いが終わった後だもの」

「そうか」

「ええ。よろしく、華雄」

「よろしく頼む」

汜水関の戦いの後にこんなことがあったのは、曹操軍しか知らなかった

汜水関攻略戦！その？（後書き）

華雄が曹操軍に入りました（笑）

曹操軍に猪が二人目：（。。；）

虎牢関攻略戦！（前書き）

虎牢関攻城戦です。

今回に親衛隊の隠密部隊の娘がでます！

虎牢関攻略戦！

汜水関を無事に攻略した私たち反董卓連合は、その勢いそのまま進軍していきました。

途中幾つもの関所が連合軍の行く手を阻もうとしましたが、汜水関を攻略した我らにとっては無いに等しい抵抗であり、難なく攻略したのでした。

そしていよいよ我々連合軍は、第二の難関であり最大最強の関所、難攻不落、絶対無敵、七転八倒こと虎牢関に挑もうとしている…。

「さて、汜水関に居たはずの張遼がいなかったということは、恐らく虎牢関で待ち構えているはずでしょうね」

「それに加え、虎牢関には飛將軍と名高い呂布さんもいますし、その軍師の陳宮さんもいます」

「呂布……その武、三國無双とまで謳われているあの呂布か！」

「ほえ〜。じゃあ次は、そんなに強い人たちとの戦いになるんだ…。」

「そんなんですよね…ご主人様、何か策はありますか？」

「私、ですか？そうですね…。策ではないですが、狙いならあります」

「ほう…。して主、その狙いとは？」

「……張遼及び呂布の二名の捕獲」

「なっ！？」

「そ、そんなの無茶ですよ！」

「朱里の言う通りです！いくら私や鈴々、星といえど、呂布と張遼の二名を捕獲するなど……」

「いえいえ、捕獲するのは私がやります」

『はいっ！っ。』

「何をバカなことを……。ダメですご主人様、そんな無茶はさせません！」

「そうなのだ！いくらお兄ちゃんでも無謀すぎなのだ！」

「いくら何でもそれは無いですが、主……」

「では、呂布と張遼の二名ともを相手に勝てる自信のある者はいますか？」

「そ、それは……。しかし、無理に二人ともを捕獲する必要は……」

「確かにそうかもしれません。が、二人が居た方が董卓を助けやすく、今後の乱世を正すためには大きな力になってくれます。勿論私は負けないので、誰一人失わず勝てます」

「ですが……」

愛紗はどうしても納得がいかない様子。

「……では、愛紗、鈴々、星。貴女方三人で呂布を捕獲してください。私が張遼をやります」

「それは構いませんが、呂布に三人より張遼と呂布に二人ずつの方が良いのでは？」

「星、けっして呂布を侮ってはいけません。呂布はたった一人で黄巾党3万人を討った猛将。例え貴女方三人でも確実に勝てるとは言えません。むしろ勝てる確率の方が低いくらいです」

「そ、そんなに……」

「張遼は私が確実に捕らえて来ます。少なくとも貴女たちが呂布を足止めさえすれば、私も駆けつけます。勿論三人で討ち取ってくださいをお願いしますが」

「……分かりました。呂布はきつと討ち取って参ります」

「なのだ！」

「我らにお任せを」

三人は決意を込めた眼差しで私を見ました。

「お願いします。が、無茶はダメですよ？」

「ご主人様こそ張遼に負けて我らに助けられるようなことにならないようにして下さいね？」

「あら？愛紗たちよりは強いつもりですよ？一応私は貴女方の危機に駆けつける王子様なので」

軽くウインクをして、笑顔で答えます。

「む…。／＼と、とにかく無茶はなさらないように！」

「そ、そうなのだ！／＼／」

「う、うむ、そうですぞ！／＼／」

「ふふっ、はいはい。では、大方の策を説明しましょうか」

「ご主人様？さっきは策は思い付いてないみたいなお雰囲気でしたけど…」

「ああ、それなら今話ながら考えてました」

『（相変わらず規格外だなあ…）』

「で、その策って何なの？」

「はい、まずは虎牢関前に進軍、続いて虎牢関の門を私が壊します
（笑）で」

「ちょっと待って下さいね？ご主人様、簡単に流しましたが、門を壊すって…」

「文字通りの破壊ですよ？力での。まあ気を使って強化した技ですが…」

「……もうつつこみません…」

「では続きを。で、壊した門からは敵が沸くように出てきます。そこを先ずは弓で猛攻。敵の頭数を減らします。後退しながら弓を放ち、敵が警戒を強めたところで恐らく袁家のバカたちが突っ込んで行くでしょう。勿論援護はしません。で、そうなれば勿論」

「呂布さんと張遼さんが出てきますね。二人が率いた董卓軍は徐々に勢いを取り戻して押し返してくる。そこで呂布さんに愛紗さんたち、張遼さんにご主人様が当たるんですね？」

「朱里、正解です。そこで董卓軍の最強の将を二人討ち取れば敵の士気は大きく下がる。もちろんそうなれば後は勢いと力だけでも攻城は可能です」

「なるほど。今回の策は我らが大きな鍵を握っている訳ですか？」

「はい、その通り。呂布と張遼を捕獲しても、連合軍の本陣には連絡しないこと。討ち取ったことだけを伝えるように」

『御意！』

「では皆、がんばりましょうー！」

『応っ！ー！』

「……来る」

「ん？来るて……連合軍がか？まさか。汜水関を抜くにしてもまだ早いやろ？」

「……（フルフル）……来る」

「ふむ……「こつこつ」時の恋の勳は当たるからなあ。……誰かおるか

「！」

「はっ！」

「一応戦闘準備しとけってみんなに言つといてくれや！」

「はっ！了解であります！すぐに準備を整えさせます！」

「おう、頼むで！」

「よし、では作戦通り、私が門を開きます！皆は門から離れて弓の用意を！」

『はっ』

「行きますよ……」

『チャキ……』

すらりと腰元からボロボロの日本刀『鉄碎牙』を抜きます。

「ご主人様？そんなボロボロの刀でいったい何を……？」

「まあ見ていてください、はあっ！」

『ボウっ……！』

鉄砕牙に気を流し込むと、見事な大剣に変化しました。

「なっ!?!」

「風の……傷っ!?!」

『ゴウッ………ドガァッ!?!』

「な、なんや今の！？何か門の方にとんできおった！」

「張遼將軍！い、今の敵の攻撃により、も、門が破壊されました！」

「な、なんやとお！？あかん！今すぐ出陣や！門から敵を中に入れんな！」

「はっ！」

「ご主人様！敵が門から……！！」

「分かりました。では皆の者！矢を放て！」

『おおおお』

『っ！！』

『ジュジュ、ジュジュジュジュ……！』

劉備軍の陣営からは数えきれないほどの矢が敵門の前に飛んで行きます。

「そのまま後退！しばらくしたら矢を止めよ！」

『御意！』

「くそ、なんやねん……！こっちの動きが全部読まれとる……！劉備軍の軍師はどんだけ切れ者やねん！」

「將軍！矢が止まりましたが、その後ろから袁紹軍、袁術軍が突っ込んで来ます！」

「ちっ！あいつら弱いくせに数だけ多くて鬱陶しいねん！恋、行くで！」

「……………（コクッ）」

「ええか、絶対敵の中に入れんなよ！袁紹軍や袁術軍は数だけの雑魚や！練度では負けとらん、落ち着いて押し返し！」

『はっ！』

「作戦通りですな！主よ、そろそろ私たちも出撃しますぞ。」健闘を！

「そちらもです！」

私は張遼の牙門旗に向かいます。

.....

走りだして三分ほど。
張遼を発見しました。

「おらぁ！うちはそう簡単には負けんで！」

張遼が叫んでいますね。

「なら、私が相手になりましようか！」

「ん、誰や姉ちゃん？何処の將軍や？」

「私は梅沢直斗。劉備軍の主。あと、男ですから！」

「劉備軍の主か！んで男な…って、はあ！？嘘つけや！」

「ホントですよ！」

「ま、まあそんなこと言うてる場合ちゃうわ…。あんたんとこの軍師、なかなかやるやん。うちの動きが全部読まれとるみたいやっ
たわ」

「ああ。あれは私ですよ？」

「マジか？……ああなるほど、アンタが今噂の天の御遣い様かいな？へえ…。なら、腕も立つんやろ？ちよっくら相手になって貰うわ
！」

「では武器は……綱金暗器にしますか……。六つの姿を持つ我が秘宝。しかとご覧あれ！」

「六つの姿？なんやおもろそうやな！うちの飛竜偃月刀とどっちが強いか勝負や！」

張遼が叫ぶと同時に突っ込んで来て私に一閃。私はそれを綱金暗器「牙」で防ぎます。

「なんや、変な形の薙刀やな？」

「では次に、弐之型『龍』！」

カキンと音が鳴って鎖鎌に変わります。

「おお！ホンマに姿が変わりおったわ！」

ブンつと鎖鎌を振るって張遼に向かわせませんが簡単にかわされ、周りの董卓軍を切り裂きます。

「うっわぁ…なんかえらい鋭い刃やな…そんなんで斬られたらうちの身体ズタズタやん…」

「なら降参しますか？貴女ほどの人なら欲しいんですけど…」

「アホ抜かせや！ま、どうしてももうちが欲しかったらうちを倒してみいよ。そしたら仲間にもなったるわ！」

「ではそうしましょうか。参之型『極』大鉄い！」

「なんじゃそりゃ！そんなんで挟まれたら真つ二つやんか！って、わわっ！…！」

大鉄で攻撃したのですが、上手く飛竜偃月刀を操作して凌がれました。

「危なあ……………」

「まだまだ変わりますよ？四之型『二日月』武羽冥乱！はっ！」

武羽冥乱を投げつけました。

「ふん、そんな闇雲に投げつけたかて当たらんわ！ほれ」

ひょいっとかわされ武羽冥乱は飛んでいってしまいました。

張遼の後ろでは切り裂かれて悲鳴をあげる兵が続出していますが。

「ホンマに凄い切れ味やで…。ま、当たらんかったら意味ないけどなあ。さて、武器も無くなったけどどうする？腰のひよる細い刀で戦うか？」

「……いえ、その必要はありませんよ」

「なんやて？……なっ！？ぐあっ！！」

私の方に気を取られていた張遼は武羽冥乱型の綱金暗器が戻ってきたことに気付くのが遅れ、反応して偃月刀で防御はしたが吹き飛ばされて壁に叩きつけられました。

そして私の手には壱之型に戻した綱金暗器。

『チャキ……』

倒れた張遼の首筋に刃を添えて…

「私の勝ちです、これで貴女は私の物です」

ニツコリと笑って言いました。

「……完敗やな……。アンタめちやくちや強いやん。約束は守るな。うちの名は張遼、字は文遠。真名は霞や。よろしくな、直斗」

「はい。えと…梨紗りしや！」

私は親衛隊にして隠密部隊の女の子を呼びます。すると

「はい！直斗さま、お呼びですか？」

どこからともなく薄着の忍者服を着た少女が現れました。

「ええ。この張遼を本陣へ連れて行ってください。もう彼女は仲間ですから丁重に。私は呂布を倒しに行ってきます」

「分かりました！では張遼様、こちらへついてきて下さいね？」

「ちょ、いくらアンタが強くても恋……呂布には敵わへんって！」

「大丈夫です張遼様。我らが主は無敵。うちの將軍全員がかりでい
つも修行して勝ってるんですよ？」

「ま、まじ……？」

「はい それにあの美しい顔立ちと身体……ああ、愛されたいなあ
……」

「こちらから、聞こえていますよ、梨紗！とにかく大丈夫ですから、霞
は劉備軍本陣で休んでいてください」

「ん……。分かった。まあ無茶はすんなや？」

「はい (ニッコリ)」

「……アンタホンマに男かいな…… (ボソッ) / / /」

「直斗さまあゝ 帰ってきたらなでなでしてくださいね？」

「はいはい、では後ほど」

『ダッ………！』

全力疾走で呂布の牙門旗に向かいます。

「うわあ、速いなあ…もう見えへんわ」

「さすが直斗さま…素敵ですう」

「アンタ、親衛隊やつけ？直斗のことめっちゃ好きやねんな」

「はい！直斗さま萌えです！直斗さまの為なら死ねます！…まあ直斗さまは私を死なせたりはしないと云ってくれますけど」

「ベタ惚れやん……。まあ確かに綺麗やし強いし……ええかもな……」

「………好敵手っ！？」

さりげなくこんなところでも火花が散っていました。

「はあ、はあ……くそ、流石は三國無双の飛將軍呂布か……。三人がかりでも全く攻撃が当たらん……！」

「はあ、はあ、お兄ちゃんの言う通り、三人でも厳しいのだ……」

「だが、ここでやられる訳にはいかん！せめて主が来るまでは……」

「……無駄。お前たち強かった。でも恋、もっと強い。……今からは本気でいく」

「なっ!?今までは本気ですら無かっただど!?くそ……こっぴなつたら星、鈴々!三人で同時に攻撃するぞ!」

「分かったのだ!」

「承知!」

「……来い」

呂布は低く態勢をとると、全く隙が無くなった。

「はあ　　っ!」

「てやあ　　っ!」

「はいっはいっはいっはい　　っ!」

3方向からの斬撃が呂布を襲う……が、

「……………遅い」

『ギーン！』

「なっ！？」

「にゃ！？」

「なんだと！？」

全てを一度の斬撃で吹き飛ばして無傷で立ち誇る呂布。

「……………今度は……………こっちの番」

『フッ……………』

「なっ！？消えた！？」

「嘘っ！？いないのだ！？」

「何処だ……！？……はっ！愛紗、鈴々！後ろだ！」

「にゃ！にゃ　　っ！！！」

「鈴々！」

鈴々は咄嗟に持っていた槍で防御をしたので命は無事だが気を失ってしまった。

「くっ……！！」

愛紗が偃月刀を振るおとした時にはもう呂布はその場にいなかった。

「……………次はお前」

「ぐっ、させるか！」

呂布は星の横に現れた。
星はなんとか気付いて槍を向ける。が、

「……………当たらない」

「しまっ　かはっ……………!!」

「星!!くそ……………ぐっ……………」

鳩尾に拳を入れられ吹き飛ばす。愛紗がなんとか受け止める。しかし
呂布は待つてはくれない……………

「……………とどめ」

呂布が大きく振りかぶった。

その時

『ヒュン　キーン!』

一筋の輝く光。

金色の道が呂布の武器に当たって落ちる。
その正体は…

「……………！？……………何者？」

「劉備軍が当主。天の御遣いにして武神。姓は梅沢、名は直斗。仲間
の危機を救いにいざ参らん！」

私が綱金暗器五之型『暗』魔弓を呂布の武器に当てたのでした。

「ご主人様！」

「……………天の御遣い……………！」

「いざ尋常に勝負！」

『すらり……………チャキ……………』

鞘から鉄碎牙を抜き構える。

「……………そんな刀で戦うの？……………恋をなめない方がいい……………」

「忠告どうも。しかし、そちらこそ私をなめない方がいいですよ？
はぁぁー！ー！」

『ボウっ！ー！』

「……剣が……変わった？」

「これは妖刀『鉄砕牙』といい、気の力で真の姿を現すもの。大妖
怪の牙から造られていますから、そう簡単に折れるとは思わないこ
とです……よー！」

一気に呂布に詰め寄り鉄砕牙で斬り上げます。

「……！ー！」

なんとかかわされてしまい、逆に一閃されます。

「はぁっ！ー！ー！」

『キィン！ー！ー！』

かん高い金属音が鳴り響き、何度もぶつかり合います。

「…………お前強い…………多分恋と同じかそれ以上…」

「呂布こそなかなかですね。でも…そろそろ終わらせます！」

「…恋は…………負けられない！」

『ブウンっ!!』

二人の斬撃がお互いに向かって行きます。そして

「…………恋の…………負け」

私の鉄砕牙は呂布の顔のすぐ前で、呂布の武器は私から50cmほど離れたところで停止していました。

「…………殺す」

呂布がそう言ったその時、

「り、呂布殿お　　っ!！」

敵方から小さな女の子が走って来ました。

「……ちんきゅー」

「呂布殿！大丈夫なのですか!?!お前！呂布殿から離れるです!！」

陳宮と呼ばれた少女は私に叫びました。

「……ちんきゅ、やめる」

「しかし呂布殿!！」

「大丈夫ですよ、陳宮殿」

「えっ!?!」

私は呂布の前から武器を引きます。

「……どうして？」

「私はただ、貴女方に協力して貰うためにこの連合に参加したので
すから」

「ど、どついつい」とです!？」

「董卓は悪政などしていない　そんなことは分かっています」

「なっ!?!?なら何故連合に!」

「董卓を助けるには連合に加わり洛陽に行き、こっそり…….という
のが一番確実ですから」

「……月と詠は助かる?」

「恋殿!？」

「董卓と賈馱ですか?無論助けます。絶対に。そのために呂布と陳

宮、張遼を味方にしたいのです」

「霞殿もそちらにいますのですか!?!」

「ええ、先ほど一騎討ちで勝ち、仲間になってくれました」

「……………恋は…信じてもいい」

「むむ…恋殿がそう言うのならば…。お前、天の御遣いなのですか?陳宮と呂布殿はこれよりお前の陣営に加わってやるです!感謝するですぞ!」

「はい、二人ともありがとう(ニコッ)」

「はづっ!?!?!」

「……………可愛い!?!」

「では改めて、梅沢直斗です。仲間からはご主人様と呼ばれてますが、好きに呼んでもらって構いません」

「……恋」

「真名を許してくれるのですか？」

「……（コクッ）……ご主人様、よろしく」

「ええ、よろしく、恋」

「音々は陳宮で真名は音々音です……お姉ちゃん……／＼／」

「お姉ちゃん？私は男ですよ？」

「分かってるです！でも……その……だめ……ですか？」

「……。そうやって上田遣いで見られると流石に断れません。

「……ですわ、では音々音のことは、ねねで良いですか？」

「はいですわ……」

「では、梨紗は本陣なので……近くには……誰かいますか？」

「……はっ！ここに」

「な、なっ！どこから現れたのですか!？」

「……不思議」

「玲仙れいせんですか。この二人と愛紗たちを本陣までお願いできますか？」

「は、私にお任せを」

「頼みます。では恋、ねね、この娘についていって下さい」

「……」
「コクッ」

「了解です!」

「では直斗様、失礼致します」

「はい、玲仙、ありがとうございます（ニコッ）」

「い、いえ……／＼／」

二人と愛紗たちは玲仙に連れられて本陣まで帰って行きました。

「さあ、もう虎牢関は落ちたも同然！皆、一気に行きますよ！」

『おおおお』

『っ！！』

その後は兵力がほぼ全く減っていなかった曹操軍と孫策軍によって虎牢関を瞬く間に抜けることが出来ました。

私たち劉備軍は新たな仲間である霞、恋、ねねを加えてさらに士気

を高めつつ董卓救出に向けて策を練るのでした…。

虎牢関攻略戦！（後書き）

曹操軍に華雄が入ったのはぶっちゃけ霞を仲間にしたかったから（笑）

恋とねねは仲間になるのが少し早い気もしますが、まあ良しとしよう！

今回は隠密部隊のキャラの設定を載せます。

オリキャラ設定(前書き)

予告通り隠密部隊のキャラ設定です

オリキャラ設定

梨紗

性別：女

見た目：小柄で髪は黒いセミロング。
目がパツチリしてて可愛い系

性格：根は真面目でいい子。

直斗大好きで、直斗の言うことは素直に聞く。

趣味：剣術の修行、気配を消す練習、直斗に愛でてもらう

備考：街で直斗を見かけて一目惚れ。（なんと一目で男と分かった）
その後直斗が兵を募集していると聞き即志願。元々それなりに身軽
で隠密に適していたので、直斗に親衛隊の隠密部隊に誘われて入る。
直斗も割と梨紗のことを好いているので、よく一緒に買い物に出た
りする。

名前が真名以外無いのは、元々は孤児で、劉備軍が街に造った孤児
院で暮らしてたから。その後は親しくなった人以外とは話さないの
で真名以外は無くても困っていない。（これは他の隠密部隊も同じ）

ちなみに初めて直斗に真名を呼ばれた時は幸せのあまり失神した。

玲仙

性別：女

見た目：スラッとした体型で、髪は白髪の長め。
目が鋭く凛々しい。

性格：隠密部隊の中で一番大人。しかし他の隊員と同じく直斗L.O
ve。あまり表には出さないが、褒められると顔を赤くする。
部屋では直斗のことを思い出していつも悶えているらしい（笑）。
直斗にもバレている。

趣味：槍術の修行、気の練習、気配を消す練習、直斗をこっそりつ
けてニヤニヤ（笑）（大抵は直斗に見つかって一緒に出かけるが、
それはそれで嬉しいらしい）

備考：隠密部隊は全員（といっても三人だが）梨紗と同じように孤
児院出身。

玲仙はお金が尽きて困ったとき、直斗にご飯をおごってもらい、それからちよくちよく会っているうちに恋心を持ち始めた。

直斗が旗揚げして直ぐに劉備軍に入っていて、直斗が親衛隊に自分から推薦した。また、隠密部隊には最も早く誘われて、隠密部隊長を務める。

直斗からも絶大な信頼を受けていて、いつも側近として近くにいる。

追記・『直斗親衛隊隠密部隊』は、直斗によって親衛隊の中から選ばれた実力者三人組で、美人、美少女揃い。

基本的に直斗のそばにすることが多いが、直斗がどうしても頼みたい仕事があるときは極秘任務としてそちらに向かう。

ちなみに全員直斗Loveで、直斗も割と彼女たちを愛してる。

今後も何処かで出てくるかも…？

オリキャラ設定（後書き）

あと一人は本編に出てき次第載せます

反董卓連合、終結！

董卓 side

「月！虎牢関が落ちた！」

「……恋さんや霞さんは？」

「分からない……けど、多分あの二人なら死んではいないはずよ。
……洛陽に戻って来るかは微妙だけどね……」

「華雄さんは？」

「敵將に討ち取られた後は敗走したらしいけど、行方不明だそうよ」

「……そう」

「連合軍を甘く見ていたのはボクらの責任。……月、洛陽を捨てよう」

「……捨てるの？」

「うん。洛陽を捨て、涼州に戻って再起を図る。それしか方法は無いわ」

「……詠ちゃん。私たち……そこまでして戦わなくちゃいけないのかな……？」

「戦いを仕掛けてきたのは、今、連合を組んでいる諸侯の方！ボクたちは降りかかる火の粉を払いのけただけ。でもね。洛陽を捨てたつて、諸侯は月を狙って涼州にまでやってくる。……生け贄を捧げなければ、権力争いを止めることは出来ないから」

「……張議さんに協力を要請されたの自体……もしかしたら畏れたのかもしれないね」

「うん……。連合を組んでいる諸侯の一部が、これほど老獪な手段を執ってくるなんて、思ってもみなかった。……ごめんね、月」

「ううん。良いの。……涼州に帰ることが出来るのなら、そうした方が良いと思う」

「絶対……絶対に月を涼州に連れて変えるから。だからもう少しだけボクの指示に従って」

「うん……頼りにしてるね、詠ちゃん」

Side Out……

虎牢関での小休止を終えた私たちは、軍を率いて洛陽への道を歩きます。

「いよいよ董卓を救出する時が来ましたね……」

虎牢関を出て既に二日。

洛陽は目と鼻の先にあります。

「そうですね。……にしても、洛陽の様子がおかしくは無いですか？」

「え？愛紗ちゃん、どういふこと？」

「もう洛陽は直ぐそこにまで近づいている。なのに董卓軍の姿が全く見当たらない……」

「そつえば……」

確かに愛紗の言う通りですね……。

「恋、霞、ねね。何か分かりますか？」

元董卓軍三人組に聞いてみます……。が、

「……………（フルフル）」

「何も聞かされて無いのですぞー」

「うちもや……。こりゃ何か賈馱っちの作戦か？」

うんうんと頭を悩ませる私たち。

「こつなつたら、小勢力で直接乗り込むのだ！」

「そやなあ……。それがええかもな」

「お姉ちゃん、誰が乗り込むですか？」

「そうですね……」

洛陽の地理に詳しい霞、恋、ねねの三人のうち誰かは絶対。後は身
軽な鈴々と……。

「決めました。とりあえず六人小隊で、編成は洛陽の地理に詳しい

恋、霞。身軽な鈴々。交渉に必要な桃香、朱里、そして私です。残りはこちらの様子を見ながら待機です」

『御意!』

「では、潜入します」

「ご主人様、桃香様。お気をつけて」

「愛紗もこちらを頼みます」

「よろしくね、愛紗ちゃん」

「お任せを」

潜入ミッション……スタートです

.....
「ふう……潜入成功なのだ！」

「なんやろ……。全然兵の気配がせえへんな……？」

「ご主人様、どうする？」

「とりあえず、街の方へ行ってみましょう。ただし、あまりキョロキョロとせずに全員堂々とするように」

「りょーかいや」

「分かったのだ」

「はあい」

「わかりました」

「……………」

……………

「ん？ねえねえお兄ちゃん、あれ見て！」

街に出てから十数分とたったころ、鈴々が何かを見つけました。

「あれは……………董卓軍の兵士やな……………なんやいそいどるな……………」

「……………月と詠……………」

「嘘やん！……………あ、ホンマや！直斗、あつこの兵の中に月と詠……………えつと、董卓と賈馱が混じつとるで……………」

「本当ですか？」

「ホンマホンマ！ほら、あのお姫様みたいのが董卓で、隣の眼鏡でつり目の娘が賈馱やで。はよ行こ……………」

「はい！」

「ちょっと、待ってよご主人様あゝ」

「置いていかないで下さあゝい！」

.....

「ほら、月、急いで！」

「うん、うん……」

「ちょー待ちいや！」

「だ、誰っ！？」

「ウチやウチ。張遼や」

「霞！アンタ生きてたのね！」

「よかった…」

「とにかく、事情は後で説明するからアンタも一緒に来て！」

「いや、逃げんでええよ」

「はあ？何言ってるのよ？」

「ちょっと待ってな？おゝい、直斗お！」

「はい、呼ばれて飛び出てジャジャジャジャンと」

「……誰？」

「んとな、劉備軍の主でえ、天の御遣いの梅沢直斗や。ウチや恋を
武で打ち負かすほど強いねんで！頭もめっちゃええねん」

「ちょっと！何で敵を連れてきてんのよ！」

「いやな、それは……」

「それは私から」

そう言っつて霞を下がらせます。

「はじめまして、梅沢直斗です」

「じ、こんにちは……」

「アンタ……ボクたちをどうするつもり？」

「詠ちゃん……」

「心配しないで。私たちは貴女方を助けに来ました」

「……どうして？」

「はい、それはカクカクシカジカで……」

「……そう」

「ちなみにな、ウチだけやのうて恋やねねもこっちに来てんねん。
な、恋」

「……………（コクツ）」

「恋！アンタも無事だったのね？」

「ねねちゃんも無事なんだ……よかったよお……」

「……………直斗、いい人。きっと月や詠助けてくれる」

「……………詠ちゃん」

「……………そうね。恋や霞が言うんだもの。信じるわ。梅沢直斗だった
わね、私と月は貴女を信用するわ」

「では具体策を。貴女方には、董卓、賈馱としては死んで貰います」

「名を捨てろってこと?」

「はい。幸いにも貴女方の名はよく知られていても顔はあまり知られていません」

「なるほどね…。確かにそれならいけるかも…。じゃあ直斗。貴女に私の真名を預けるわ。私の真名は詠よ」

「私も貴女に真名を預けます。私は月です。よろしくお願いします」

「はい。ではこれからは二人とも我らの仲間です。なにがなんでも私が絶対に守ってあげますから(ニコッ)」

「た、頼りにしてるわ…」

「お、お願いします…」

「お?何や月も詠も顔が真っ赤になってんで。さては直斗に惚れたんか?」

「はう〜」

「そ、そんなわけ無いでしょ！何で私が女に惚れるのよ！？」

「…………詠、直斗は男らしいで？」

「ええっ！？嘘…………」

「凄く綺麗なのに…………」

「ウチも恋もねねも最初は皆そうやったわ…………」

「…………慣れましたよ」

「ご主人様、可愛いもんね〜」

「とういか綺麗ですよね…………」

「美人なのだ！」

と、たわいもなく話していると、

「お姉ちゃん、恋殿お〜！」

「……ちんきゅ？」

「どうしましたか？」

「はい、連合軍が洛陽の入場し出したです！なので報告に来たです
「！」

「ありがとう、ねね」

頭を撫で撫でします。

「はう…／／／」

「……ってどうかアンタねねにお姉ちゃんって呼ばれてんじゃない
…ホントに男？」

「……一応は」

そう言いながら私たちは本陣に帰ることにしました。

その後、洛陽の人々に食事を配り、半ば暴走し出した袁紹軍と袁術軍を抑えてと大変忙しく過ごしました。

いこうして、

長きに渡り続いた反董卓連合は終わりを迎え、大陸は新たな戦乱へと向かうのでした……。

拠点フェイズ（前書き）

今回は短めです。

また、隠密部隊三人目が出てきます。

拠点フェイズ

今日は反董卓連合が終わり、久々に拠点へ帰ってきた私がとる、久々の休暇です。

皆は政務で忙しいようなので、邪魔にならないように梨紗と玲仙、それにもう一人の隠密部隊の珠麗しゅれいと街に出ています。

「直斗様あ、どこに行きますかあ？」

「我々は直斗様についていきますよ？」

「ま、とりあえずご飯食べてからぶらぶらしない？」

「そうですねえ…どこかいいお店知っていますか？」

「あ、はいっ、はい！私い、いつか直斗様と行くつもりで良い店探しておきましたあ！」

「梨紗、ほんとですか？」

「はい、とっても美味しい麻婆と炒飯がありますよ」

「へえ、麻婆ね…。私はそれで良いよ」

「私は直斗様が良ければどこでも…」

「では、そこにしますか。梨紗、案内お願いします」

「任せて下さい！さあ、行きましょ」

スルリと梨紗が腕を絡めてきます。

「…………えと、梨紗…。あ、当たってます…／＼／」

この娘、意外と大きいです…。

「当ててるんです」

「ず、ズルいぞ梨紗！」

「そつだよ、私だって直斗様に抱きつきたい！」

「ええ〜…。でも早い者勝ちじゃない？」

「ならば、直斗様。こちらの腕をお借りします」

『フニヨン』

「は、はっつ…／＼／」

玲仙…、梨紗より大きい…。柔らか…。

「じゃあ私は……」

『……ッペ』

「はわっ！／＼／」

お、思わず朱里みたいな声が出てしまいました…。

珠麗が私の背中に張りついて、胸を押し付けてきます…。

梨紗や玲仙ほど大きくは無いものの、その感触は私には刺激が強い
です…。

「あ、歩けないので離れて下さい……／＼／」

「むう……。また今度二人きりの時に迫る……」

「すみません……」

「ごめん……。今度ゆっくりしようね」

玲仙以外の二人は何だか変な発言をしたような気がしますが放っておきましょう…。

……

「ぶはあ、美味しかったですね」

「直斗様、食べる姿も美しかった……//」

「さて、直斗様、これからどこ行く？」

「市の方へ行きませんか？」

「良いですよ」

「御意に」

「構わないよ」

「では、行きましょうか」

.....
月、詠side

「ねえ、月」

「どっしたの？詠ちゃん」

「私たちさ、何でこんな服着てるんだろっ…?」

「え?ご主人様専用の侍女だからじゃないかな?」

「直斗の趣味?まあ確かに可愛いけど、ちょっと恥ずかしいよ…」

「でも詠ちゃん、よく似合ってるよ?」

「月の方が可愛いよ…っつて、あれって直斗?」

「え、どっ?」

「ほら、あそこの女の子三人と一緒にいるの」

「あ、ホントだ…。誰なのかな…?」

「私たちを買い物に行かせといて自分は女の子と出かけてんのね…」

「詠ちゃん、そんな言い方はダメだよ?…あ、こっちに気付いたみたい」

「ホント。こっちに来るわね」

Side out……

直斗 side

「月、詠。買い物ですか？お疲れさまです」

よしよしと二人の頭を撫でます。

「はう〜／／／」

「んっ……／／／」

「良いな〜……」

「梨紗たちはさっきたくさん撫でたでしょう」

「でもお……」

「ねえ、直斗」

詠が私に撫でられながら話しかけてきます。

「どうしました?」

「その子たち……誰?」

「ああ、この娘たちは私の親衛隊の中の隠密部隊の三人で、こちらから、梨紗、玲仙、珠麗です」

「よろしくね〜」

「よろしくお願いします」

「どうも」

「あ、よろしく。私は賈馱……だけど、今はもう詠として過ごして

るから、詠でいいわ」

「私は董卓ですが、詠ちゃんと一緒に名を捨てたので今は真名の月で呼ばれています」

「じゃあ月様と詠様だね」

「別に『様』なんて付けなくて良いわ。今はただの侍女だし」

「いえ、貴女方は直斗様のお気に入りなので」

「ま、直斗様のことは渡さないけど」

「こらこら、また変なことを言って……」

「だって私、直斗様好きだし、ホントに渡す気ないから」

「ありがとう珠麗。でもそういうのは二人きりの時にしてくださいね？」

「じゃあ二人きりの時にたっぷりするよ」

「はあ…どうでもいいけど昼間っからイチヤついてる暇があったらさ、買い物手伝ってよ」

「そんなにたくさん買うのですか？」

「まあね…。食材とか調味料とか、主に料理系の物が多いわ」

「どれどれえ…？うわっ！？何で先月よりこんなに食材の量多いの！？」

「たぶんだけど…」

「恋さんはものすごくたくさん食べるから…」

「今までは鈴々だけだったのが、大食らいが増えた訳だ」

「ああ…、鈴々ちゃんもよく食べるよねえ…」

「まあ確かにこの量は月と詠だけでは厳しいですね。梨紗、玲仙、珠麗。手分けして買ってきてくれますか？」

「りょーかいです!」

「御意!」

「まあ任せてよ」

「すみません皆さん、ご迷惑をおかけします」

「月が謝ることじゃないわ。流石にこの量だと仕方ないわよ。手伝いありがとうね」

「じゃあ私はこっち側を」

「では私はこちらを」

「じゃ、私はこっちだね」

「では私と月と詠はこっちで」

「買い物の内容は分かる？」

「大丈夫ですよ。私たち、記憶力は凄いですから」

「必要な物と量は把握済みです」

「直ぐに済ませてくるよ」

「隠密部隊って凄いわね」

「私が直々に育て上げた選りすぐりの実力者ですから」

その後買い物物を半刻ほどで全て済ませてお茶をしてから帰りました。

月と詠は少しは劉備軍陣営に慣れてくれましたかね？

拠点フェイス（後書き）

一応珠麗の設定を載せます。

名前：珠麗

性別：女

見た目：赤髪セミロングでAngel Beats!の岩沢みたいな感じ。目が半開きで眠たそう。

性格：ちょっと適当なところがあるけど直斗の頼みだけは完璧にこなす。

趣味：格闘術の訓練、隠密の訓練、直斗とお出かけ

備考：やはり直斗Loveで、直斗によくアプローチしている。たまに直斗のベッドに潜り込んだりして夜這いをしようとするが、直斗に逃げられて成功例は無い。格闘技が得意で戦闘は手甲をはめて肉体で闘う。隠密部隊は実力的には馬岱と拮抗するレベルはある。（現段階で）

まあ、こんなとこで、すね。

動き出した諸侯たち（前書き）

かなりお待たせしましたm（| |）m

部活が忙しくて…

とりあえず更新です。どうぞ！

動き出した諸侯たち

反董卓連合が終結してから三ヶ月の月日が経ちました。

我々劉備軍は、連合での功績を認められ、徐州の州牧となり、政務に励んでいました。

そんなある日の軍議にて…

「ご主人様、最近、諸侯の動きが活発になってきています。特に、北では袁紹さんが公孫贄さんを、東では孫策さんが袁術さんを打ち破ったという情報があります」

朱里の報告に皆がざわつきます。

「ば、白蓮ちゃんが…!？」

「むう…伯佳殿が…。おそらくは内政に必死になっているところを付かれたのでしょうな…」

「でしょうね。更に袁紹さんは南下して曹操さんのところにも攻め込む動きを見せています…」

何も考えていないのが丸わかりですね…。今恐らくこの大陸で最も勢力を持つのは華琳。その華琳のところに攻め込むにはよほどの策が必要ですが、袁紹のところには優秀な軍師はいません。

「華琳のところ…ですか。だとすれば、袁紹は終わりですね」

「やろうなあ…。袁紹のアホがあつて曹操に勝てるわけ無いわな」

「……………恋もそう思う」

「ねねも同意なのですぞ！」

「そうね、僕も袁紹は無謀だと思つわ」

「そつだね詠ちゃん」

「元董卓軍の皆も同意見だそつです。」

「ただ、問題があるとすれば…」

「袁紹さんを降した曹操さんは、北方を全て手にしてしまいます。そうなると大陸統一を目指す曹操さんが次に狙うのは私たちが孫策さんの土地か…」

と、朱里の言葉に雛里が続けたその時、

「軍議中、失礼致します！」

一人の兵士が駆け込んで来ました。

「何事だ!？」

愛紗が兵士に尋ねます。

「はっ、北方より砂塵を確認。旗は…曹、夏侯、筍その他大勢であります!」

「くっ…噂をすれば影うちゅうわけか…。それで、敵の兵数は？」

「そ、それが…」

「何だ、はつきり言え！」

愛紗が急かします。

「はっ、敵の兵数は…ご、五十万は確かかと…」

「なっ…！？五十万やて！？んなアホな！！」

「こちらの兵数は無理しても五万が精一杯です…」

「十倍…主よ、これは勝負になりませぬぞ…」

「…ええ。どうしたものか…」

「鈴々ががんばって敵を一杯倒すのだ！」

「……………恋もやる？」

鈴々と恋が意気込んでいます。が、

「ダメです。恋や私、鈴々、愛紗に星、霞がどれだけ頑張っても、朱里たちがどんな策を練ろうと、勝ち目はほぼありません。下手をすれば……」

「全員死亡っちゅうわけやな……」

「そ、そんなっ！！そんなの絶対ダメだよ……！」

桃香も猛反論をしています。

「へう……詠ちゃん……」

「月……どうしたら……」

「……………いっそのこと、逃げるっちゅうんはどっしやっ……」

「……………え？……………」

全員が霞の発言に反応しました。

「いや、あんな、どうせ戦ったかて勝てへんねやろ？やったら逃げるのもありちゃうか？」

「なっ!?!しかし、民を護るべき州牧が民を捨てて逃げるなど…。それに、武人が敵に背を向けるのは…」

愛紗は納得がいかない様子です。

「…うちかて正直逃げたいわけやない。うちや恋、月に詠、ねねは元々直斗に救われた命やからな、うちは直斗のために命懸けで戦うのもええよ。やけどな、それで誰かが、大事な人が死ぬんだけは絶対にイヤや。そんなことになるくらいやったら逃げる。全員が助かるために逃げることを選ぶ。これがうちの考えや」

「……霞の言う通りにしましょう」

「ご主人様!？」

「愛紗、今回は次に勝つために退くのです。勝利を諦めたわけではなく、勝利のための戦略的撤退です。それに私も、大事な人…貴女たちを失いたくありませんから。民のことなら華琳に任せて大丈夫でしょう」

「ご主人様……分りました。もはや依存はありません」

「ありがとう、愛紗。…朱里、再起を図れそうな場所がありますか？」

朱里はしばらく考えて、

「……確か、南西の蜀はどうでしょうか？」

「蜀？確か劉篤が治める地方だったか？」

「ああ、僕も洛陽に居た頃聞いたことがあるわ。継承問題が拗れて内戦が起こりそうっていうところよね？」

「そうです。その内戦の間について入蜀するのが良いかと」

「うーん……でも、何だか気が進まないなあ……」

桃香は決断が出来ない様子。

「桃香、蜀は今、内戦の途中です。我々がそれを治めたならば民も

救うことが出来ます。太守の劉璋の評判も良くはありません。それに、今の我々には選択の余地はありませんよ」

「うう…そっか。…わかった。朱里ちゃんの言う通り、蜀に行くうー！」

「では、直ぐ様全土に伝令を。兵の引き上げと、民への謝罪を行うことにします」

『御意！』

曹操軍 side……

「華琳様、全軍徐州に入りました。あとは関所を落とし、彭城に向かうだけです」

曹操の元へ駆け寄る夏侯惇。

「ご苦労様。……にしても、劉備軍の動き、あまりにも鈍重ね……」

「我らの動きが素早いだけでは無いのですか？」

夏侯淵が尋ねる。

「それは無いですよ。今回の行軍は通常の作戦行動の範囲内です」

と、郭嘉。

「それなのに反応が鈍い……。しかし、あの梅沢直斗が何もしないなんてあり得ない……。何かあったのかもしれないね」

筍イクが続ける。

「劉備軍の内部で？それこそあり得ないわ。あの直斗が部下の行動を把握仕切れずに何かされるなんてことがあるかしら？」

曹操はそれを否定した。

「……華琳も桂花もやけにあの人を高く評価するんだな。……そういえば見た目も凄く綺麗だったな……」

これは北郷一刀（一応天の御遣いである）。

「気持ち悪いから喋らないでよ！この万年発情男……！」

筍イクが北郷に怒鳴る。

「……今回だけは桂花に同意ね。……直斗を高く評価するのは彼にそれだけの価値があるからよ。……欲しいわ……ああ、直斗……／／／」

曹操は梅沢直斗を想い顔を赤らめる。

「ま、まあこの全身精液男よりは断然あっちが良いですね…//」
筒イクもまた、梅沢直斗のことを考えて顔を赤くする。

「…？あの、先ほどからおっしゃる直斗…とは？」

「ああ、稟は会ったことがなかったわね。天の御遣いの優秀な方よ。
見た目は女性だったけれど。きっと貴女も気に入るわ」

「はあ…。そうですか…？」

「……ホント俺って扱い酷いよな…」

「元気出しなよ兄ちゃん」

「そうですねよ兄様。そのうちきつといいことありますよー！」

「ありがとう、季衣、琉々…」

「そんなことより、先行して威力偵察をしてきましようか？」

夏侯淵が本題に戻す。

「そうです華琳様。私が行ってきます！」

それに夏侯惇も続く。

「あら、春蘭も秋蘭も直斗に好意があるのではなかったかしら？」

と、二人をからかう曹操猛徳。

「「なっ…！／／／」」

二人は一気に顔を真っ赤に染める。

「ふふ、冗談よ。では春蘭、秋蘭、それと季衣。先行して彭城へと向かってちょうだい」

「は、はい！／／」

「ぎ、御意… / /」

「分かりましたあ！」

曹操軍が動きを速め出したのであった……。

動き出した諸侯たち（後書き）

書いてて思ったんですけど、霞の出番多いなあ〜（笑）

好きなキャラだし、作者が関西人だからしゃべり方が書きやすいのもあるんでしょうかね？

呉が空気になりつつあります…。

蜀呉同盟まではこのままかもしれないです…。

あと、白蓮や袁家のおバカトリオ、袁術と張勳はもう出ないと思います…。

白蓮は考え中ですが。

感想、アドバイスお待ちしてます。

白蓮を出して欲しい方がもしあれば感想に書いて下さい。

そこそこの票が入ればがんばって出します…。はい。

長坂橋の戦い（前書き）

更新です!!

（ ）

長坂橋の戦い

「ご主人様が用意して下さった馬と馬車はあまり数が無い！老人や妊婦を優先的に乗せるのだ！」

徐州を発ってから一週間。今のところ曹操軍が我々を追いかけてくる様子は見られません。が、我らの進行具合も思っていたより進んでいません。

なぜなら、予想以上に人民がついてきてくれたのです。徐州にいた民のうち八割程は共に来ていると思われまます。

「長老殿、本当にすみません。我らが不甲斐ないあまりに……」

「何を仰いますか、御遣い様。貴方様や劉備様がおられたから我らはあるなにも安心して暮らせたのですぞ。貴殿方はお優しい。いつも我々民のことを考え行動して下さい。そんな貴殿方だからこそ、民もついてきたのですぞ？」

「長老殿……」

「聞けば、平原からついてきている民もいるということらしいではありませんか。確かに曹操殿も民を大切にすると聞きます。が、我らは貴殿方を好いているのです。寧ろ我々がついてきたせいで兵糧が減り、行軍速度が遅くなってしまふことを謝らねばなりません……」

…」

「いえ、長老殿。その気持ちだけで充分です。ご安心ください。貴殿方は必ず我らが守ってみせます」

「ありがとうございます、御遣い様」

長老殿がペコリと頭を下げて言いました。

「なあ、直斗」

その時、霞が私に話しかけてきました。

「どうしましたか？」

「あんな、多分このまま進んでも、追いつかれたらそこで終いやろ？ やったらな、敵に気付かれる前に追いつかれても大丈夫なように陣形を変えるか軍を分けるかといった方がええんとちゃうか？ 朱里もそう思わん？」

と、霞は私とその隣にいる朱里に尋ねます。

「そう…ですね。霞さんの言う通りかもしれません」

「あ、やっぱりそう思う？」

「はい。ご主人様、どうなさいますか？」

「……ふむ。…梨紗、玲仙、珠麗！」

「呼びましたあ？」

「……ここに」

「どっしたの？」

むむむ………気配を殆ど感じませんでしたね……。また隠密の腕を上げましたか……？

「……相つ変わらず神出鬼没な三人組やなあ………」

霞も気づかなかったみたいですね。

「ご用の方は？」

軽く放心していた私たち三人に玲仙が声をかけます。

「はっ……ええと、ここに將軍を呼んできて下さい。出来る限りの最高速度でお願いします」

「了解っ！！」

フツと三人は姿を消しました。

「今のうちにここからの地理とか確認しとかへん？」

「そうですね。朱里」

「はい！確かこの先しばらく進んだところに深い崖があります。そこに長坂橋という橋が掛かっています」

「……逃げるには不利な地形ですね……」

「せやなあ……。多分そこまでには曹操も気づいて追いかけて来るやろっし、下手したら追い付かれてるかもなあ……」

「だとすれば、そこで迎撃……足止めをして、民を逃がすべきでしょうね」

「そうですね……。ん？三人とも、お疲れさまです」

「のわあっ！？い、いつの間……？」

「はわわ……。本当に神出鬼没ですよ……。心臓に悪いでしょ……」

朱里……さりげなく囁んでいます……。

「呼んで参りました。間もなくこちらに到着されるかと」

「直斗様あ……」
「褒美は？」

「あ、私も」

「はいはい」

二人の頭を撫でます。

「ふにゃくん / / /」

「はにゃくん…… / / /」

二人とも猫化しています…。

「ず、ずるいぞ二人とも……!!」

「玲仙も、ほら」

『なでなでなでなで……』

「にゃあ〜ん…… / / /」

なぜ私が頭を撫でると皆猫化するのでしょつか………？

「おっ！直斗、みんな来たみたいやで？」

霞が言ったので私は三人を撫でる手を止め、皆の方へ向きます。

手を止めた瞬間、三人が凄く潤んだ目をしていたのは今だけは気にしないことにしましょう……。状況が状況なので……。

「ご主人様、お呼びですか？」

と愛紗。

「何かあったのだ？」

これは鈴々。

「曹操さんはまだ追いついてきて無いよね？」

桃香が首を傾げて、

「……………敵、まだ来ない」

恋も言います。

「斥候からも特に報告は無いですぞ〜」

ねねも恋にくつついてます。

「人民の皆さんも特に異常はありませんよ？」

「ボクの方も大丈夫だったわよ？」

月と詠コンビも一緒に来ました。

「主と朱里で何か策でも立てましたかな？」

「あわわ……。そうなんでしゅか？はう、噛んじやった……」

先行していた星と雛里も到着しました。

「全員揃いましたね。今、霞と朱里と話していたのですが、このま

ま進軍していくと、崖があるのですが、そこには長坂橋という橋が掛かっています」

「長坂橋……ですか？」

愛紗が首を傾げて聞き返します。

「ええ。そこは、あまり逃げるには適しておらず、曹操軍に追い付かれ、攻撃を受けることは必須。そこで」

「元々からこちらは軍を、先行して蜀入りをしとく部隊と後方にまわって曹操軍を足止め及び迎撃する部隊の二つに分けておこって話
や」

私の発言に霞が続いて言いました。

「なるほど……しかし、誰がどちらにまわるのですか？」

「鈴々は後方に。恋とねね、あと私も後方です」

「ご主人様！？ダメです！ご主人様は前方に……」

「愛紗、主がそう簡単にやられると思うか？我が束になってようやく敵う相手だぞ？」

……まあ最近、やけに皆が強くなってきていてギリギリ何ですけどね。特に愛紗と星、鈴々は反董卓連合で恋に負けてからは物凄い上達ぶりですし……。

「だがしかし、万が一ということも……」

「大丈夫なのだ！何かあったら鈴々がお兄ちゃんを守るのだ！」

「……………恋も守る」

「うちも後方にまわるわ。多分前方は愛紗と星がおっいたら何とでもなるやろしな」

「……………分かった。ご主人様を頼むぞ、鈴々、恋、霞」

「応なのだ！」

鈴々が元気に返事をして、

「……………」

恋が頷きます。そして、

「うちの愛が直斗を守るから安心しとき！」

霞がニカッと笑って言いました。

「し、霞、恥ずかしいのでそういうのはあまり……／＼／＼」

「ええ〜！別にええやんかあ〜　うちが直斗のこと好きなのはホンマやもん」

「ふむ……。主は愛される体質なのでしょうな。我ら蜀の将全員から好かれるとは」

と星が言うと、私を含めほぼ全員が顔を紅潮させます……。

「と、とにかく！前方三万、後方二万に兵を振り分けて全員隊列を整えて下さい！」

声が裏返りそうなのを何とかこらえながら言いました。

『は、はい!』

「クスツ… 皆、初なことで」

「せ、星! 貴女も早く行動してください!」

「クスクスつ 御意」

はあ…。全く星ときたら…。

「では鈴々、恋、ねね、霞。 私たちも行きましょう」

『了解(なのだ!)()ですぞ!()や!()』

「…………(コクツ)」

恋だけワントンポ遅れて頷きます。和みますね…。

曹操軍 side……

「おかしいな……」

彭城に向かって進行しながら夏侯淵が呟いた。

「何がだ？秋蘭」

その呟きに夏侯惇が尋ねる。

「本隊から随分と先行しているにもかかわらず劉備軍の姿が全く見えぬ……」

「そういえば、ここまでの関所にも殆ど兵がいなかったですねえ」

許緒が確かにと頷く。

「我らに気づいていないか、我らに恐れをなして震えているのではないか？」

夏侯惇が二人に言う。

「劉備がそこまで無能な輩とは思えんが…。仮に劉備が無能だったとしても周りの人間が無能というのはあり得んな」

夏侯淵はそれを否定した。

「ふむ……劉備のそばには関羽や張飛、諸葛亮が居る…か」

夏侯淵の言い分に夏侯惇がなるほどと納得する。

「ああ。そして何より、あの梅沢直斗も居る。奴は華琳様のお気に入りであり、そこらの軍師とは比べ物にならないほどの知謀に長けている」

「そうだったな…。しかし秋蘭、それでは何故劉備軍の姿が全く見えんのだ？」

夏侯惇も劉備軍が見えないことに違和感を感じ聞く。

「さあな……。それは私にも分からん。……季衣、前方に放った斥候はまだ戻らんか？」

「まだつばいですねー。春蘭様、秋蘭様。ボクが先行して見てきましようか？」

許緒が二人に尋ねる。が、

「いや、止めておこう。ただでさえ少数で突出しているんだ。策に嵌められたら全滅だ。警戒しながら迅速に進軍しよう」

夏侯淵は危険を避けるためそれを止める。

「はあい」

許緒は難しいことを考えるのは苦手なので夏侯淵に従うことにした。

「では行くか！」

「ああ」

劉備軍 side……

「はっやくこいこいてっきのやつー」

鈴々がのんきに歌いながら歩きます。

「いらいら鈴々、できるだけ遅く来てくれるほうが良いんですよ」

「にははは！そうだったのだー」

「全く。お気楽なもんやなあ」

霞は半分笑いながら呆れます。

「緊張したって来るものは来るのだ。だったら緊張するだけ無駄な

のだ
」

「……そりゃそうやな
」

「頼りにしてますよ、鈴々
」

「任せるのだ！
」

曹操軍 side
……

「ふむ……そういふことか
」

ふと曹操が呟いた。

「と言いますと？」

筈イクは曹操に尋ねる。

「拠点には兵が殆どおらず、備蓄されているはずの物資が一切無い。……桂花。春蘭に早馬を出しなさい。すぐに彭城へ向かえ、とね」

「彭城にですか？」

「敵は彭城での決戦を望んでいるようよ。春蘭をすぐに彭城に向かわせ、敵情を確認するように伝えておきなさい」

「はっ！」

「……兵を本城に纏めて決戦を行う、か。本当にそれで勝てると思っっているのならば、劉備。貴女には英雄たる資格は無いわね……。そして……」

真っ青な空を見上げて、曹操は一人の男を想い、呟く。

「……そんなことなら直斗、貴方には幻滅するわよ……」

……

「彭城に向かえ？どついつことだ、それは？」

早馬からの伝令を聞き、夏侯惇が尋ねる。

「はっ。曹操様のお考えでは、劉備は拠点の兵士を引き上げて本城に纏めて決戦を行うつもりだと……」

「……なるほど。殆どの拠点で兵士が居なかったのも、それならば納得できるな」

「急ぎ、彭城へと向かい、敵情を偵知せよ、と言つのが曹操様の命令です」

「了解した。すぐに彭城に向かおう。現地で落ち合ひしましょうと伝えてくれ」

「はっ！では！」

夏侯淵からの返事を聞くと、伝令兵は直ぐに馬へと乗り、本隊の元へ砂塵を巻き上げて帰っていった。

「では直ぐに向かうぞ！」

「慌てるな姉者。先に部隊の再編成を行おう」

「そんなもので良い！」

「良い訳無かるう。もし華琳様の予想が当たっているのならば、彭城で敵と見えることになる。すぐに戦えるように準備しておく方が
良い」

夏候淵が夏候惇に言った。

「ボクも、秋蘭様の意見に賛成かなあー？」

許緒も同意する。

「むう……ならそうしろ、早くしろ、素早くしろ！」

「全く、どこの子供だ姉者は……」

「春蘭様らしいですけどねー」

「全くだな。……季衣、部隊の再編成を頼む」

「りょーかいであります」

劉備軍 side……

「後方に放っている斥候からの定期連絡です！敵影未だ無し！繰り返します！敵影未だ無し！」

「ご苦労さんなのだ」

「敵が来るにはまだ余裕はありそうですね」

「……（フルフル）、……敵、もうすぐ来る」

「恋？まだ斥候からはそんな報告は来てへんで？」

「……（フルフル）、……来る」

「うづん……まあこついつ時の恋の勘が冴えてるのはうちが一番知つてるからな……。そうなんやろつな……」

「霞？」

「あんな、こんな時の恋の勘は冴えとるから、多分間違く敵はすぐ来るで」

霞は確信があると、私に言いました。

「そうですね……。長坂橋まではまだかかりそうですが、民のことを考えると行軍速度はあまり上げられませんし……」

「後ろに気をつけながら行軍するしかないのだ」

鈴々が私の横で発言します。

「それしか無いですな。まあ恋どのお姉ちゃん、霞に鈴々がいれば何とか持ちこたえるくらいはできますぞー！」

ねねが元気よく言いました。

「そつやな。あんま氣い張つとつても疲れるだけやし、なんやっけ、
『ぼじていぶ思考』とやらで行こか!」

霞が覺えたての横文字を使ってニカツと笑って言います。

「……………(コクツ)……………『ぼじてぶ思考』」

恋は『ポジティブ』と言えないのですが、そこがまた可愛いですよ
ね…。

「『ぼじていぶ』なのですぞ!」

「『ぼじていぶ』なのだ!」

……………皆、無理して横文字を使わなくても…。

「では、曹操軍に追い付かれる前に、できるだけ長坂橋まで進みま
しよ!」

「「「おー(なのだ)(ですぞ)!!」」」

「……おー」

やっぱりワントンポ遅れる恋なのですた。

曹操軍 side……

「彭城内部に放った工作員より緊急連絡!」

「内容はなんだ?」

ついさっき彭城に到着した夏侯惇たちに、伝令兵が言い、それに夏侯淵が尋ねる。

「はっ！そ、それが、彭城及び城下町に、劉備軍の影が無く、民も殆ど見当たらないとのこと！」

「何だと！？そんなわけがあるか！もつとよく探せ！」

伝令兵の報告に夏侯惇が怒鳴る。

「落ち着け姉者」

「そうですね、春蘭様」

熱くなっている夏侯惇に夏侯淵と許緒の二人が言った。

「むう……しかし、劉備たちはどこへ行ったと言うのだ？」

夏侯惇がむくれながら言った。

「さあな。……おい、お前」

「は」

「残っている民への聞き込みはしたか？」

「はっ、現在行なっております」

「そうか……」

夏侯淵は何やら考え込む……。

「秋蘭？」

「……劉備たちは我々が目鼻の先にまで来ているのにも関わらず、行動を起こしていない。つまり、劉備はもう城には居ないと考えられんか？」

「に、逃げただとお！？そんな馬鹿なことがあってたまるかー！」

「確証は無いが……、しかし城にも街にも、兵や将が一人も見当たらないのは、そういうことかもしれない……」

「ちょっと待て、仮に劉備が逃げたとして、どこへ逃げたと言うの

だ？奴が以前赴任していた平原も、今や我らの領土。……逃げる場所など無いはずだ」

「孫策を頼って逃げ延びたとかですかねえー？あ、でも、目の上のコブの劉備を孫策が受け入れるとは考えにくいですよねえ……」

「いずれにせよ、我々だけでは判断しかねる。ここは一度兵を残して華琳様の元に帰るべきではないか？」

夏侯淵が言った。

「そうですねー。華琳様にどうするか聞いてみましょうよ」

許緒も夏侯淵に同意する。

「では季衣、華琳様たちはどこまで来ている？」

「ここから一里くらい後ろで、稟ちゃんたちと合流してるらしいですよ」

「そうか。では、共に来た兵のうち、八割を残して華琳様の元に退却する！秋蘭、季衣、行くぞ！」

「もう、春蘭様ってば、華琳様のところに帰るってなった瞬間、元気になっちゃうんだから……。単純だなあ……」

「うつつ、五月蠅いぞ、季衣！」

「姉者、落ち着け。季衣もあまり姉者をからかうなよ」

クツクツと笑いつつも夏候淵が二人に言った。

「はあい」

「では行こうか」

夏候淵が先頭を、その後を夏候惇、許緒がついていった……。

……

「春蘭たちが戻ってきた？……まさか劉備軍の返り討ちに……？」

曹操が深刻な顔つきになり、言った。

「いえ、秋蘭様の進言により部隊を後退させたようです。戦闘には発展していないようですし、何か異常事態が発生したと考えるべきでしょうね」

曹操の言葉に対して郭嘉が答えた。

「ふむ…。で、秋蘭たちは？」

「……」

「ただいま帰りました！」

「ただいまー！」

曹操が尋ねると、夏侯淵達がそれぞれ、三者三様の返事を返した。

「あら、いつの間だ。……お帰りなさい、二人とも。季衣もご苦労様」

「いえいえですー」

許緒がニコニコと答えた。

「で、報告というのは？」

「はっ。彭城に工作員を潜入させ、内部を探らせたところ、どうやら劉備は城を捨て、どこかに逃亡しているようなのです」

「逃亡？……あり得ない！城を捨てて逃亡などと、それが英傑のすることか……！」

夏侯淵の報告に、郭嘉が怒鳴るように言った。

「ふむ……城の様子は？」

「至って平穩。……ですが一点、気になることが……」

「……続けなさい」

「本城であるはずなのに、人がやけに少ない。……まるで田舎町のような有様でして……」

「人が少ない……か。ふむ……」

「何かの策？……いや、しかしどんな策だと言うのだ……」

郭嘉は考え込む。が、

「稟、考えるのは後。今は状況の把握が先決よ」

と、曹操に言われたので止める。

「周辺への聞き込みはしたのかしら？」

「現在、残してきた一部の兵には聞き込みも命じてはおりますので、おって情報も入るか」と

夏侯惇が即座に答えた。

「そう。……風」

「……………ぐー」

頭にちよこんと人形を乗せて、棒付きキャンディーをくわえたまま寝るという器用なことをする少女。
彼女は程イク。真名を風という。

「風、起きなさい」

「……………おおっ！」

可愛らしく声を出し、パチクリと目を開く。が、眠たそうな半目のままである。

「起きたかしら？ならば、所感を述べなさい」

「ええと……………劉備が逃げたということについて？」

眠っていても、大事なことはしっかりと聞いている程イクなのであった。

「そうよ。貴女の考えを聞かせてくれるかしら？」

「うむ。……劉備が逃げて、どこへ向かうか。北は我らの領土。南は孫策の領土。東は海。……ならば西しかないでしょうねー」

「西……？」

「荊州辺りが無難かな？とも思いましたが、荊州ではすぐに我らと国境を接することとなり、一時しのぎにしかならない。ならば……ふむ、益州辺りが条件に合う土地ではあるでしょうねー」

「……そうか！確か益州で、内乱が起こる可能性を示唆する報告があった！」

程イクの発言により、謎が解けたと郭嘉が言う。

「ありましたねー。その争いの隙を突いて益州の城を一部占拠。その後、兵力と謀略により益州を平定。……おおー、素晴らしい未来予想図です」

もがもがと、巨大な棒付きキャンディーをくわえながら発言する程イク。

……そんな大きな物をくわえておいて、どうやって話しているのだろっ、と考えたら恐らく負けなのだろう……。

「住人が減っているのは、劉備についていったから……ね？」

「そうですねー。好きな人から離れたくないという気持ちはよく分かりますから」

「なるほどね。……春蘭、秋蘭」

「はっ！」

「季衣……それと、華雄を連れて、劉備軍を追いなさい。兵だけならばともかく、人民を連れているのならば、まだそう遠くへは行っていないはず。追いつくと同時に足止めをしておきなさい。私たちは、彭城占拠後すぐに後を追うわ」

「御意！……足止めと言わず、撃破してしまってもよろしいのですよっ、」

「当然よ。覇道を歩み出した今、敵となる者は全て排除なさい」

「御意！秋蘭、季衣、華雄！行くぞ！この私についてこい！」

「応っ！！汜水関での恨み、今日こそ晴らしてくれるわ！！」

「はぁ……いきなり元気になっちゃうんだもんなぁ」

「秋蘭、春蘭と華雄の手綱は任せるわ」

「……御意」

四人は急いで支度をして劉備軍を追って出陣した。

「桂花、稟、風。急ぎ彭城に向かい城を占拠。事後処理を行いなさい」

「……御意！」「」

「流琉、貴女は私と共に」

「はっ！」

曹操に呼ばれ、典韋が答えた。

「なあ華琳、俺はどうすればいいんだ？」

のそのそと天幕から出てきたのは、魏に仕える天の御遣い『北郷一
刀』である。

「ふん、アンタは全く役に立たないんだから、首でも吊って死ねば
？」

「酷っ！？いくら何でも酷くね！？」

「五月蠅い！！喋らないでよ、妊娠しちゃうじゃない！！この変態
全身汚物！！！」

「誰がだよ！！！」

「バツカじゃないの？アンタ以外誰が居るわけ？華琳様や私たち、
拳げ句の果てには梅沢直斗のことまでいやらしい目付きで見てたの
はどこのどいつよ…？」

「桂花、いくらなんでも直斗のことまでは……そうよね、一刀？」

「……………」

フイツと顔を逸らす北郷一刀。

「ま、まさか……貴方、私の直斗にまで……？」

「そうですね、華琳様！コイツは同じ男である梅沢直斗に対してまでもいやらしい目付きで見てるんです……！」

「か、一刀殿……いくら何でもそれは……」

「おおー……風もぶつちやけると、ドン引きしてますよ、お兄さん？」

「に、兄様……」

「うう……だ、だって仕方ないだろ！？あんなに綺麗な人なら、男でも見とれるっての……！」

「うわっ！！開き直ったわね！？この万年発情男がっ！！」

「……確かに直斗は美しいけれど、そういう目で見るのは正直、気持ち悪いわよ、一刀？」

「死ねっ！！即刻死ねっ！！」

ボロクソに言われる北郷一刀である。

「しかし、男ですら見とれる美しさ？……それに華琳様のお気に入りに……。華琳様、桂花様、梅沢直斗とはいったいどのような人物なのでしょう？」

「おおー。あの稟ちゃんが男の子に興味を持つとは、風は驚きなのですよ」

「ふ、風！！そういう訳では……」

「とはいえまあ、実のところ、風もその梅沢直斗とやらのごときは気になりつつはあるんですけどねー」

「あら、そういえば二人とも、直斗には会ったことが無かったわね」

「はい」

「ええ。華琳様がその方に最後に会ったのは我らが華琳様の陣営に加わる前のですから」

のんびりした口調の程イクと、はきはきと話す郭嘉の言葉を聞き、曹操は直斗の姿、声、性格を鮮明に思い出し始めた。

「ふふ。……そうね、一言で言えば、私の理想的な人……かしらね？」

「華琳様の理想……ですか？」

「そうよ。あの美しくなびく黒髪と、整った綺麗な顔立ちと体つき。武の腕も呂布にも勝り、知謀にも長ける。人望も厚く、王に足る資格もあるでしょう。最強というよりも、最良というべきかしら」

「そうですね。というかアイツ、ホントに男なのかしら……。今度会ったら確かめてやろうかしら？」

「珍しいですねー、華琳様がそこまで褒める人物とは。それに桂花ちゃんが貶さない男性なんて初めて聞きましたねー」

「べ、別にそんなんじゃ……／＼／」

「ま、当然といえば当然よ。私もだけれど、桂花も春蘭も秋蘭も、直斗には好意を寄せているものね」

「なっ！？そ、そこまでですか……。ますます気になりますね……」

「早く見てみたいですねー」

「そうね。私も早くもう一度会いたいわ。恐らくだけれど、稟も気に入ると思うわ。……もっとも、だからといって手加減はしないけれど」

「……寧ろ手加減したらこっちがやられそうですね」

筒伊クが曹操に同意する。

「……はあ、何でうちの御遣いは『アレ』だったのよ……。『アレ』なんかよりは梅沢直斗の方が何億倍もマシよ……」

筈イクはそう言いながらチラツと『アレ』こと魏の天の御遣い、北郷一刀を見た。

さっきの会話のせいで、隅っこのほうで体育座りで拗ねていた。

「…………キモ」

筈イクは見るのを止めて、彭城へと向かう準備を開始したのであった。

劉備軍 side ……

「申し上げます！後方に砂塵を確認しました！」

私たち後方部隊に斥候からの報告が来ました。

「とうとう…………来ましたか。鈴々！」

「分かってるのだ！部隊を五つに分けるのだ！一隊は鈴々が。もう一隊は恋、もう一隊は霞、もう一隊はねねで、もう一隊がお兄ちゃんなのだ！」

「……………（コクッ）」

「分かったであります！」

「任せときい！…！」

それぞれが返事をします。

「陣を敷いて敵と対峙しながら、うまく時間を稼ぐのだ！その間に皆逃げるのだ！」

「上出来です。それで行きましょう。一部の兵は非戦闘員を逃がすことのみ集中して下さい！」

「……………はっ……………」

「私たちはこのまま長坂橋まで行き、到着しだい敵を迎撃。良いですな？」

「良いと思うですよ！」

「うちも文句ないで？」

「鈴々は何でもいいのだ！」

「……大丈夫」

「では、長坂橋まであとしばらく頑張りましょう！」

曹操軍 side……

「夏侯惇將軍、前方に集団を発見！恐らく追尾目標の劉備軍かと！」

「よし、やっと追い付いたか！」

「兵数は？」

「はっ……あの、何やら兵の他に難民のような者たちが併行しているようで、正確な数は分からないとのことですよ」

「難民？風ちゃんが言った、劉備を慕ってついていったって人たちのことかなー？」

「恐らくな。しかし厄介なことだな……」

「一般人を盾にするとは、破廉恥な！！」

「全くだ！劉備軍め、すぐに私の斧で粉碎してくれる！」

夏侯惇と華雄が意気込む。

「別に盾にしてるわけでは無いだろう。恐らく必死に逃がそうとしているのではないか？劉備が庶人を盾にすることはあり得んだろう。……しかしやりにくいことには変わり無いがな」

「このまま攻めたら、一般人まで巻き込んだんじゃないですかねー。しばらく様子見ですかねー？」

「そうだな。……姉者、華雄、それで構わんな？」

「構わん。私だって、力を持たん人間を巻き込むのは好かん」

「私も華雄と同じだ。……我が軍は、このまま敵を追尾だ」

「了解した。……全軍、敵の動きに速度を合わせる！状況の変化があるまでこのまま敵を追尾する！」

『応っ！！』

劉備軍 side……

「……来た。後ろ。曹操の軍」

「予想より早いですね……まずい……ですかね」

「……まだ大丈夫。敵来ない」

「来ない？……まだ攻撃をしてこないということですか？」

「……………（コクッ）」

恋は自信を持った目で頷きます。

「……………敵のこと、考える。……………分かる。……………兵以外とは、戦いたくない」

なるほど、兵以外の無抵抗な人間を必要以上に殺しては、華琳……いえ、霸王曹操の風評に傷がつく……ですか。

「恋の言う通りですね。……………長坂橋までは何とか大丈夫そうですね」

「……………（コクッ）」

恋にしては素早い返答……というか、反応でしたね。

曹操軍 side……

「ぐぬぬ……まだか!? まだなのか!？」

「落ち着け華雄。先ほどのまま追尾と決めただけではないか。姉者ですら落ち着いているぞ」

「しかし秋蘭、敵が目の前に居るのにも関わらず攻撃をしないのはかなり精神的にくるぞ？」

「華雄、気持ちは分かるがもう少し待て。……確かこの先に長坂橋という橋があつてな、そこは深い崖になっているからな、恐らくそこで事態は動く」

「ぬ? 本当か? ならばそこまで我慢するとしよう」

「ああ、そうだな」

劉備軍 side……

「ねね、一般人の様子は？」

「無事に橋を渡りきり、距離を稼いでおりますぞ！陣地の構築も
ぱーふえくと』です！」

……最近、やけに劉備軍陣営内で横文字が流行ってますね。
まあ今はそんなことを気にしている場合じゃないですけど。

「ありがとうございます、ねね。鈴々、恋、霞、準備完了です！部隊を反転させます！」

「……………」

「分かったで！」

「りょーかいなのだ！じゃあ全員、まわれー右！」

『ザッ……………！』

足音が揃い、全軍が武器の抜刀準備をしているのが分かりました。

「牙門旗部隊は、鈴々と恋、霞とねねとお兄ちゃんの旗を力一杯立てるのだ！」

「この戦いは勝つための戦いではなく、守るための戦いです！出来る限りの時間を稼ぎ、後ろにいる人々を守りましょう！」

『応っ！！』

曹操 side……

「前方、劉備軍が橋の向こうで反転しております！」

「よし！やっと戦う気になったか！」

「そのようだな…。敵の旗は？」

「はっ！！牙門旗には梅の文字、その横に、張が二つと陳、呂であります！」

「梅沢に張飛に張梁、陳宮と呂布……か。これはかなり厳しいな……」

「張梁に呂布だと？アイツらも無事だったのか……」

「ああ。虎狼関で梅沢に倒され、拾われたらしい。だが華雄、昔の仲間だからといって手を抜くなよ？」

「そんなことはせんさ。アイツらとは一度本気で戦いたかったからな」

フンツと鼻をならして華雄が言った。

「それならいい。奴らを突破して、そのまま劉備の頭をあげるぞ」

「」「」
「」

「全軍抜刀！！」

『ジャキ……』

夏侯惇の号令で曹操軍が揃って抜刀した。

「曹猛徳の霸道を邪魔する奴らを蹴散らせ!! 全員命を惜しむな、
名を惜しめ!!」

『応っ!!』

「突撃い つ!!」

『おおおお つ!!』

劉備軍 side……

「皆、行くのだ!」

「全軍抜刀や!!」

「……敵、斬る」

『応っ！！』

「行きますっ！！贄殿遮那！！」

懐の長刀『贄殿遮那』を抜き放ち、私は真っ先に橋の向こうの敵に突っ込みます。

「…………行く！」

「うちの最強の攻撃、受けれるもんなら受けてみい！！」

「行くのだあ　っ！！」

私の右後ろからは恋、左後ろからは霞、真後ろからは鈴々が突っ込みます。

「はああっ！！」

『ドシユっ！！』

「ぐわぁっ！！」

正面に来た曹操軍の兵士三人を左下から右上に切り上げて纏めて倒します。

「で、出たぞ！最強の天の御遣いだっ！！」

「か、数で当たれ！！」

曹操軍の兵士たちが動揺しつつも私を囲います。が、

『ズシュッ！！』

『ブウンっ……！！』

『グシュッ！！』

「……こっちもご主人様だけじゃない」

「そっいつにっっちゃ！！うちらも混ぜるや！！」

「鈴々だつて負けないもんねー!!」

恋、霞、鈴々の三人が私の周りにいた、二十程の敵を僅か数秒で片付けました。

「さあて、暴れるでえ………どんどんかかって来いや!!」

「……………恋たちは、無敵」

「鈴々たちが皆を守るのだ!!」

「ねねの援護もありますぞ!!全弓兵、敵部隊後方に向かって一斉射撃です!!」

『恋っ!!』

『ユン、ユンユンユン………』

「ぐがっ………!!」

「おせめめっ………!!」

橋の向こうに居るねね達が弓で援護してくれました。

「くっ……流石は劉備軍最強の將軍たちか……。お前たちは下がれ！
お前たちでは相手にならん！」

「……でて来ましたか。久しぶりですね、夏侯惇、夏侯淵、そちらは許緒ですね？そして……まさかとは思いましたが、華雄」

「ふ、久しぶりだな、梅沢よ。華琳様も私たちも、お前に会いたかったぞ？」

「し、秋蘭！私は別に会いたくなど無かったぞ！／＼／」

夏侯姉妹……。

相変わらず騒々しい子達ですね……。

「梅沢直斗！お前の軍に汜水関で受けた屈辱は忘れてはおらん。こうして今、華琳殿のもとに仕えて力をつけた！今度こそ、勝たせてもらう！」

「ボクも負ける気は無いよ！」

華雄と許緒が武器を構えて言いました。

「武将の数は四対四……。ならば、霞は華雄、恋は夏侯淵、鈴々は許緒、私は夏侯惇と戦います！良いですね？」

「一騎討ちだと？……面白い、こちらとて、華琳様の為にも負けん
！！」

.....

「ほな華雄、行くで？」

「ああ、……来い！！！」

「手加減は無しや！！でりゃあ　　っ！！！」

霞が華雄に神速の突きをかます。

「ぐっ……。前よりも、速い……！！！」

「当然や！アンタが曹操軍で鍛えてたように、うちもまた直斗のもとで毎日必死に鍛えてたんや！！」

「ぐっ……。だが私も負けん……。喰らえ、張梁！！」

『ブウンっ！！』

「あぶなっ！！」

華雄が斧を横に振るう。それを霞は後ろに跳んでかわす。

「まだまだアっ！！だりゃあっ！！」

『ブウンっ！！』

今度は上からの降り下ろし。

「当たってたまるかいつ！！らあっ！！」

霞は右前方に跳び、華雄の左後ろに着地。そのまま

「今度はこっちの番や！！直斗直伝、『隼突き』や！！」

『シュツ、シュツ』

「なっ！？ぐっ、ずあっ！！」

風を斬る音は二発。しかしその突きは計四発放たれていた。華雄が防ぎきれたのは最初の二発まで。後の二発は脇腹と左の太ももを掠めた。

「どっやー！！」

「くっ……。なかなかやる……。だがまだだ！行くぞ、張梁お！！」

「来いや、華雄ウー！」

.....

「まさかこんなところで最強と名高い呂布と戦うことになるとはな」

「……手加減は、しない」

「ああ、こちらもだ!!行くぞ!!」

『フツ……!!』

「……!速い……でも、見切れる」

いつの間に夏侯淵が握っていた三本の弓矢が手から消えており、恋へと向かっていた。が、恋は少し驚いただけで、冷静に見切り、三本ともを避けた。

「やるな、呂布」

「……お前も強い。でも、恋に弓矢当たらない」

「それはどうかな?今のは三本だったが……、五本同時ならどうだ
!」

夏候淵は素早く背中の中の弓矢を五本抜き取り放つ。

「……けっこうキツイ。……でも、避けきれないなら」

『ブウンっ！！』

「……切り裂くまで」

「……ほう……。まさか今も見切られるとはな。が、まだまだ行くぞ！」

「……来い」

……

「でりゃあ　っ！！」

「ひょい」

『ズドーンっ！！』

「ぐっ……。攻撃が当たらないなんて……」

「へへーん　どんなに重い攻撃も、当たらなければ無意味なのだ！」

「何をー！？生意気なっ！！」

「鈴々は生意気じゃ無いもんねー！生意気っていうのは、実力が伴ってない奴が大きな口を叩くことを言うのだ！鈴々は強いから、生意気じゃないのだ！！」

「ぐっ……」

「今度はこっちから行くのだ！てりゃあー！！」

『フツ！ー！』

「速い……！のに……な、なんて……重、さ……！！」

「まだまだ鈴々の力はこんなものじゃ無いのだ！ちびぺた春巻きには負けないのだ！」

「なっ！？ちびぺた春巻きって、人を人気食堂の大人気料理みたいな名前で呼ぶな　っ！！」

「にゃ？やつとまともに戦えそうなのだ！！」

「行くぞ！」

「行くのだ！」

.....

「じつして武器を交えるのは二回目ですか…ね！！」

『ギーンっ！！』

「そっだ…な！！だが…あの時のように簡単にあしらえると思っ
なよ！！？」

『ギーンっ！！』

「当たり前ですよ！！ですがこちらも……鍛錬は欠かしてませんか
ら……負けません……よ！！はあっ！！……『隼斬り』！！」

『ビュンビュンっ！！』

「なっ……！！一度に二回の斬撃だと……！？」

「その通りです！！似たような技はまだありますけど……例えば……

…『秘剣、燕返し』！！」

「……！！右か！！そんな斬撃なら……な、何！？」

夏候惇は私の右からの斬撃のみを受け止め、同時に放たれていた左からの斬撃には気付くことが遅れ、ギリギリ大剣で防いだけれど受けきれず二メートルほど吹き飛びます。

「ふう……。まさかあのタイミング……頃合いで気づいて受け止めるのに成功するとは……」

「受け止めきれてはいないが……今ので右腕が痺れて使えん……」

「それではいくら何でも勝負はついています。しかし、諦めないん

でしょっ!」

「……ふっ、当たり前だっ!」

「ならば……これで終わらせます!」

「やられてたまるかっ!」

そう言って、私と夏侯惇が互いに斬りかかろうとしたとき

「全員、止まりなさい!」

霸王である少女の、覇気が痛いほど感じられる叫びが聞こえたのでした……。

長坂橋の戦い（後書き）

実は今回、10000字辺りまで書いて間違えて消しちゃったんですよね…（泣）

頑張って書き直して、やっとこさの更新ですよ（笑）

ホントなら8月の2日くらいには投稿できてたのになあ…。（。。）

出来れば感想、アドバイスお願いします！

蜀へ…（前書き）

今回はあの西涼娘たちが加わります！

ではでは…

蜀へ…

「全員、止まりなさいっ!!」

「か、華琳様っ……………!?!」

夏侯惇が振り返って言いました。

「久しぶりね、直斗。会いたかったわよ?」

「ええ、こちらもこんな形でなければ会いたかったですかね…」

「そう。…………春蘭、秋蘭、季衣、華雄、こちらに戻ってきなさい」

「はっ…………」

「御意…………」

「わ、分かりましたあ…………」

「ちっ…命拾いしたな、張遼よ…」

「アホ、こっちの台詞やで……！」

フンツとお互いに皮肉を込めて言い合う霞と華雄。

「恋、鈴々、霞。大丈夫でしたか？」

「……当たり前」

「余裕なのだ！」

「ちいっとばかり危ない時もあったけどな」

無表情で恋が、ニシシと笑って鈴々と霞が言いました。

「それで華琳、この後私たちをどうするつもりですか？」

私は鋭い目付きで華琳を睨み付けます。

「……今日のところは引いてあげるわ。その代わり、久しぶりに少しだけ貴方と話をさせて」

少しトロンとした目付きで顔を赤らめた華琳が私に言います。

「話……と言いますと?」

「警戒しなくて大丈夫よ。ただの世間話だから。貴方に会いたいと言ってる子がいるの。私も交えて話したいだけよ」

「……嘘ではなさそうですね」

「ふふ、当たり前よ。こんなことで嘘をついて貴方に嫌われたく無いものね。疑うならば、その呂布や張遼、張飛に陳宮を同席させても構わないわよ?」

うちの陣営の最強の武将たちを同席させても構わないとなると、大丈夫そうですね。

「まあ安全なんかもしれへんけど、一応うちは同席させてもらって」

「……恋も」

「鈴々もなのだ！」

「ねねも同席するですぞー！」

「あらあら、貴方も愛されているのね？」

「まあ、お互い様ですよ」

苦笑しながら互いに言いました。

「で、私に会いたいと言ってる子、とは？」

そう私が聞くと、

「この子たちよ。風、稟。こちらへ来なさい」

と、華琳が言いました。

「……………ぐー」

「こ、こら風、寝るな！華琳様がお呼びだ！」

「……おおっ？なかなか呼ばれなかったのでつい〜」

「全く…。すみません華琳様。お呼びですか？」

「ええ。後、桂花も話したいのなら隠れていないで出てきなさい？」

「う…。わ、分かりました／＼」

照れてれというかモジモジしながらチラチラとこちらを見つつ出てきた筈イク。

なるほど、さつきから感じていた視線は筈イクでしたか。

「稟、風。この子が梅沢直斗よ。直斗、こっちの眼鏡をかけているのが郭嘉、人形を頭に乗せているのが程イクよ」

「っ！？」

「…………おおっ？」

郭嘉と呼ばれた少女は、まさか、とでも言いたそうに、程イクと呼ばれた少女は、ほえ、と関心したように私を見つめます。

「ほ、本当に貴方が梅沢直斗なのですか？どう見ても女性にしか見えないうか…、でも確かに華琳様が気に入るような美貌の持ち主ではあるが…、いやしかし…」

「えーと、一応私が真正銘、劉備軍の天の御遣いこと梅沢直斗ですが？」

「お兄さん…というよりは、お姉さんですかねー？確かにお姉さんを見てますと、うちのお兄さんは役立たずという桂花ちゃんの気持ちも少しは分かりますね？」

「だ、誰が役立たずだよ！！酷いなあ、全く…。あ、久しぶりだね、直斗さん」

私の体をじろじろ眺める北郷一刀。

「（ニコツ）…………北郷一刀殿？」

「(ドキッ／＼)な、何かな……?」

……私に告白されるとでも思っているのでしょうか?顔がニヤつきすぎます……。

「ニヤつかないで下さい、気持ち悪いですね…?」

「応お忘れかもしれませんが、見た目はほぼ、『これはゾンビですか?』のセラフィムですから(胸は無いですけど…)言っことは言っておかないと…」

「く…ぷぷぷ…あははっ!!やっぱりアンタは誰が見ても気持ち悪いんじゃない!!ど変態男!!」

「ぐはっ……!!まさ…か、直斗さんにまで言われる…とは…」

そんな姿もまた、気持ち悪いですね…。そんなことよりも…と、

「久しぶりですね、筍イク?」

「え、ええ。ひ、久しぶりね、梅沢直斗…。そ、その…、元気だったかしら？」

筈イクが下を向いて、上目遣いで尋ねてきました。

「はい、筈イクも元気そうで何よりですね？」

その姿が可愛らしかったので、ニコツと笑って返事をしました。

「~~~~っ!! / / /」

筈イクが顔を真っ赤にして目を見開いています。

「おやおや、男嫌いの桂花ちゃんがいと也容易く落ちちゃいましたねー？ねえ、稟ちゃん？」

「…… / / /」

「稟ちゃん……？ふむふむ……まさか笑顔一つで稟ちゃんまでも落とすとは…、危険な殿方ですねー、お姉さんは」

ふがふがとアメをくわえながら長い台詞を話す程イク。

「まあ直斗の笑顔はそこらの武器よか危険やからなあ……。うちもその笑顔は何回見ても顔が紅潮するもん：／／／」

霞が横から言いました。

「そうなの？流石は私の直斗ね。美しいわ」

「華琳のモノになった覚えは無いですが…、まあいずれ華琳は私のモノにしますけど」

「あら、そう？奇遇ね。私も貴方を私のモノにするつもりよ。……いつか次に戦うとき、勝ったものが相手を手に入れる。……そういうことね？」

「構いませんよ？絶対華琳を私のモノにしてみせますから」

「熱烈な告白、嬉しいわ。でも私も負けないから、覚悟しておきなさい？では、今日のところはこれで。行くわよ、春蘭、秋蘭、季衣、華雄桂花、凜、風……あ、あと一刀もね」

「ふう…ついでかよ……」

「忘れられなかっただけ感謝なさい。……それじゃあね、直斗。次は貴方の全てを私のモノにしてみせるわ」

「じちらこそ」

くるつと後ろを向き、歩き出す華琳。それについていく曹操軍。

「……はあ、何とかなったなあ、直斗」

「そうですね…。早く皆に合流しますかね？」

「では皆の者、益州に向かって全速前進なのですぞ!!」

『応っ!!』

私たちもまた、華琳たちに背を向け、益州へと行軍を始めたのでした…。

「あ、直斗おゝ、さっき曹操のこと口説いてたの、後で桃香たちに

チクつとくからな」

「え、っ……？」

一方その頃、先行している桃香たちは、益州と荊州の国境沿いにある、諷陵という城の前にいた…。

「桃香様！先ほどの使者の言う通り、城門が開いたようです」

「ありがとうございます。……でも、素直に入城しちゃって大丈夫なのかなあ？」

「そうですね…。まずは先行して星さんの部隊に入ってもらいましょう」

桃香の不安に、朱里が答えた。

何故、朱里が星を先行させるかというところ、今この場にいる将の中で、星が最も予想外の場合に対しても柔軟な思考で対応出来るからだ。

「了解した。……何かあればすぐに対応できるようにしておいてくれ」

「ああ。……気をつけてな、星」

星に対して愛紗が言った。

「うむ……」

そう言っただけ星は部隊を率いて入城していった。

「大丈夫かなあ……？」

やはり心配そうな桃香。

「大きな心配は無いと思いますし、星さんなら余程のことが無い限り大丈夫だと思います」

「すでに民衆の心は益州の太守の劉璋さんから離れ、新たな保護者を求めていますから。桃香様の持つ声望を慕いこそすれ、拒否することは無いかと」

最初に朱里が、続けて雛里が言った。

「そうだったら良いんだけど。……愛紗ちゃん、後方の様子は？」

「……まだ何も連絡は来ておりません」

「そう……」

「きつと……大丈夫です。ご主人様はお強いですし、恋さんや霞さん、ねねちゃんに鈴々ちゃんもついてますから。みんな無事に戻ってきてくれますよ」

朱里は桃香の不安を消し去るように言った。

「……うん、そうだね」

と、桃香が呟いたその時

「申し上げます！」

一人の兵士が桃香たちのもとに駆けつけて来た。

「なんだ！」

愛紗は兵士に尋ねる。

「はっ！北方に砂塵を確認しました！」

「ほ、北方？ご主人様たちが戻ってくるとしたら」

「東方から砂塵が上がる筈です。……一体どこの部隊のものでしょ
う？」

桃香の言葉に雛里が続けて言った。

「分らん。……全軍警戒態勢！先行している星にも伝令を出せ！」

「はっ！」

愛紗が命令を出し、伝令に来た兵は走っていった。

「桃香様はこのまま待機を。……私は雛里と共に北方へ軍を移動させ、状況を確認します」

「うん、わかった。……気をつけてね、愛紗ちゃん、雛里ちゃん」

「はっ！……雛里、頼む」

「はいっ！」

愛紗と雛里は急いで支度を整えて北方へ向かう。

「……皆、居なくなっちゃったね」

「けど、皆ちゃんと帰ってきてくれます。……私はそう信じてます」

「私もだよ……」

.....

「雛里、部隊の展開は？」

「完了しました。……でも、一体誰の部隊なんでしょうか……？」

「分かん。……もしかしたら、曹操の別動隊かもしれん。……斥候は？」

「部隊の移動と同時に放ちました。おっつけ情報が入ると思うのですが……」

と、雛里が言った時、噂をすれば影。……といつかのように、斥候が戻ってきた。

「関羽様！前方の部隊の旗標を確認いたしました！」

「うむ！……で、旗標は？」

「旗標は…馬!！」

「馬?馬というと」

「涼州を根拠地とする、西涼の馬一族の可能性が高いですね。……でも、何で益州に…?」

「侵攻してきたというのか?……全軍警戒態勢!相手の動きが分からん、油断はするな!」

斥候の報告に、愛紗と雛里は戸惑いつつも、冷静に判断をする。

『はっ!』

愛紗の命令の通り、全軍が警戒態勢をとる。

「雛里。……相手の出方によってはこちらから先制攻撃を掛けたいのだが……」

「問題は無いかと。でも……あっ!見てください。相手に動きがあ

るようですよ？」

雛里が敵陣営を指差し言う。

「全軍、進軍を止めて……なんだ？誰か来るな」

「軍使でしょうか。……何か要求があるのかもしれませんがね」

「ふむ。雛里、軍使には私が会おう。部隊の指揮を頼むぞ」

「了解です。……愛紗さん、お気をつけて」

「ああ……」

……

「アンタが、あの部隊の代表者か？」

茶髪に特徴的な太い眉毛をした美少女が愛紗に尋ねる。

「そつだ。……お前は何者だ？」

愛紗が尋ねると、茶髪美少女はこう答えた。

「私の名前は馬超。字は孟起。……西涼太守、馬騰ね娘だ！」

そつ、この茶髪美少女は馬超孟起である。

「馬超……馬超……はっ！もしかして、あの錦馬超か！？」

「おっ！アタシって結構有名なんだな」

「ああ。旅人たちが噂をしているのを耳にしたことがある。見目麗しく、義に篤い西涼の姫。その槍捌きは白銀の流星と謳われ、一騎当千の強さを誇る……と」

「う、そ、それは言い過ぎだと思うな。……背中が痒くなってくる」

顔を赤くして照れている馬超。

「民が謳うということは、それだけの力を持っているということだ。
……錦馬超。貴女に逢えて嬉しく思う」

フツ……。と笑って愛紗は馬超に言った。

「そ、そうか？そりゃ良かった……。ははは……。それよりさ、アタシのことは良いから、アンタの名前、教えてくれよ」

「我が名は関羽。字は雲長。徐州州牧、劉備と梅沢直斗が一の家臣にして、彭城の青龍刀」

胸を張って愛紗が言うと、馬超は目を見開いて驚いた。

「か、関羽だって！？アンタがあ有名な、美髪公、関雲長かつ！
？」

「び、美髪公？何だ、それは。……そんな呼び名は初めて聞いたのだが」

キョトンとした愛紗に、馬超がこう説明する。

「西涼では既に伝説扱いだぞ？天の御遣いに並ぶ艶やかな黒髪をなびかせ、主に仇なす敵を討つ正義の武将ってな。そっぴいや確かにアソタのとこの御遣いも綺麗な黒髪してたな」

直斗の姿を思い出しながら馬超が言った。

「うむ…。ご主人様と並べられると何だか照れるな…。って、ご主人様に会ったことが有るのか？」

馬超に食いかかるようにして愛紗は聞く。

「ん？ご主人様って、梅沢直斗のことか？」

「あ、ああ、そっぴい」

「あるよ。ほら、反董卓連合のときにさ、母様がいけなかったから、代わりにアタシが行ったんだ。その時にな。アタシたちはあんまり前に出たりしなかったから、他の陣営とは、あまり交流してないんだよ」

「なるほどな。納得だ」

ふむふむと愛紗が頷く。

「それにしてもさ、徐州にいるはずのアンタが、そんな大軍を引き連れてどうしてこんなところに居るんだ？」

「色々と事情があつてな。……馬超殿こそどうしたのだ？西涼にいるはずの貴女が、少数とはいえ部隊を引き連れ益州にいるとは」

「こつちも色々と、事情があるんだよ」

「そうか……」

「……」

「……」

二人ともが黙ってしまい、会話が止まってしまった。

「……話、進まないな」

「そうだな」

「腹の探り合い、やめないか？」

「……ふふっ、そうだな。私も相手の腹を探りながらの交渉は苦手だ。素直に状況を話すことにしよう」

「それはアタシもかな。素直に状況を説明するよ」

馬超の提案で、ようやく二人の間の微妙にピリピリとした空気が無くなった。

「うむ。……まず、私たちの状況だが、……徐州を曹操に奪われてしまった」

「何っ！？曹操っ！？」

愛紗の言葉に馬超が驚愕する。

「ああ。大軍団に国境を突破されてな。……劉備様と劉備様やご主

人様を慕う民たちと共に、この益州へと逃げ延びてきた、……とい
う訳だ。……益州は、横暴な太守により、民は苦しみ国内は乱れに
乱れていると聞いた。だから」

「ぶんどつちまおうって訳か」

「言葉は乱暴だが、飾っても意味は無し……か。お主の言う通りだ」

「……そうだったのか」

馬超が呟いた。

「ところでそちらは？後ろの部隊には、馬騰殿の牙門旗は見えんよ
うだが……」

「……馬騰は死んだよ」

「何っ！？西涼の象徴とまで言われた、あの馬騰殿が殺された……？」

「ああ。……西涼にまで手を伸ばしてきた曹操に対抗するため、軍
を率いて戦い、負けちまって……な」

「そっか……」

「その後、アタシらの一族は散々に打ち散らされて…少数の生き残り」と逃げ続けた結果、気がつけば益州って訳さ」

「これからどうするのだ？」

この状況から馬超が行けるような場所は恐らく無いだろうと思ひ、愛紗は尋ねる。

「分からないよ。……今はとにかく、糧食が足りないんだ。関羽殿、少しでも良いんだ。何とか都合してくれないか？」

馬超は必死に愛紗に頼み込む。

「…難しい話だな。一応我らはご主人様の私財のお蔭で何とか食事には困っておらんが、今は流浪の身。この先どうなるか分からん。少しは分け与えられるかもしれんが、馬超殿もまた流浪の身。次の町までもつほどは渡せんだろうな」

「そっか。……やっぱりそうだよなあ。……この先どうすっかなあ」

「行く宛は？」

「そんなの無いよ」

「……ならば、こちらの陣営に来ないか？」

「へっ？」

愛紗の思いがけない提案に、馬超は拍子抜けした。

「我らの元で、将として働かないか？そうすれば、食料も融通できる」

「食べ物と引換に、アタシを部下にするってか？」

「部下……か。確かに形式上はそうなるかもしれないが、我らの陣営は少し変わっていてな」

「どじいじいことだ？」

「我らが主、梅沢直斗様と劉備様は、上下関係を嫌っていてな、皆平等な関係なのだ。まあ今一度、ご主人様に会ってみてよく話すといっ」

「そうだな。あの『黒き武神』になら、アタシの武を預けても良いかもな。分かった。会ってみるよ」

「ああ。しかし何なのだ、その『黒き武神』とは？」

「はあ！？アンタ、知らないのか？今や大陸じゃどこに行っても知らない人は居ないくらいの伝説だぞ？天の御遣いこと梅沢直斗。その者は黒き長髪をなびかせて、幾千、幾万の敵を僅か一騎にて討ち取らん。ってな」

「な、なんと…。流石はご主人様だ。大陸中の噂とはな」

「そうだな。まあ、虎牢関でも、あの呂布と張遼を一人で倒しちまうくらいだしな。大陸最強にして最良の王ってか？」

ニシシと馬超は笑いながら言った。

「うむ。それでは案内しようか」

そう言つて二人は全軍を率いて諷陵へと向かつて行つた。

.....

「.....桃香様よ、いつまでここにいらつしやるおつもりだ？」

諷陵へと入城を終えて軍を休め、日も暮れた頃、城壁の上から未だ姿が見えぬ直斗たちと愛紗たちの姿を探している桃香。その後ろから星が声をかける。

「ご主人様たちと愛紗ちゃんたちが帰ってくるまで、ここを動くつもりは無いよ」

「しかし...少し風が出てきた。そろそろ屋内に入らねば、体調を崩しますぞ?」

「大丈夫。身体はちょっと寒いけど、心の中は真っ赤に燃えてるから」

「だから寒くない…と?」

「うん」

「ふむ。……理想に燃える女というわけですな」

「心配に燃える女でもあるよ?」

「恋に燃える女とも言えますかな?」

ふふふつと星が笑いながら言った。

「も、もう、星ちゃんったら!」

「桃香様、まだ星は落ちてはおりませぬ。皆、無事に帰ってくる」

「あれ?星ちゃんって、天文に詳しくたって?」

「いや。……しかし、あれほどの人物たちに何かあれば、天とて無反応では居られまい。と、そう考えているだけです」

「そっかあ。そうだね。何かあれば、すぐに分かるよね」

「ええ。そして今は何も無い。それが無事である証拠ですよ」

「うんっ！…！」

ニコツと笑って返事をする桃香。

「では、納得していただいたところで、そろそろ屋内に入りませんか？」

「それはヤダ。ここで待ってる」

ぷうっとならしたを膨らまして意地を張る桃香。

「うーむ。……しかし、いつ頃か帰還になるか、分かんのですよ？」

「それでも待つてる。……今の私には、それしか出来ないから」

「ふむ。しかしすなあ
」

と、星が言いかけた時

「申し上げます！ただいま殿が戻られました！御遣い様、張飛様、呂布様、張遼様、陳宮様も全員ご無事との報告。民間人も皆無事に到着しました！」

一人の兵士が駆けつけて、そう言ったのであった。

「桃香様！」

「うんっ！…！」

二人はそれを聞き、すぐに駆けつけて行ったのであった…。

直斗side……

「ご主人様っ!!」

『ガバツ!!』

ようやく諷陵に到着し、中に入ると、その瞬間に桃香が私の胸に飛び込んで来ました。

「おっと…」

「ご主人様、ご主人様、ご主人様あゝ……!!」

私の胸に顔を擦り付けて泣き出す桃香。

「ただいま、桃香」

ゆっくりと桃香の頭を撫でながら言いました。

「心配……かけましたね。でも、ちゃんと桃香の元に帰って来ましたよ」

「うん……うん……良かったよお……！」

「ほら、泣いてしまつと可愛い顔が台無しですよ。」

「はう……。でもね、嬉しくて……」

「ええ。私も、無事に皆と再会できて嬉しいです。……皆、お疲れ様」

「主こそ。……それに鈴々、恋、霞、ねね。……ご苦労だったな」

心なしか、星の瞳にも僅かながらも涙が浮かんでいる様子。

「無問題なのだ！」

「……」
「……」
「……」

「まあこれしきのこと、ねねにとっては朝ご飯前ですからなー」

「ははっ、よう言っわ。実は結構ビビったくせにい」

「なっとななっ！そ、そんなことは微塵も無いですよー！」

「ぶはっ！ま、そういうことにしといたるわ」

賑やかな雰囲気の流れます。

「ところで主よ。再会の感動に浸っているとこ悪いのだが……」

「ええ。状況説明をお願いします」

そう言うと、今まで無言でぐずぐず泣いていた（本人は気づかれてないと思っっているようです）星の横に立っていた朱里が口を開きます。

「はい。現在私たちは益州の国境近くにある、このお城に入城しています。入城は速やかに、そして穏やかに進みました。……これは思った以上に州牧である劉璋さんから人心が離れている証拠です」

「戦闘は？」

「全くありませんでしたぞ。寧ろ場内の住民全員が諸手をあげて歓迎してくれたくらいですからなあ。最早劉璋を認める者は居らぬのかもしれない」

今度は星が答えました。

「それは好都合で。……そういえば愛紗と離里はどこ？」

先ほどから二人の姿が見えませんか…。

「北方に現れた謎の部隊の確認に向きました。定期報告の伝令は届いていますし、ご健在ではあると思います」

謎の部隊…？

「そういえば、帰ってくるのが遅いね？」

「うむ…。私が部隊を率いて迎えに行こうか？」

「……いえ、どこやらその必要は無いようです」

「え？どういふこと、ご主人様？」

「どういふことですよ、桃香様」

そう言って現れたのは

「愛紗ちゃん！雛里ちゃんも！」

そう、愛紗と雛里でした。

「ただいま戻りました、桃香様。そしてお帰りなさいませ、ご主人様」

「あわわ……。ご主人様、お帰りなさいでしゅ」

落ち着いた様子の愛紗と、安心してしまっただけ、噛んでしまっている雛里。

「二人とも、ただいま。で、謎の部隊とは…？」

「あ、はい。それはですね、あの馬超でした。世に名高い錦馬超です」

「おおっ？馬超って、その槍、白銀の流星の如く……とかつて言われてる、あの錦馬超なのだ？」

「ああ。あの錦馬超だ」

「でも、その馬超さんがどうして益州に？確か馬超さんって、涼州牧の馬騰さんの娘さんでしたよね？」

と、朱里が言った時、一人の少女が入って来ました。

「馬騰は死んだよ。曹操軍に殺されたんだ」

「馬超。待っていてくれと言ったはずだが……」

「あまりにも遅かったからさ、何か揉めてんのかと思って……。しゅめんな」

あはは、と笑って馬超が言いました。

「ううん、大丈夫だよ。貴女が馬超さんだね。私は劉備。字は玄德
！よろしく」

「よ、よろしく」

「それで、その錦馬超がどうしてここに？」

星が尋ねます。

「戦いに負けちまって流浪しているとき、関羽に会ってね」

「勝手ながら、我らの仲間にならないかと勧誘したのです。そのた
め一度、ご主人様と桃香様に会ってほしいと」

馬超の言葉に愛紗が続けて言いました。

「そうですね。……久しぶりですね、馬超（ウマセウ）」

「あ、ああ。ひ、久しぶり…ですね…//」

何故に敬語？と、私を含めた劉備軍陣営の全員が頸を傾げていると、

「クスクスツ、お姉さまってば、お顔真つ赤にして恥ずかしがっちやってえ〜」

と、見た目が少しサイズが小さい馬超のような少女が入って来ました。

「た、たんぽぽっ！！余計なことを言うなっ！！」

「えへへっ、はあい、ごめんなさい」

「馬超、この子は？」

恐らく今、全員が聞きたかったであろうことを、愛紗が代表して馬超に聞きました。

「ん？ああ、こいつは馬岱。アタシの従妹だよ」

「暨さんよろしく〜」

ニコッと笑って右手を挙げて言う馬岱。

「ぶぶっ、っ、よろしく、馬岱」

「よろしく〜」

私と桃香が馬岱に言います。

「それでお姉さま？仲間になるの？」

「まだ分からなくて。先走ったこと言うな」

「えー。でもたんぽぽ、もうお腹減らして歩き回るのイヤだよぉ〜」

「……」

「耐える。それが西涼の武将の心意気だろ！」

「そんな熱血体育会系には付き合いたくなぁ〜い」

「なに軟弱なこと言ってるんだ。それぐらい、気合いで我慢だ！」

「ぶーぶー」

ほっぺたを膨らまして文句を言う馬袋。どこかしら桃香に似ている
と思ったのは気のせいでしょうか？

「馬袋、お腹がすいてるんですね？だったら、ご飯くらい出します
よ」

「ホントっ！？ありがとうー」

「いら、たんぽぽっ！ー！勝手な行動するなって言っただろ！」

「……そうは言っけどなあ、どっせこの先どっなるか分からないん
でしょ？」

「そりゃ……そうだけど」

「だったら、ここでお世話になっても良いかなってたんぽぽ思っ
ただけー」

「んー……」

馬岱は仲間になることに賛成の様子。一方馬超は反対という訳では無さそうですが、未だに決めかねている、といったところでしょうか。

「別に家臣という訳では無く、仲間として私たちの理想に手を貸しては頂けませんか？」

私は馬超にそう言いました。

「……理想って、どんな？」

「みんな仲良く、平和に暮らせる世の中を作ること！それが私たちの理想だよ」

その馬超の問いに桃香が即答します。

「今の世の中、どっかおかしいのだ。力があればどんなことでもまかり通るのなら、力の無い人たちには地獄でしかないのだ」

「だからこそ、圧政に苦しみ、日々の暮らしの中で笑顔を浮かべることすら忘れてしまった人々を助け、……そして共に笑って暮らしたい。私たちはそのために戦っているのだよ」

鈴々と星が、桃香の理想をより具体的に言います。

「話は分かる。が、力でその理想を叶えようとするアンタたちも、傍から見れば、他のやつらと同じじゃないのか？」

「それは重々承知です。しかし、だからといって何もしないのはおかしいでしょう?」

「そんなことして、アンタらに何の得があるのさ?」

馬超は尋ねます。

「強いて言うならば、満足と笑顔ですかね?」

「満足と……笑顔?」

「ええ。私たちにとっては、力を手にすることよりも、皆の笑顔が

見れることが大事です。∴勿論、その皆の中には馬超、馬岱、貴女たちも入ってます」

「な、なんか照れるな…。でも、そういうのも、悪くないかな。良いよ。アタシの真名と力、アンタに授けるよ！アタシは馬超、字は孟起。真名は翠だ。よろしくな」

「ええ、よろしく、翠」

「たんぽぽの真名と力も、授けるね！たんぽぽはね、馬岱！真名はたんぽぽだよ。よろしくね、桃香様、ご主人様」

「ご、ご主人様あ！？」

「だって皆ご主人様って呼んでるもん。だからたんぽぽもご主人様って呼ぶの」

にぱーっと無邪気な笑顔で言ったんぽぽ。

「う……じゃあアタシもそう呼ぼうかな…？」

「好きに呼んでくれて構いませんよ」

「じゃあ、ご主人様、桃香様、今後ともよろしく！」

「よろしく、翠、たんぽぽ」

「よろしくね」

私と桃香の二人による自己紹介の後、それを皮切りに皆がそれぞれの真名を交換しました。

新たな仲間、五虎將軍が一人の馬超孟起と、その従妹の馬岱。

可愛らしい二人を迎え、私たちは一晩中宴を楽しんだのでした。

蜀へ…（後書き）

なんかアレですね。

華琳にしても桂花にしても、その他諸々にしても、直斗にメロメロ過ぎじゃね？とか思いつつ書いてました。

戦闘描写が無い分、恋愛要素を入れてしまったのでしょうか。

たんぽぽと翠は割と好きなキャラなんで、そこそこ出していききたいなと思います！

感想、アドバイスお願いします！

最後の五虎將軍、黄忠漢升

諷陵に着いてから三日程経った朝の軍議のこと。

「ねえ、ご主人様。今後はどうやって益州を平定していくの？」

桃香が私に尋ねてきました。

「そうですね、私が今、考えているのは、黄忠殿に手を貸して頂きたいと」

「黄忠さんと言えば、曹操さんのところの夏侯淵さん、孫策さんのところの黄蓋さんに並ぶ弓の名手でしたね」

「人望も厚く、民からも慕われている良き領主だという噂も聞きます」

私が黄忠という名を出すと、朱里と雛里が説明をしてくれました。

「黄忠なあ。……そんな凄い腕の持ち主やったら、そら力も貸して欲しいわな」

「人望が厚いなら、黄忠を仲間に出れば益州の中でもかなり有利に動けるでしょうね」

霞と愛紗が言いました。

「そう言うことです。今回は上手くいけば戦わずに済むかもしれませんし」

「ん？ご主人様、それってどういうことなんだ？」

「たんぽぽも気になるー！」

私の発言を聞き、翠とたんぽぽが尋ねます。

「黄忠はきつと、民を傷つけることを嫌うでしょう。ですのでこちらから話し合いに持ちかければ何とかなるかもしれないから」

「なるほどな。言い方はあれだけど、要は相手の性格を利用して無血開城ってわけか」

「わあ、お姉さまが難しいことをペラペラと……。もしかしてどこか

に頭打った？」

たんぽぽがクスクス笑いながら翠に言いました。

「な、何い〜！馬鹿にするなよ、これでも一応馬一族の当主なんだからな。これくらいはできて当然だ！」

翠が大きな胸を張って言いました。

……目が一瞬釘付けになっちゃいましたけど、誰にも見られて

と思ったのは一瞬で、たんぽぽが私を見てニヤニヤとしているのが分かりました。

732

「ご主人様つてばあ、お姉さまの胸がプルンって揺れたの凝視してたでしょお〜 す・け・べ」

「あ、いや……ごめんなさい／＼」

と、私が謝ったとき、翠の顔は真っ赤でした。

「う……。ご主人様の変態……。昼間からそういうのはあまり良くないよ……／＼／」

「はい。……つい見とれてしまいました」

翠に言われて正直に言っしかない私。

「ば、バカっ／＼／」

「お姉さまってば照れちゃって、ご主人様も、たんぼぼので良かったら見て良いよ？」

「なっ……！？た、たんぼぼ！お前何をっ！！」

「だってえ、たんぼぼはご主人様に一目惚れだし、ご主人様だって年ごろ何だからそういうことに興味があって当然だし。たんぼぼで良かったら、良・い・よ？」

たんぼぼの少し背伸びした色っぽい表情に、自分でも赤面しているのが分かりました。

「っ、こら、たんぼぼ！今は軍議中だぞ！ご主人様も、今はそういう話は無しにしてください！」

愛紗が怒って、たんぽぽは、はあいと残念そうにして誘惑を止めました。

助かったような、残念なような……複雑な気持ちです…。

「で、主よ、黄忠のところにはいつ頃出発するの？」

星が話を本題に戻します。

「そうですね…。朱里、雛里、兵たちの様子は？」

「はい、十分な休息と食事をとり、いつでも出陣出来るようにします」

「今からでも、すぐに出陣出来ます」

「ここから黄忠のところまではどれくらいかかりそうですか？」

「現在の私たちの軍の大きさと練度を考えれば……早くて三日、遅くても五日程でしょうか」

「では、すぐに出陣しましょうか。皆、準備を怠らないように」

『御意！』

.....

諷陵を出て三日。いよいよ黄忠のいる城が見えてきました。

「朱里、城を囲うように、陣を敷いて下さい」

「良いですけど、何か策でも？」

「ええ」

「.....分かりました。では皆さん、お城を囲うようにして、陣を敷いて下さい！いつでも攻撃を開始出来るように弓矢の準備を！」

『応っ！！』

朱里の号令で城を包囲し始める我らが劉備軍。

さてと、では始めますか。

「黄忠殿に申す！私は劉備軍が主にして天の御遣い、梅沢直斗なり！貴女の城は我らが包囲している！我らはこのまま軍略と数により、攻めることも出来るが、黄忠殿や民、兵士たちに無駄な血を流させたくは無い！そこで私と黄忠殿の二人きりで話したい！もし受け入れてくださるのならば、門を開いて頂きたい。我が名に誓って私一人しか参らないと約束する！」

私はこう高らかに宣言しました。

「ご、ご主人様！？」

「はわわっ！！駄目ですよ……！！」

「あわわ……！！」

「直斗お、無茶はすんなや……」

皆がそれぞれに反対意見を出します。が、

「これだけは譲れません！」

私は反対意見を聞き入れない。

「さあ、聞き入れてくれますか、黄忠殿……？」

私は呟きました。

黄忠 side……

「い、黄忠様……如何なさいますか……？」

部下の一人が私に尋ねます。

天の御遣い、梅沢直斗…。

まさか自ら一人で敵陣に入ってくると宣言するとは…。

勿論、嘘の可能性も否定は出来なんでしょう。門を開いた途端、敵軍が一斉に突撃してくる可能性だってあります。

「でも…、あの娘は、何故か信じたくなるわね…」

安全である確証はない。……でも、その時は私の命を懸けて民を助けて頂きましょう。

「迎えましょう。門を…開きに参ります」

「はっ！」

私と数十の兵は、門へと向かって歩き出しました。

直斗 side……

『トントントント……！』

「う、ご主人様、門が……！」

桃香が指を指して言いました。

「では、行ってきます。ここの指揮は任せます。が、決して城へは攻め込んだり無断で入ったりはしないこと」

『……御意』

皆が渋々返事をします。

それを聞き、私は城門へと歩き出しました。

.....
「約束は、守って下さったようですね？」

黄忠が私に言いました。

「ええ。では、用件を単刀直入に言いますね？」

「.....何ですか？」

黄忠は少し低い声で真剣な表情をして言いました。

「私の...、私たちの理想に手を貸して頂けないでしょうか？」

「理想.....ですか？」

「ええ、黄巾の乱から始まったこの乱世。ではそれを治めるのに必要なものとは何だと思えますか？人を思いやる心？それとも戦いを

避け、話し合いで解決しようとする優しさでしょうか？」

「……………」

私の言葉に真剣に聞き入る黄忠。

「答えは力。結局は力なんです。ですが、その力の使い方によっては人々を幸せに出来るのではないのでしょうか？」

「幸せに……………」

「力無き人々は、力を持った悪しき心の持ち主によって苦しめられる。そんな世の中になっている今、それを正せるのは正しい力の使い方が出来る者だけ。勿論私たちがそうだと言い張るつもりはありません。が、そうありたいとは思っています。人々を幸せにするために力を使う。それが私たちの理想です。そのためにこれまでも、そしてこれからも戦うつもりです」

「……………何故、益州を攻めるのか聞いても宜しいでしょうか？」

黄忠はさっきまでの雰囲気ではない、穏やかな雰囲気聞いてきました。

「人々に求められたから、それが大きいです。民に重税を掛け、その税を内乱の為の軍資金にする。……それは太守として間違っていると思うのです。税を取るのは庶人たちを守ったり、助けたりする為に必要だから。だけれど、今ここ益州では私利私欲の為に重税が掛けられている。そんなのは許せないから……」

「お話は分かりました。私も、今の太守、劉璋殿は民の為にならないと思つています。もしも貴女がここを治めたなら、民たちに笑顔を取り戻して下さりますか？」

「全力で」

私は即答しました。

「ふふつ、最初から、貴女がここを治めていたならもっと良い国になつていたでしょうね」

「そうですね？」

「ええ。……分かりましたわ。私、黄忠漢升は貴女に力を預けましよう」

そう言って黄忠は、懐から短刀を放り捨てた。

『カランカラン……』

「もし貴女が私利私欲だけの為にここに来ていたのならば、私は貴女を刺してしまいましたわ」

「それは恐い」

ふふつと互いに笑いながら言いました。

「梅沢直斗様、我が真名を貴女にお預け致しましょう。我が真名は紫苑と申します」

「よろしく願います、紫苑」

「ええ、よろしく願います。……ところで、直斗様は噂通りの絶世の美少女ですね。羨ましいですわ」

あ、やっぱりですか…。

「ええと、紫苑？」

「何でしょう？」

「わ、私はその……男ですよ？」

その瞬間、紫苑の周りの空気が凍てついた気がしました。

「あー、ええと、すみません、直斗様。い、今何と？」

「わ、私は男性です……」

「ま、まあ……！これは驚きましたわ……。こんなに美しいのに、男性とは……」

流石は大人の女性。

驚いてもしっかりと冷静にいられているようですね。

「でも、紫苑の方が綺麗ですよ？肌も綺麗で、胸も大きくて」

「あら、直斗様は胸の大きな女性がお好きなので？」

「え、えと…その…はい／＼／」

「まあ、可愛らしいこと」

「うっ…。そ、それよりも、紫苑のことを私の仲間に紹介したいので、行きましょう」

「あら、逃げましたわね？」

こ、これが経験豊富な大人の余裕ですか…。
初体験すらまだの私には勝てる気がしません…。

「い、いきますよー！」

「はいはい」

「ご主人様！」

「ただいま戻りました。皆、こちらの方が黄忠です。我らに協力して下さるそうです」

「ほ、本当に!？」

桃香が言いました。

「はい。皆さん、初めまして、黄忠漢升と申します。真名は紫苑。よろしくお願ひします」

「私は劉備。字は玄德。真名は桃香だよ。よろしくね、紫苑さん」

「はい、桃香様」

「ところでご主人様、紫苑さんに何を話したの？紫苑さんも、何で

「ご主人様に協力してくれるよう決めたの？」

桃香が尋ねます。

「私はただ、我らの理想を正直に話しただけですよ？」

「私は、直斗様の理想……そして、直斗様自身に惚れたからかしらね？」

『なっ！？』

「そういえば皆さん、直斗様のことをご主人様って呼ぶのね。ならば私も、ご主人様と呼ばせて頂きますわ」

「は、はい、どうぞ自由に……」

もう何が何やらわかりません……。

この後、皆が紫苑と真名を交換し合い、紫苑に案内されて場内へ入城。

その後歓迎の宴を開いてもらい、楽しんだのでした。

これで劉備の元に五虎将軍が全て揃い、陣営がより一層強化されました。

これにより、益州平定は大きく近づいたでしょうね…。

最後の五虎將軍、黄忠漢升（後書き）

紫苑さんと戦わずして仲間に〇（＾－＾）〇

厳顔と魏延の二人とは戦いますよ？……多分。

感想、アドバイス待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2575t/>

転生した無敵超人？

2011年8月10日10時44分発行